

研究紀要 20

目 次

天神堂遺跡の蝶群・配石	保坂 康夫	1
人面・土偶装飾付有孔鈎付土器の研究	渡辺 誠	7
渦巻把手状装飾土器の末裔	小林 広和	17
甲斐国巨麻郡における古代牧についての一視点	今福 利恵	25
山梨県の中世石仏 —六地蔵石幢(単制)一	坂本 美夫	68(1)

2004

山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

序

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターの日頃の研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第20号を刊行する運びとなりました。

今回は5編の論文と資料報告を掲載しております。保坂康夫「天神堂遺跡の礫群・配石」は、県内で最初の発見例である天神堂遺跡の旧石器時代礫群について詳細に検討を加えたものであります。拙稿「人面・土偶装飾付有孔鍔付土器の研究」では山梨県を中心に分布する人面・土偶装飾のみられる有孔鍔付土器と関連資料の集成を行い、若干の検討を行ったものであります。小林広和「渦巻把手状装飾土器の末裔」は駁迦堂遺跡から出土した曾利式期の渦巻把手状装飾土器の検討を通じて、その出自や大把手の消滅段階の様相を考察したものであります。今福利恵「甲斐国巨麻郡における古代牧についての一観点」では、調査を担当した百々遺跡の成果の検討から、八田牧が近世までその伝統を残すと考え、巨麻郡下の古代牧について『甲斐国志』などの近世史料を以て逆に中世・古代と繋り、検討を加えたものであります。坂本美夫「山梨県の中世石仏」では、六地蔵石幢を取り上げ、県内での集成を行い、その分布状況や形態についての考察を行ったものであります。

県立考古博物館と埋蔵文化財センターは一昨年に20周年の節目を迎え、今年で21年目となりました。また、新たな一步を踏み出したところであります。これからも県民はじめ多くの皆様に考古学や埋蔵文化財を通じて、郷土山梨の歴史や文化財保護への理解を深めていただけるよう機関であるためには、各種の研究活動が必要であります。そのためにも、本誌が考古学研究並びに埋蔵文化財の理解と普及に少しでも寄与できれば、望外の喜びとするところであります。各位からのご教示と忌憚のないご批判を賜りますようお願い申し上げます。

2004年3月

山梨県立考古博物館館長
山梨県埋蔵文化財センター所長

渡辺 誠

研究紀要1号～19号執筆一覧

1号	坂本美夫 新津 健 小野正文	甲斐の葬(評)郷制 金生遺跡発見の中空土偶と2号配石 縄文時代早期・前期初頭の土器について	平山 優 坂本美夫	甲府城の歴史的位置 —甲斐国職業期研究説— 山梨県における月待信仰について —特に石造物の展開を中心として—
2号	保坂康夫 小野正文 新津 健 中山誠二 坂本美夫	山梨県下の先土器時代史料の検討—1— 所謂円錐土偶について 石塚考 —中部・関東を中心とした出土状況から— 甲斐における弥生文化の成立 辻金具・雲珠考	長沢宏昌	甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土 塚墓と土器棺再葬墓 —井ノ尻Ⅲ～曾利Ⅰ式期の場合—
3号	長沢宏昌	縄文時代前期末～中期初頭の土器底部にみ られる彫刻痕について 田代 孝 末木 健 坂本美夫 笠原安夫・藤沢 浩 長沢宏昌・中山誠二	五味信吾・野代幸和 高橋みゆき	山梨県大泉村甲ツ原遺跡出土 猪冶の脊椎同定(1) —赤外吸収スペクトル分析— 金生遺跡出土の土器II 山梨県東八代郡中道町金沢出土の土師器類
4号	長沢宏昌 中山誠二 小林広和 小林広和	山梨県内出土縄文土器底部庄痕の研究 弥生時代終末における上の平遺跡の集落構 造 縄文時代の土壤について	宮里 学 田代 孝 柏木秀俊 高野玄明 小野正文	縄文時代の石器再考—打製石斧(1)— 中世六十六部聖の奉納経情について 近世軒平瓦の分類について —中府城を例にして— 県道塩平～座平線披工事に先立つ牧丘町 曲田遺跡調査報告 甲府市八幡神社採集の縄文土器
5号	末木 健 森 和敏	甲斐伝教文化の成立 甲府盆地における条里型地割の事例	坂本美夫 吉岡弘樹 柏木秀俊 佐野和朗	劍豪形奇葉鏡の階層性とその背景 経塚古墳についての予察 近世軒平瓦の分類について —甲府城を例にして— 山梨県内考古資料の教材化
6号	浅利 司 森原明廣 保坂康夫 河西 学	諸条件圧縮力を有する土器について —中込遺跡出土の資料を中心に— 関東地方におけるカマド初現をめぐって 立石遺跡発掘調査報告—1989年岡道358号 線括幅等に伴う調査 立石遺跡での先土器時代遺物を包含する地 層	沢登正人 大谷満水	—学校現場へのアンケート調査に基づいて— 歴史教育実践と考古学の関連についての一 考察 —考古学の成果を取り入れた授業から考え たこと— ユング心理学を導入した縄文時代の溝巻文 の解釈
7号	中山誠二 今福利恵 千野祐道 松谷曉子 外山秀一	身洗沢遺跡における外米系土器群の諸例 身洗沢遺跡出土の木製品 身洗沢遺跡出土品の樹種について 身洗沢遺跡出土植物種子について 山梨県身洗沢遺跡の立地環境と撮作	田代 孝 長沢宏昌 保坂康夫 大庭 謙	近世の回國塔と回國納経 都留市中谷遺跡出土の縄文土器底鉢庄痕に ついて 山梨県下の遺跡・住居跡数変動と通史的理 解 考古資料の教材化についての一考察
8号	新津 健 出月洋文 間島信男・河西 学・保坂康夫	金生遺跡出土の土器I(後期) 向の木神社遺跡出土の須恵器長頸瓶につ いて 山梨県甲府市相川河 床から発見されたナ ウマンゾウ白骨化石 について	新津 健 山本茂樹	山梨における後期土偶の展開 清里バイパス第1遺跡の施し穴の若干の考 察
	松谷曉子・長沢宏昌	明野村中村道祖神遺跡出土炭化 物について	森 和敏 野代幸和・鈴木由香	4基の前方後円墳の設計—山梨県における一 八代町瑞應寺遺跡および山梨市 七日子(摩寺)遺跡出土遺物につ いて
9号	磯貝正義 保坂康夫 今福利恵 新津 健	いわゆる東国造について 漆器と個体消費の関わりについて 勝坂式土器成立期の集団関係 中期後半の集落③ —千葉県高根木戸遺跡の分析— 縄文時代生産活動と石器粗製分析 甲斐弥生土器編年の現状と課題 —時間軸の設定—	李 映福 野代幸和	長江デルタ地帯における新石器時代文化 團の移動及び縄文文化へのその影響 縄文時代前頭後半から中期初頭段階におけ る異系統上器流入の様相について
	小林健二 森 和敏 森原明廣	外来系から在来系へ —甲斐のS字縄の変遷— 柱の礎石のある豊穴住居跡 山梨県地域における内耳土器の系譜	市川恵子 新津 健 山本茂樹・網倉邦夫	—山梨県に見た出土事例を中心に— 縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶 へ —御坂町桂野遺跡出土土偶に関する一考察— 縄文晚期後半遺跡分布の意味と課題 —山梨県における遺跡の継続性と立地から— 甲ツ原遺跡発掘調査報告
				(平成10年3月3日から3月26日)

小林公治・吉川純子・鶴泉岳二	大月遺跡から検出された動植物遺体とその性状(1)	小林 稔 宮久保真紀	銀沢河岸跡出土の泥瓦子について 甲府城内葡萄酒醸造所について —個産ワインの発祥地甲府—
笠原みゆき 保坂康夫	大月遺跡の敷石住居について 御動使川扇状地の占地形と遺跡立地	鶴泉岳二・小林公治	大月市大月遺跡(第7次調査)出土の動物遺体
河西 学 小林健一	中部横断道試掘調査のテラフア分析 塙山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理	奥水達司	横針前久保遺跡出土黒曜石のフィッシュントランク年代測定
石神孝子 兩宮加代子 崎田 順	山梨市牧洞寺古墳採集の須恵器について 山梨県出土木製品について 甲府城の鬼門守護と除災招福の思惟	坂本美夫	山梨県の中世石仏 —地蔵石仏(光背形)を中心として—
坂本美夫 坂本美夫	一編荷車輪にみる考察— 高根町荒輪横森前墓地所在の地蔵輪刻板碑 山梨県における月待信仰について —文献を中心として—	19号 保坂康夫	台形様石器にみられる「急角度微細加工」の実験的検討 三田村美彦
16号 長沢宏昌	山梨県における縄文時代早期末の様相—国中地域と郡内地域—	小野正文 綱谷邦夫 長沢宏昌 新津 健	山梨県の木島式土器について 天神遺跡出土石匙の起源と系譜 山門地の漁港と打矢石鍬の用途 上ノ平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺
小林公治・中野豊子・長田正広 磨石・磨石・石皿と注口土器の使用方法に関する一事例 一人月遺跡出土繩文上器・石器に対する脂肪酸分析結果と考古学的検討—	五味信吾	山梨県北巨摩郡大泉町甲ヶ原遺跡出土琥珀の产地同定(2)	
野代恵子	方形周溝墓にみられる儀礼的施棄に関する観点	野代恵子 今福利恵	音の鳴る上偶(2)一岱という機能的可能性— (研究メモ)山梨県における勝坂式土器後半期の素描
保坂康夫	一塊川村荒跡月遺跡の事例より— 東原遺跡の平安時代集落の構造	小林広和	渦巻把手状装飾土器の展開
野代幸和	一実年代軸の設定と集団表象論の試み— 横森赤谷(東下)遺跡出土五輪塔の形態と製作年代について	三森鉄治	一渦巻突起連結土器から渦巻把手土器へ— 米倉山B遺跡出土六道鏡と煙管・火打金に関する基礎的研究
官里 学	県指定史跡甲府城跡の地鎮祭痕 一數寄屋勝手門周辺の遺物集中地點とその意味—	長田 崇・寺川政夫・官里 学	種荷横台工事における強度試験監視計測について
雨宮加代子 坂本美夫	考古博物館カルチャークラス「銅鏡づくり教室」での銅鏡の製作について 山梨県における月待信仰について 一塙山市小屋敷の二十三夜堂を中心に—	楠間美希江	穴穴に関する一考察 —甲府城跡石垣の事例より—
17号 三森鉄治 官久保真紀	道ぎ茅木遺跡の上馬と上馬祭祀の起源 甲府城築城における一条小山の選地について	官久保真紀	甲府城跡葡萄酒醸造所生徒に関する諸史料について
保坂康夫・望月明彦・池谷信一 坂本美夫	一藏風得水・石橋北屋敷遺跡を中心に— 黒曜石原産地と石材の搬入・搬出丘の公園第2遺跡の原産地推定から 山梨県における早期沈線文土器群後半の様相	浅川一郎 村石真澄 野代幸和	甲府盆地の流状化に関する史料 土器堆積観察記録の課題 土器に施された文様とその意味について(一試業)
田口明子 依田幸浩 小柳美樹 吉岡弘樹 湯川秀一	弥生時代の大形打製石斧は農耕具か 一山梨県出土事例をもとに— 御動使川扇状地北部の集落展開について 一塙山遺跡・石橋北屋敷遺跡を中心にして— 一大溪遺跡における副葬石器への理解 —「中国四川省古代文物展」を通じて— 塙山下原遺跡出土の釣手土器について 埋蔵文化財センターが行う学校への教育活動に関する考察	北垣聰一朗 雨宮加代子	丹波山村「お松ひき」にみるソリについて 動物形土器製品の来館者によるアンケートから
田中宗博 坂本美夫	「総合的な学習の時間」にどのように対応したらよいか— 発掘調査と平行した資料普及活動に関する一考察 山梨県における中・近世石塔資料	坂本美夫	—これは何にみえますか?— 山梨県の中世石仏 —塙山市延命院の十三仏—
18号 新津 健 笠原みゆき 三森鉄治	縄文中期釣手土器考② 塙山下原遺跡出土の敷石住居跡について 山梨県内における出土錢貨の現状と課題		

天神堂遺跡の礫群・配石

保坂 康夫

- 1.はじめに
- 2.資料の現状
- 3.礫群の属性

- 4.配石の属性
- 5.天神堂遺跡の礫群・配石の特徴

1.はじめに

南巨摩郡南部町(旧富沢町)万沢の天神堂遺跡は、1970年に発見され、同時に発掘調査された旧石器時代後期の遺跡である。遺跡は万沢小学校の校庭にあり、当時小学校4年生の新井正樹氏によって黒曜石製の石刃石核が採集され、それを旧石器時代のものと見抜いた母親の新井秀子氏が町や働きかけ、当時山梨の旧石器研究を推進していた山本寿々雄氏に連絡し、町長の英断で発掘調査や一部保存が実現した。発掘調査は、山本氏の指導のもと、当時進められていた町誌編纂室の担当者が中心となって、町民主体による発掘調査が8月8日から12日にかけての5日間で実施された。240m²の対象地域にグリッドが設定され、特に南側の84m²について遺物の出土位置の実測がなされる高精度の調査が実施された。その後、出土遺物の実測がなされ、町誌編纂室により翌年の1971年3月に報告書が刊行された¹⁾。

出土遺物については白石浩之氏²⁾、小林広和氏、里村見一氏³⁾などの注目することとなったが、その全体像が明らかになったのは伊藤恒彦氏の再整理による⁴⁾。なお、筆者も天神堂石器群の特徴である槍先形尖頭器の評価をめぐる論議⁵⁾を行っている。

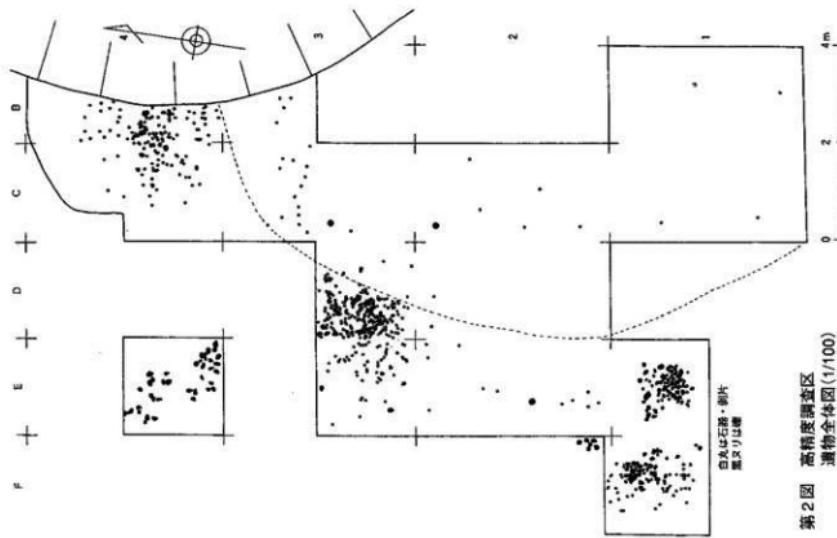
筆者は1997~2002年にかけて行われた町誌編纂事業に参加する機会を得て、報告書では十分記載されていなかった発見から発掘、報告書作成にいたる経過を、保管されていた発掘時の記録・写真等の資料や当時の参加者に取材するなどして検討した⁶⁾。その成果をもとに遺物平面分布の再検討を行うとともに、黒曜石製石器・剥片について望月明彦氏や池谷信之氏とともに麻痺分析を実施した⁷⁾。

ここでは、これまでに詳細が報告されていない礫群・配石について記載する。天神堂遺跡の礫群は県内では最初の発見例で学史的に重要であるとともに、県内では権現堂遺跡(南部町)、丘の公岡第2遺跡(高根町)と3遺跡しか確認されていない希少例でもある。

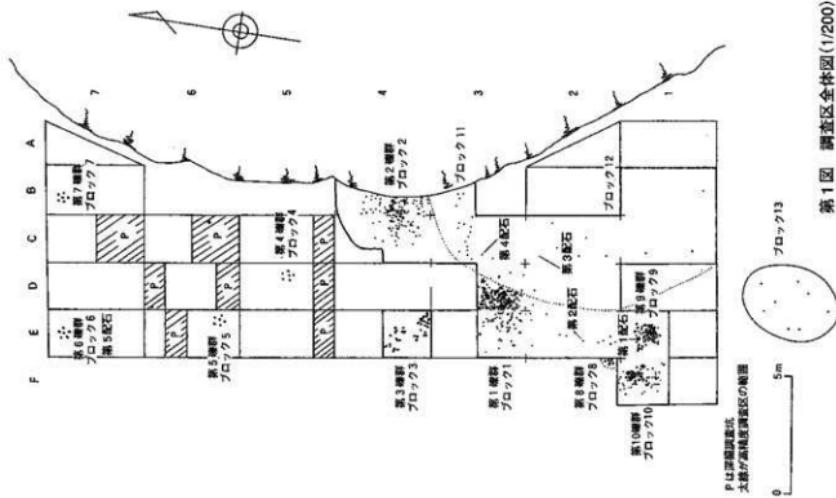
2. 資料の現状

現在保管されている天神堂遺跡出土遺物は、石器・剥片類が936点(ナイフ形石器35点、槍先形尖頭器7点、影器5点、石錐1点、削器1点、楔形石器2点、石核10点、敲石2点、剥片873点)と礫98点(第5礫群構成礫54点、第8礫群構成礫31点、配石構成礫5点、ブロック内出土礫8点)の総計1034点が確認できる。また、第1礫群については1×1mほどが土層ごと切り取られ県立考古博物館に常設展示されている。

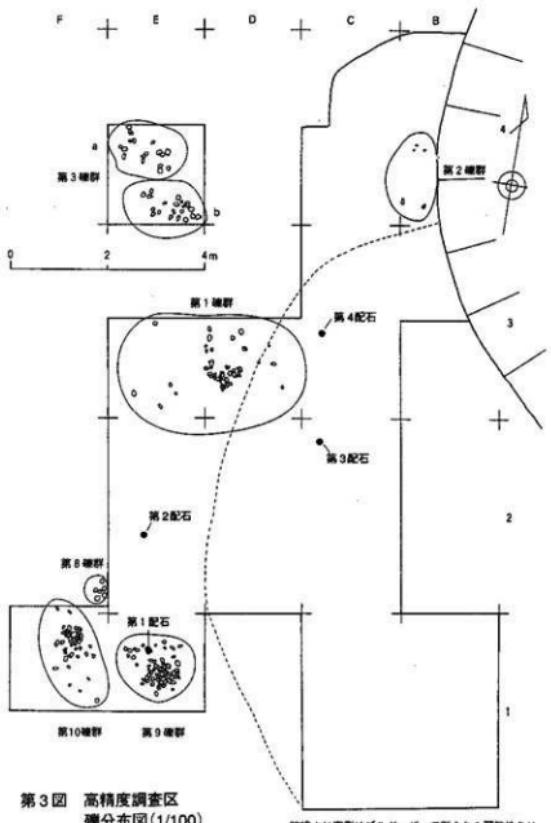
報告書によると、礫群は第1礫群から第10礫群までの10基まで番号がつけられている(第1図)。この内、第1・2・3・9・10号礫群については1/4縮尺の平面実測図が報告書に添付されており構成礫の平面分布状況が確認できる。第4図はこの1/4縮尺添付図を原図として石器・剥片を削除し、礫の輪郭だけをトレースしたものである。また第1~3図はこの図を縮小し報告書の遺物・遺構分布図(報告書図版4、P40)の所定の位置に貼り付け、発掘時の写真から高精度調査範囲を推定記入したものである。



第2図 調査区高精度調査区
遺物全図(1/200)



第1図 調査区全体図(1/200)



第3図 高精度調査区
分布図(1/100)

確認より裏側はブルドーザーで削られた可能性あり

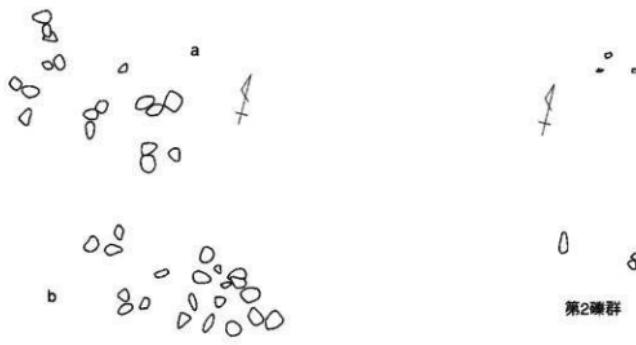
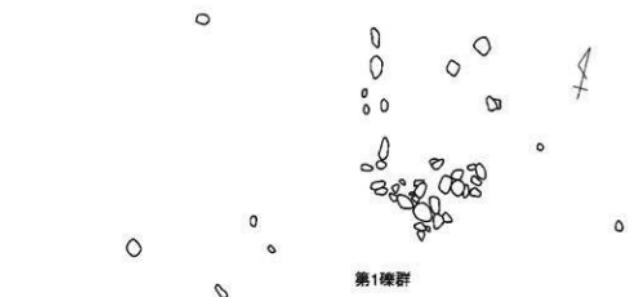
第1石群については先述のとおり、構成礫の多くは取り上げられず土層ごと切り取られ保管されている。第2石群については、残された実測図等から確認できる礫数は6点であり、内1点のみが現存する。第3石群は構成礫は現存しない。第9・10石群については発掘以後にコンクリートブロックで小屋がけされ現地保存されていたが、現在ではそれが撤去され石群も所在不明となっている。実測図から確認できる構成礫数は、第1石群48点、第2石群6点、第3石群39点(分布図からa-18点、b-21点の2群に区分できる)、第9石群65点、第10石群50点である。なお、第9石群には配石が1点伴っている。また、第10石群の中央部には石器石材の泥岩原石が1点(石核としてカウント)見られる。2枚の剥離が見られ、重量968gで非焼けである。これは石群構成礫にはカウントしていないが、分布図を見ると周りの礫を排除して石群の中央に据えられたか、他の石群構成礫と一緒にまとめられたといった状況が認識でき、石群との一体性が伺える興味深い出土状況である。第4・6・7石

群については平面図ではなく、遺物は石器・剥片は確認できるものの、現在保管されている遺物からは石群構成礫は確認できない。第8石群については分布図はないものの、出土地点が調査区全体図に記入されていた(第1・3図)。第5・8石群については、南部町(旧富沢町)教育委員会が管理する倉庫内に石群構成礫と配石4基の構成礫が保管されていた。

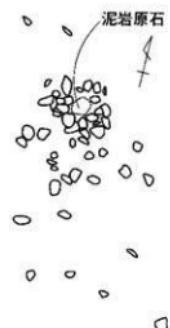
天神堂跡の石群は石器・剥片の分布も含んで命名されており、必ずしも石群とは限らずブロックのみの場合も考えられる。現状で確認できる石群は、第1・2・3・5・8・9・10石群の7基であり、構成礫そのものが現存するのが第1・5・8石群の3基である。第4・6・7石群は石器・剥片のみの分布であるブロックであった可能性がある。

3. 石群の属性

ここでは現存する石群構成礫について記載する。第5石群については、54点の構成礫が確認された。内5点

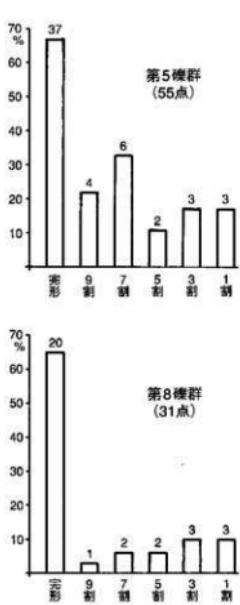


第9砾群



第10蝶群

第4図 磯群平面図(1/30)

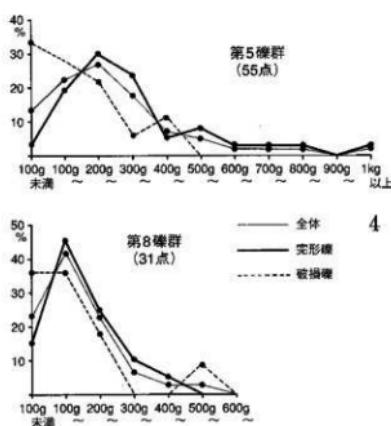


は複数の礫が接合した礫で、接合状態で1点としてカウントしている。総重量14760g、平均重量273g。石質は砂岩49点、礫岩3点、安山岩2点である。7割弱の37点が完形礫であり、破損礫は9割から1割までの完形度が見られる(第5図)。完形礫の平均重量は321g。円礫から亜円礫の円磨度の礫で、スヌ状付着物7点、タール状付着物が3点の礫に見られる。重量構成を見ると完形礫が200g台が最も多く、800g台まで分布が見られる。第6図では配石もグラフに加えたが重量が2280gあり、礫群構成礫と1kg以上の開きがある。

第8礫群は31点が確認された。総重量5656g、平均重量182g。石質は砂岩26点、礫岩3点、安山岩1点、粘板岩1点である。完形礫が6割強の20点であり、他の完形度の礫が少ないながらほぼ均等にある。完形礫の平均重量は192g。円礫から亜円礫の円磨度の礫で、スヌ状付着物2点、タール状付着物が2点の礫に見られる。重量構成では完形礫が100g台が最も多く、400g台まで分布する。

両者を比較すると、石質では砂岩を中心とし、円礫から亜円礫を礫を用い、完形度では完形礫が6~7割と多い点が共通するが、重量構成で違いが見られる。第5礫群がやや重い礫を主体としており、当初持ち込まれた礫の特徴を示す完形礫の平均重量では第5礫群が321g、第8礫群が192gと130gもの開きがある。総重量も第5礫群は第8礫群の3倍近くある。

なお、第2礫群構成礫で唯一現存する礫が1点ある。BC-T-6-97の注記があり、295gの完形焼け礫で砂岩である。



第6図 碓群構成礫の重量分布

4. 配石の属性

配石は5基が確認できる。報告書の段階では配石は認識されていなかった。ここでは、現在確認できる1kg以上の礫を配石として区分し記載したい。第9礫群の礫は先述のとおり現地保存されていたものの、その後裏い屋の撤去で所在不明となったが、その内、大型の礫1点が後場庁舎内の展示ケースの中に保管されていた。1197gの非焼け完形礫で砂岩で亜角礫である。E-1-T-6-13の注記がある。これを第1配石とする(第1・3図)。E-2-6と注記された非焼け完形礫で亜円礫の砂岩。重量6850gと最も重い。第2配石とする。C-2-6と注記された非焼け完形礫で亜円礫の砂岩。重量1340g。第3配石とする。ただし、出土位置については記録がないが、出土状態の写真からおおむねの位置を判断した。C-3-2と注記された非焼け完形礫で円礫の砂岩。重量4380g。第4配石とする。後世の搅乱溝の近くから出土してい

るが、出土状態の写真などから溝の外から出土していると判断した。E-6グリッドの第5疊群として取り上げられた疊の中に、2280gの完形焼け疊で円疊の砂岩があった。疊群構成疊とは大きさがかけ離れており配石として区分した。第5配石とする。

石器・剥片の分布との関わりを見ると、疊群に伴うように近接するもの2基(第1・5配石)、ブロック内に位置するもの1基(第2配石)、ブロックや疊群から離れた位置に点在するもの2基(第3・4配石)の3種類が見られる。

5. 天神堂遺跡の疊群・配石の特徴

天神堂遺跡の疊群は県内で最初に発掘調査され確認された疊群であり、学史的に重要である。報告書の記述から、やや産む掘り込みを伴うものとして報告され、そうした疊群として注目されたことがあるが、出土レベルの記録がなく正確な分析を経たものは疑問であり、出土状況の写真から判断して疊群についてはそうした状況は見て取れない。おそらく、遺物分布が上下幅をもって出土したのを掘り込みと誤認したものと思われる。

資料の現存状況や記録から、疊群7基、配石5基が確認できた。疊群はいずれもブロックと重複している。この内、密集型の第9疊群には石器・剥片が分布するもののその数が極めて少なく、疊群の周間に分布しており、密集型疊群に重なるブロックの標識的なあり方を示している。また、配石は疊群に伴うように近接するもの2基、ブロック内に位置するもの1基、ブロックや疊群から離れて位置するもの2基が見られ、この時期の遺跡で見られる疊群・配石のあり方をすべて示しており、やはり標識的なあり方である。

今回確認された第5・8疊群の疊は、完形疊の重量分布が示すように採取基準が異なることが推定された。疊採取地点の疊重量組成の違いを反映しているとか、機能する対象の違いであるとか、採取に当たった人間の違い(大人と子供、女性と男性など)といった解釈も可能である。

天神堂遺跡の現存する疊群・配石構成疊は学術的価値が高く、将来に向けて大切に保存すべき重要な資料である。

なお、疊群・配石構成疊および、石器・剥片等の資料は全て県立考古博物館に寄託されており、当面の間は当館が管理している。

謝 辞

本稿を草するにあたり、富沢町(現南部町)教育委員会および当教育委員会の遠藤一明氏、富沢町誌編纂室の望月安子氏にご助力いただいた。記して御礼申し上げる次第である。

註

- 1) 富沢町誌編纂室 1971『天神堂遺跡』
- 2) 白石浩之 1974「尖頭器出現過程における内容と評価」『信濃』第26巻台1号
- 3) 小林広和・里村晃一 1976「山梨県富士川下流域出土の初期尖頭器について」『古代文化』第28巻第4号
- 4) 伊藤恒彦 1979「天神堂遺跡石器群の再検討」「中斐考古16の2」
- 5) 保坂康夫 1999「山梨県富沢町天神堂遺跡における両義の石器の認識と位置づけ ナイフ形石器と尖頭器の狭間一」「歴史研究」第8号
- 6) 保坂康夫 2002「旧石器時代の富沢町」「富沢町誌」
- 7) 保坂康夫・望月明彦・池谷信之 2003「石材管理と石器製作―山梨県天神堂遺跡の黒曜石产地推定と原産地クラスターの抽出から―」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告」第11集

人面・土偶装飾付有孔鍔付土器の研究

渡辺 誠

-
- 1.はじめに
 - 2.事例の検討

- 3.関連資料の検討
 - 4.考察
-

1.はじめに

筆者らは人面・土偶(人体文を含む)装飾付土器のうち、すでに深鉢形土器・釣手土器・注口土器について、その基礎資料の集成と若干の検討を行なってきた¹⁾。これらのなかでもっとも重要な深鉢形土器の人面について、土器面につく位置などからI~IV類に分類し、IV類をもっとも発達したタイプと考えた。そしてその時期は縄文中期前半の勝坂・藤内・戸戸尻式期であり、その分布は山梨県を中心とした西関東から長野県中・南部にかけての範囲であることを明らかにしてきた²⁾。

縄文前期に出現し中期前半に発達した有孔鍔付土器もまた、その中心地域はほぼ同様である³⁾。そしてこれらにも深鉢形土器と共に、人面・土偶装飾がみられるのであり、本稿ではこれらと関連資料の集成を行い、若干の検討を行なうこととする。

2.事例の検討

9例出土している。東京都1例・神奈川県1例・山梨県3例・長野県4例である。長野県にもっとも多く、山梨県の3例も長野県寄りの地域である(図1)。これらを東から順に検討する。

(1) 東京都調布市原山遺跡出土例(図2-1、写真1-1)

調布市教育委員会による1993年の発掘においてSI-01住居址より出土し、次のように報告されている⁴⁾。

有孔鍔付土器は底部が故意に壊されている以外はほぼ完形品で、住居中央部北側の床面から僅かに浮いた状態で出土している。ほぼ正位に近い状態であるが、胴部には浅鉢形土器の大型破片を覆せ、欠損する底部の部分には、円筒深鉢の土器の底部を嵌め込んだ、きわめて特異な出土状態である。器形は、頸部が直線的に立ち上がり、胴部が大きく張り出した壺形で、口径24.5cm、高さ31.5cm、胴部最大幅39cmを計る。

文様は胴部と頸部に施されている。文様帶は、隆帯によって片と口を表した人面を正面とし、これを中心に、腕、手、指を左右対称に配し、さらに2単位の菱形区画文に環状の凸帯を配した文様構成である。

この出土状態は、住居廃絶時の祭祀行為を示している。このような出土例は、山梨県須玉町津金御所前遺跡を代表的な例として、人面・土偶装飾付深鉢形土器・釣手土器にしばしば認められる。そしてそれらは女神の身体に見立てられた土器の底部を抜くことによって、再生を前提として女神を殺害する象徴的な儀礼の行なわれたことを示唆している。

このように考えると、顔を囲むのは手ではなく、足とみる可能性が生じてくる。手ではそのような状態が実際ににはあり得ないが、足であればヨガのポーズのなかにみることができる。それは股間から新しい生命的の誕生を示していると考えられ、儀礼のなかでこのような所作が実際あったと理解すべきであろう。2単位の菱形区画文も陰部の表現とみられる。

時期は勝坂式期である。

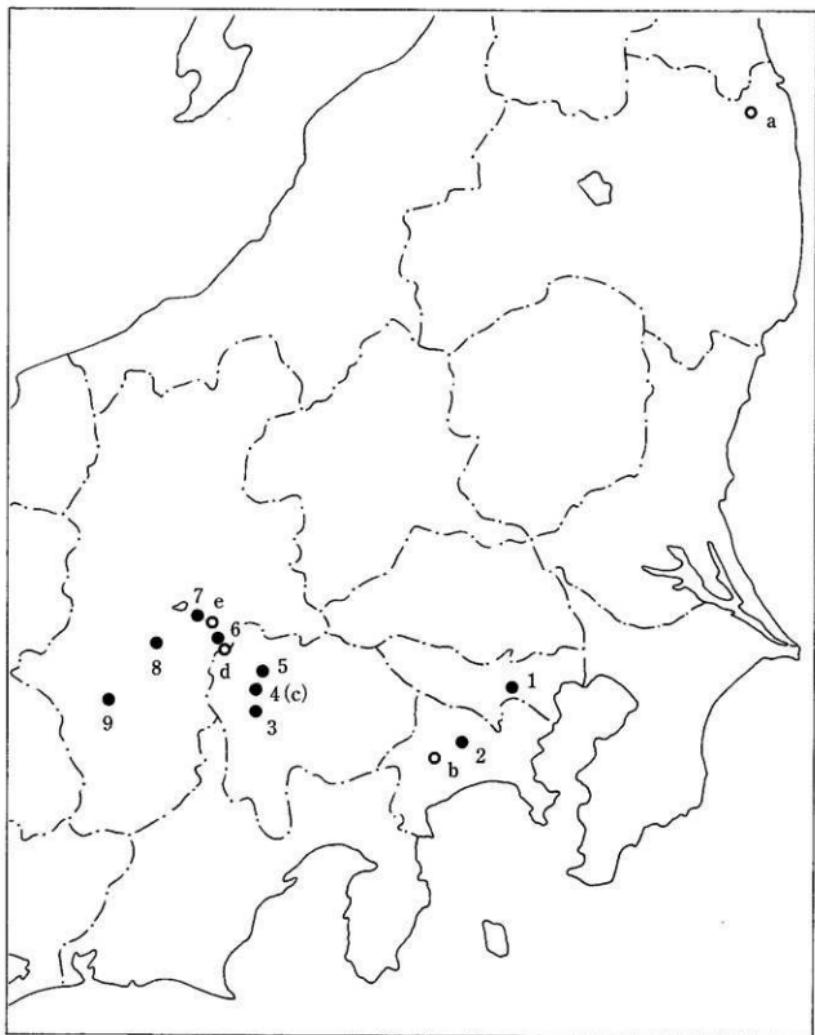


図1 人面・土偶装飾付有孔銅付土器(●印)および関連資料(○印)出土遺跡分布図

1:原山 2:林王子 3:鎧物師屋 4:坂井 5:諏訪原 6:諏内 7:札沢 8:久保上ノ平
9:大野 a:上橋窪 b:寺山金目原 c:坂井 d:井戸尻 e:中道尾根

(2) 神奈川県厚木市林王子遺跡出土例(図2-2)

本例も住居址より出土しており、次のように記されている³⁾。

住居址の中央部から炉の周辺部にかけて、覆土中及び床面近くから多数の礫が検出されている。人体装飾

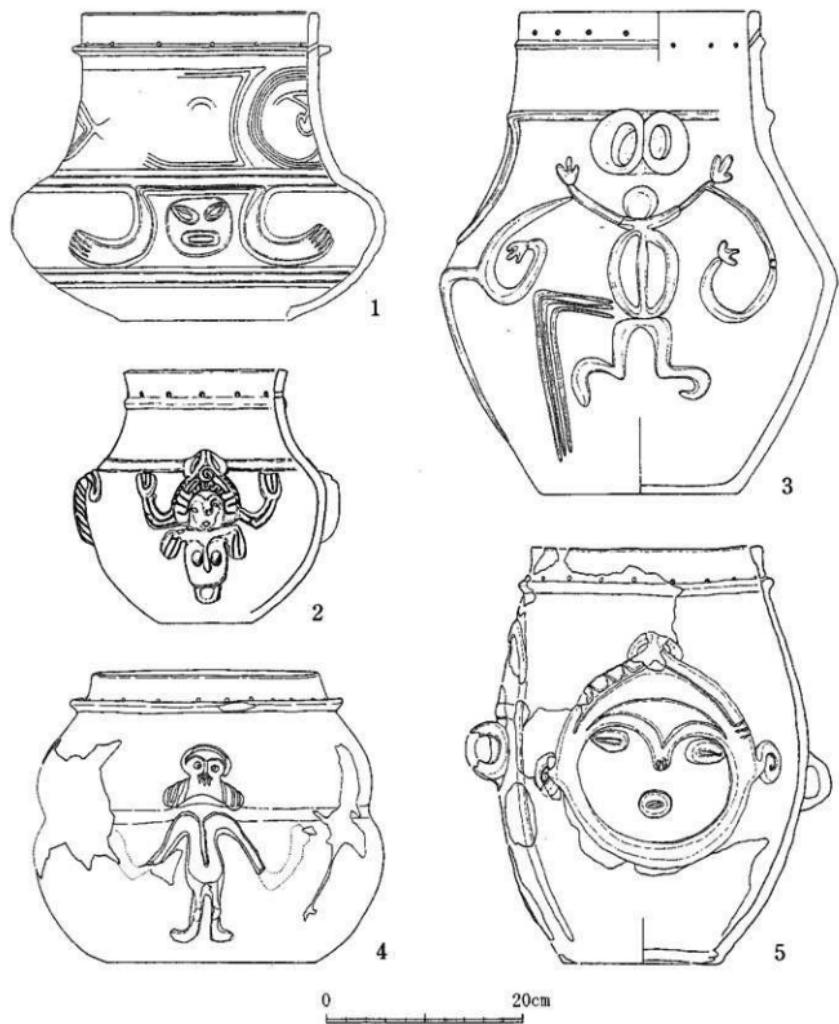


図2 人面・土偶装飾付有孔鉢付土器実測図(1:調布市教育委員会提供、他は報告書などより引用)
1:原山 2:林王子 3:藤内 4:久保上ノ平 5:大野

付有孔鉢付土器は、炉の近くから、他の勝坂式土器とセットになって発見された。

この人体装飾付有孔鉢付土器は、口頸部には小孔がめぐり、鉢状の張出しがついている。球状に張出した胸部中央に、妊婦を思わせる人体装飾が付けられている。頭から伸びた手は左右に広げており、首から垂れた手は小さくどちらも三本指である。人体の胸部は自然と細まって、足の表現はみられない。人体の両側に

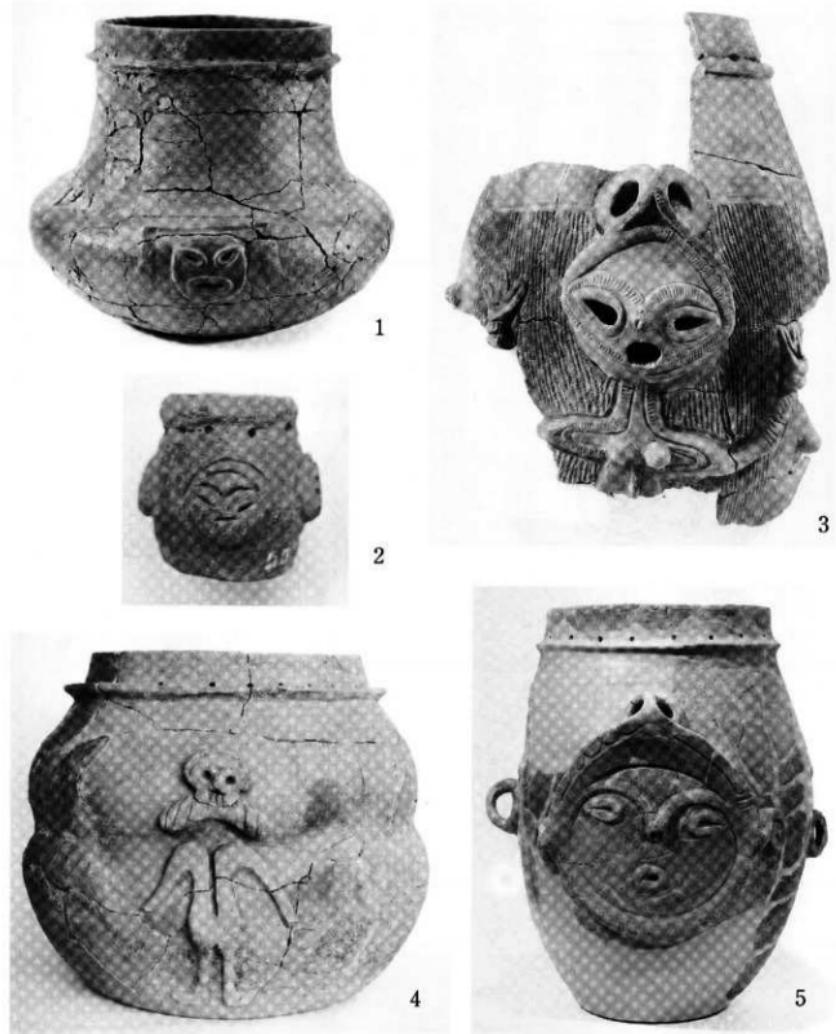


写真1 人面・土偶装飾付有孔銚付土器写真(縮尺不同)
1:原山 2:坂井 3:諏訪原 4:久保上ノ平 5:大野

は、頭を上に体をまいた二匹の蛇体装飾がみられる。蛇頭は三角形をなしているところから、マムシを表現したものであろう。現存部高さ 25.5cm、人体像の高さ 17.8cm である。

本例も底部を欠き、出土状態とともに原山遺跡例に類似している。またこの頭部表現は、人面装飾付深鉢形土器の人面装飾のもっとも発達したⅣ類とされるものに共通している。三本指は普通の人間ではなく、カミで

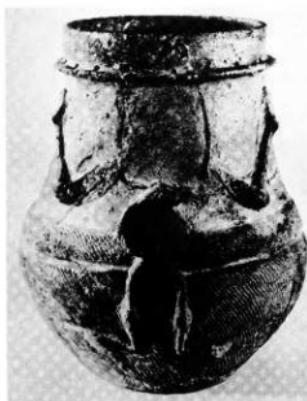


写真2 札沢遺跡出土土偶装飾付有孔鉢付土器写真(日本原始美術1より)



図3 鎔物師屋遺跡出土土偶装飾付有孔鉢付土器実測図(報告書より)

あることを示していると理解される。

(3) 山梨県南アルプス市(旧檍形町)鎔物師屋遺跡出土例(図3)
本例も住居址より出土しており、次のように記されている^④。

P1付近に発見とともに床面より若干浮いた状態で出土。口径24cm、胴部細大径36cm、器高54cmを有する。中期前半(藤内式期)。

(4) 山梨県韮崎市坂井遺跡出土例(写真1-2)

志村龍藏氏の発掘資料である^⑤。

これは例外的な小型品である。完形で、口径6.1cm、高さ7.9cm。人面は直径3.9cmの円形でやや膨らみ、他に同様な膨らみが2個あるが、それらには人面はみられない。文様や共伴資料がなく、中期とみられるが、細別は不詳である。

(5) 山梨県北巨摩郡明野村諏訪原遺跡出土例(写真1-3)

明野村教育委員会による2003年の第8次調査によって発掘され、次のように発表されている^⑥。

有孔鉢付土器に土偶状の装飾を貼り付けた深鉢形土器で、直径55cm、深さ75cmの土坑底部から出土しました。土器は土坑に埋められた時点では既に割られ、土偶装飾の上半分になっていたようです。その後、新しい住居の柱穴を掘る際に、さらに一部がこわされ失われています。推定される土器の大きさは、直径30cm、高さ50cm程度で、現存する土偶装飾は縦12cm、横14cmです。

この土偶の手は、次の藤内遺跡出土例に類似し、通常の腕の表現にさらに左右に大きく広げた腕を加えている。また頭部は中空になっていて、人面装飾付深鉢形土器のもつとも発達したIV類に共通している。割られて埋められているのは、原山・林王子遺跡出土例と同様に、祭祀の後に再生を祈願したものと考えられる。井戸尻式期。

(6) 長野県諏訪郡富士見町藤内遺跡出土例(図2-3)

藤森栄一・武藤雄六氏らによって発掘された特殊遺構の出土品であり、井戸尻I式の標識資料を構成している土器でもある。この特殊遺構は住居址群に囲まれた広場にあって、きわめて祭的な性格が強い。有孔鉢付土器は大型で、高さ50cmあり、次のように記されている^⑦。

有孔鉢付土器は、これはまた、最高に発達した頃の優品で、直立する口縁、その下部の第一鉢と、その上をめぐる16個の小孔、そして第二の鉢帯、これが、この樽上土器の機能についての本質的な部分で、用途の如何は、この個所の解釈如何にかかっていると考えていい。

さらに胴部をめぐる施文も、裏面は太陽を思わせる二重円で赤く塗彩されている。表面は奇妙な生物らしいものを表現し、三本指の掌らしいものの描写がここにもでてくる。これについてはいろいろな説がある。トカゲ説、カエル説、人体説、そのうち踊る人説などもある。

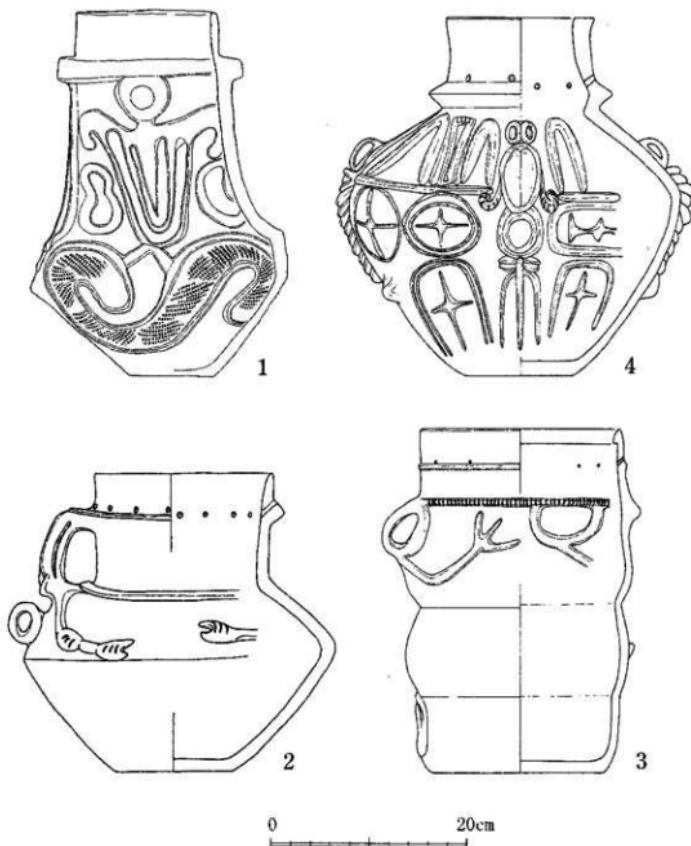


図4 関連資料実測図(各報告書より引用) 1:上柄窪 2・3:井戸尻 4:中道尾根

土器形態の機能を考える論旨によって、具象する生物が変わってくるようである。

腕の表現は興味深い。両手首から下に、大きく円を描くように第2の腕が追加されている。胸部は丸く膨らみカエル説の根拠ともなっているが、妊娠状態を示しているとも考えられる。また下腹部からは左にくの字に曲がる表現がみられ小便とみる人もいるが、酒器とみれば女神の身体から酒が出てくることと同じことになる。

(7) 長野県諏訪郡富士見町札沢遺跡出土例(写真2)

『日本原始美術』1に、藤森栄一・江坂輝弥氏によって次のように紹介されている¹⁰⁾。

この土器にじ登るよう人体かと思われる浮文が描かれている。四肢の先端が水かきようにも親られ、江上氏の蛙説も一考に値する。中央のハート形の部分は、この時期の土偶の臀部によく見るところである。

頭部を欠くが、上記のように臀部の切れ込みがあるので、後ろ向きで上器を抱え込んでいる表現とみられ、両腕をあげているのもこのポーズに関係があると考えられる。高さ35.2cm、茎内式期。出土状態などは不明である。



写真3 関連資料写真(縮尺不同) 1:上柄窪 2:寺山金目原 3:坂井

(8) 長野県上伊那郡南箕輪村久保上ノ原遺跡出土例(図2-4, 写真1-4)

南箕輪村教育委員会による1997年の発掘において40号住居址より出土し、次のように報告されている¹¹⁾。
住居址西側壁下より出土。中期中葉頃と思われる。

高さ29.9cm、口径21.3cm、胴径35.6cmで、欠損部も多い。

土器の形態は中央がややくびれたヒョウタン形をなし、全体に赤色塗彩が施されていたと思われる。土器正面に人体文、裏側に橋状の把手が付く。人体文は高さ19.9cm、幅12.2cmで、頭部の一部と両手の肘より先の腕部分、及び左足つま先部分が剥落している。顔は楕円形につくられ、その下にへの字形の隆帯が付く。腹部は膨らみをもち、そのラインは出尻上側に類似する。

(9) 長野県木曾郡大桑村大野遺跡出土例(図2-5, 写真1-5)

大桑村教育委員会による発掘において22号住居址より出土し、次のように報告されている¹²⁾。

口径推定23.8cm、底径推定16.5cm、器高推定42.5cmを測り、最大32.2cmと丸く張った胴部の正面には中位に縦24.2cm横25.3cmの人面装飾が付く。人面装飾部に赤色塗彩の痕跡が、かすかに観察される。裏側については、破片が皆無であり詳細は不明。中期中葉井戸尻Ⅲ式期。

以上の9例は、ほとんど中期前半(前・中葉)の勝坂、藤内・井戸尻式期に属し、その分布は山梨県を中心とした西関東から長野県中・南部にかけての範囲であり、人面装飾付深鉢形土器のもつとも発達したⅣ類と、時期も分布も一致している。また出土状態・残存状態およびモチーフにおいても、「死と再生」の儀礼を示唆していることも、共通する特徴として指摘することができる。特に原山遺跡例は、その儀礼に一步踏み込んで理解する大きな手がかりを提供しており、きわめて注目される。

3. 関連資料の検討

関連資料とされるのは、器形と文様において人面装飾付有孔鈎付土器の変化形態とみられるもので、5遺跡よ

り8例出土している。福島県1例・神奈川県1例・山梨県1例・長野県2遺跡1例である。長野県にもっとも多く、山梨県の2例も長野県寄りの地域である。この分布状態は人面装飾付有孔鈎付土器のそれとほぼ同じであるが、大きく離れて福島県下に拡大していることは、注目すべき相違点である(図1)。これらを東から順に検討する。

(a) 福島県相馬郡鹿島町上柄窪遺跡出土例(図4-1,写真3-1)

鹿島町教育委員会による1967年の発掘調査において、中期末大木10式期の敷石住居址が検出され、この壁際の床面より、有孔鈎付土器類似土器が出土した。全体の形状は有孔鈎付土器ときわめて類似しているが、鈎はあっても小孔をもたない点は異なっており、退化形態とみることができ、次のように記されている¹³⁾。

中心の炉から東方1.7mの地点に、口を外に向けて倒れている壺が発見された。花びん型とでも呼びたいような幾分先細りの長大な頸つきの土器である。

口径12cm、胴部の直径19.7cm、高さ29.5cm。口縁部に近く幅1.5cmの「たが」状の凸帯があり、左右両端は紐通しの穴となっている。この穴から肩部の耳(欠損して痕跡だけ)へ紙を挟むかのよう二条ずつの太い隆線がある。文様は他の土器とほぼ同様の隆線に閉まれた磨消に加え、更に盾型様のものにゆがんだ円形をくみ合わせた異様な曲線模様が施され、極めて複雑である。

これらの磨消繩文は太いS字形を呈し、典型的な大木10式の文様である。そしてこの磨消繩文を除いた部分が人体文である。目鼻を省略した顔、両腕と胴部が表現され、脚部を欠いている。中期前半の土偶装飾付有孔鈎付土器が器形・文様をやや退化させつつも、時期が下り東北地方南部にまで伝播していることを示している好資料である。また酒器として発達した後期の注口土器への、連続性を示唆している点においても重要である。

(b) 神奈川県秦野市寺山金目原遺跡出土例(写真3-2)

秦野市教育委員会の発掘資料であるが未報告である。ご好意によって使用させて頂くことができた。現在同市立桜土手古墳展示館に展示中。

有孔鈎付土器の変化形態とされる両耳壺の、把手部分破片に人面がみられる。破片の大きさは高さ8.2cm、幅11.6cm。時期は中期末の曾利V式期。

(c) 山梨県韮崎市坂井遺跡出土例(写真3-3)

志村澣藏氏の発掘資料である¹⁴⁾。

金目原遺跡出土例と同様に、両耳壺の胴部に人面がみられる。破片の大きさは高さ6.8cm、幅12.5cm。目鼻を欠くが、眉と口が表現されている横長の顔の大きさは、高さ4.9cm、幅6.2cm。中期後半とみられる。

(d) 長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡出土例(図3-2・3)

藤森栄一氏らによって発掘された有孔鈎付土器が2点みられる。共に中期前半の井戸尻I式期の4号住居址出土品である¹⁵⁾。

第1例は壺形で、高さ30cm(図4-2)。

第2例は3段くびれの樽形で、高さ35cm(同3)。

筆者が注目するのは、人面装飾こそみられないが、共に上部に3本指をもつ両腕が表現されていることである。これは人面・土偶より表現は退化しているが、土器自体を女神の身体を示していることではよりシンボリックであって、逆に思索の深さを示していると考えられる。この観点からは二つの視座が開けてくる。

まず明らかに人面・土偶装飾のみられるものと、腕だけで同様に女神の身体を示す場合があることは、その延長上にそれらがなにもみられない場合についても、土器自体女神の身体を示唆していると考えられてくる。したがってくびれをもつ樽形の場合について、それを豊満な女神の身体の別な表現とみなされるのではなかろうか。

(e) 長野県諏訪郡富士見町中道尾根遺跡出土例(図4-4)

藤森栄一氏らによって発掘された有孔鈎付土器が1点みられる¹⁶⁾。井戸尻遺跡第1例と同じ壺形で、高さ37cm。中期前半の藤内II式期である。

本例の注目点は、井戸尻遺跡例のような部分的省略とは異なり、人体文自体の退化表現がみされることである。

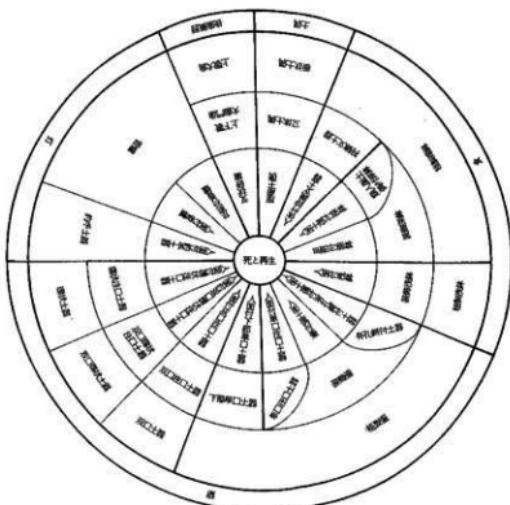


図5 人面・土偶裝飾付土器の体系

重要度の強弱ということが推定されてくる。

後者についてみると、酒器として女神の身体から祭祀に当たって酒を頂くという行為が、土器の形態変化に関係なく持続し、後期に一段と発達する注口上器へと連続することを示唆するものとして重要性が指摘できるのである。

4. 考察

まず他の人面・土偶裝飾付土器との関係について検討することにする。

人面・土偶裝飾付土器の主流は、網文上器自体がそうであるように深鉢形土器である。そしてこれは祭祀における煮炊きの道具であることは確実視される。釣手土器もまた藤森栄一氏によって強調されてきたように、祭祀における灯火具である。そして有孔鍔付土器については、太鼓説を排して酒器と考える方が合理的である。それらを整理し、あわせて中期から後・晩期にかけての時間的変遷を矢印で示せば、下記のようになる。

食 人面裝飾付深鉢形土器

火 人面裝飾付釣手土器 ⇒ 人面・足形裝飾付香炉形土器

酒 人面・土偶裝飾付有孔鍔付土器 ⇒ 人面裝飾付注口土器

これらは祭器としてセットを構成するものであると考えられる。

次に各器形のなかの関係について検討すると、前節で検討したように、人面・土偶裝飾の典型例、退化例、そして無裝飾例などの各段階が並存していることに注目される。それらは単純に人面・土偶裝飾のあるものと無いものとに2大別することはできないのであり、相互に共通した観念で統一性を有していたと理解される。そしてその表現の強弱は、祭祀の重要度の違いであったと推定される。それらの数量の違いを考慮した相互関係は、典型例ほど数は少なくピラミッド体制の三角形になり、それらを横に繋いでいけば図4のような円体系に整理することができる。したがってその観念の内容は、当然ながら典型例に探ることになる。

そしてその観念については、すでに人面裝飾付深鉢形土器や釣手土器について、吉田敦彦氏や筆者らによっ

そしてこの延長線上に、我田引水にならないように抑えている多くの人体もどきが位置しているとみられるのである。

以上の6例は、中期前半の2遺跡3例と、同後半の3遺跡3例とにわけられ、前者は長野県、後者は山梨県・神奈川県から福島県にまで及んでいる。そして前者には人面・土偶裝飾の表現上の退化がみられ、後者には器形上の退化がみられる。しかし前者にあっては典型的な表現、退化的な表現、そして無表現の例まで時期的には共存しているのであって、有孔鍔付土器を女神の身体とみなす観念は共通しているように考えられてくる。ではその違いはなにを表しているのかが問題になるが、これは表現のみの違いとみれば、祭祀の

て言及されているように、女神がその身体を焼かれることなどによって死に、新しい生命的の誕生を願う「死と再生」の神話の存在が見えてくるのである。人面・土偶装飾付有孔鍔付土器においてもまた同様な概念に支配されていたと見ることができる。

註

- 1a) 渡辺 誠「人面装飾付の釣手土器」「比較神話学の展望」青土社 1995年
- b) 渡辺 誠「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」「七社宮」福島県浪江町教育委員会 1998年
- c) 古本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」「日本考古学」第1号 1994年
- d) 古本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究(追補)」「日本考古学」第8号 1999年
- 2) 註1のc・d
- 3) 長沢宏昌「有孔鍔付土器の研究」「長野県考古学会誌」第35号 1980年
- 4) 長瀬 衛「原山遺跡第7地点調査概報」「東京都調布市埋蔵文化財年報—平成5年度—」 1995年
- 5) 日野一郎他「厚木市史」地形地質・原始編 1985年
- 6) 清水 博他「鈎物師原遺跡」「柳町文化財調査報告12」1994年
- 7) 志村寛藏「坂井」 1965年
- 8) 佐野 隆「諏訪原遺跡」「2003年度上半期遺跡調査発表会要旨」「山梨県埋文センター・山梨県考古学協会2003年
- 9) 藤森栄一編「井戸尻」中央公論美術出版 1965年
- 10) 江坂輝弥他「日本原始美術」1 講談社 1964年
- 11) 友松 諭「久保上ノ平遺跡」「長野県南箕輪村教育委員会 1997年
- 12) 百瀬忠幸他「中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」「木曾広域連合他 2001年
- 13) 相馬高校郷土クラブ「福島県相馬郡鹿島町上柄塙敷石住居址発掘調査報告書」相馬郡鹿島町教育委員会・福島県立相馬高校郷土クラブ 1967年
このガリ版刷りの本書は後に文献資料刊行会によって、1974年に復刻されている。なお、実測図は『鹿島町史』第3卷(西戸純一他、1999年)より引用。
- 14) 7に同じ。
- 15) 9に同じ。
- 16) 9に同じ。

謝 辞

本稿をまとめるに際しては、次の方々から多くの御教示と御高配を仰いだ。末尾ながら銘記して深謝の意を表する次第である(五十音順、敬称略)。

赤城高志・大倉 潤・大竹憲治・小野正文・神村 透・佐野 隆・志村寛藏・友松 諭・長沢宏昌・長瀬 衛・西戸純一・平出一治・百瀬忠幸・吉野高光・古本洋子・木曾広域連合遺跡調査会・調布市教育委員会・秦野市教育委員会・南箕輪村教育委員会

付 記

脱稿後、山梨県東八代郡一宮町秋迦堂遺跡群塚越北A地区と同北巨摩郡小淵沢町中原遺跡より、各1例の土偶装飾付有孔鍔付土器が出土していることを知った。所論と相反するものではなく、逆により分布密度を高める資料といえる。さらに類例の増加を期待したい。

渦巻把手状装飾土器の末裔

小林 広和

1. はじめに

2. N-4区出土土器捨て場No.62の検討

3. まとめ

1. はじめに

X字状把手大深鉢土器は出土数は少ないが、曾利期全体を通して普遍的認められる代表的な器種である。したがって、X字状把手土器は八ヶ岳南麓周辺の曾利式土器編年研究の初段階においてすでに注目され変遷過程が取り上げられている(1978.米田)。X字状把手土器はX字状大深鉢土器とも呼称されているが、X字状把手土器の出現期においては、小型土器に取り付けられ次段階に大型化への道を歩むものと理解されていた。近年、この小型土器はX字状把手大深鉢の系譜から排除され、X字状把手の祖形は、釜無川西岸の上小用遺跡第1トレンチ出土例が考えられた(1993.伊藤)。そこでX字状把手は、片方が渦巻となり把手は独立形で連続性のないものであり、次段階のX字状把手が連続性であることについては言及されていない。

また、山梨県史2(1999)では、曾利式土器の初期段階における長胴甕の頸部に取り付けられた4単位の橋状把手をX字把手の遡源とし、曾利Ⅰ新段階を確立期として、先の上小用遺跡例は曾利Ⅱ段階とされた。

このように県内でのX字状把手土器の遡源形態は、橋状把手あるいは独立単独系把手が考えられ、定説となっていないのが現状であり、曾利Ⅱ段階には、確実に頸部を連続一周するS字系X字状把手が認知されているが、その関連性については全く触れていないのが現状である。

筆者は、本稿の前に、渦巻把手状装飾土器の変遷を考える機会を本誌で得たが、そこでは突起連結土器の小突起が口縁部上端から頸部への下降移動を変遷過程の中で把握することができた。特に西原遺跡例においては突起連結土器の把手状装飾が口縁部から下降して、頸部文様帯を形成することを認識するに至った。その際に触ることはできなかったが頸部に降下した渦巻把手のありかたは、頸部に連続施文されるX字状把手の遡源的様態を示唆するものであった。

今回、取り上る駿遊堂N-IV区No.62(以後、No.62に略)に認められるS字系X字状把手とは、曾利Ⅱ式段階以降において、粘土紐による横位・S字文と共に偽反射鏡状態の同一技法・同一施文のS字文を連続して組み合



第1図 駿遊堂N-IV区 No.62

わせ土器体部に一周させたもので、S字文と偽S字文との結合部分が結果としてのX字状の形態となる広義の橋状把手の一種である。本把手は、井戸尻終末から曾利I式におけるシンメトリーなX字状把手とは一線が画され、S字系X字状把手として認識する。今日までS字系X字状把手の初期段階に位置付けられている例は、横位S字と偽反射鏡の組合文連続と考えられるが、これらは成立直後から変容して、確立・消滅段階に至るまでS字系X字状の片方の端部が変形して懸垂文と化する例が増加するが、結合部のX字状把手は横位S字・偽反射鏡として曾利期消滅段階に至るまで普遍化して重要な意匠となる。又、このS字系X字状把手は早くから大深鉢とされる大型な土器に取りこまれている。このような中にあって、富士川水系でのS字系X字状把手の出自に関する論考は少なくは未解決であるといえる。今回は、このNo62をとおして大把手の消滅段階の様相、さらに第IV段階渦巻把手状土器との対比検討を試みることによって、その出自問題に触れてみることとする。

2. 駿河堂N-IV区 土器捨て場B出土のNo 62の検討

法量・形態 法量は、いずれも推定で高さ32cm、口径23cmを計測する小型土器である。器形は、胴部は中央に最大幅をとる球形に近い形態が想定される。胴部と口縁部の境界線では「く」字状に括れる。口縁部は外反するが口縁部上端は内清する。

文様意匠は口縁部には1個あるいは1対の渦巻把手状装飾が取り付けられている。突起部からは橋状に胴部上半まで垂下する。この突起の下位部分を基点としてU字状あるいはX字状の胴部突起が連続して貼り付けられている。橋状部が跨いだ部分は頸部文様帯が配置されている。胴部連続突起部以下では条線を地文として、胴部突起より沈線によるJあるいは渦巻文が描かれている。

この土器を取り上げた理由は突起・頸部文様帯・連続突起と位置・S字+偽反射鏡文によるX字状把手等の要素が渦巻把手状土器第IV段階に共通点が認められ、突起連続土器第IV段階の頸部文様帯からX字状把手土器への移行過程がスムーズな流れの型式変化として捉えられる可能性を予感したからである。以下に、把手装飾、頸部把手連続帯の観察メモを記す。

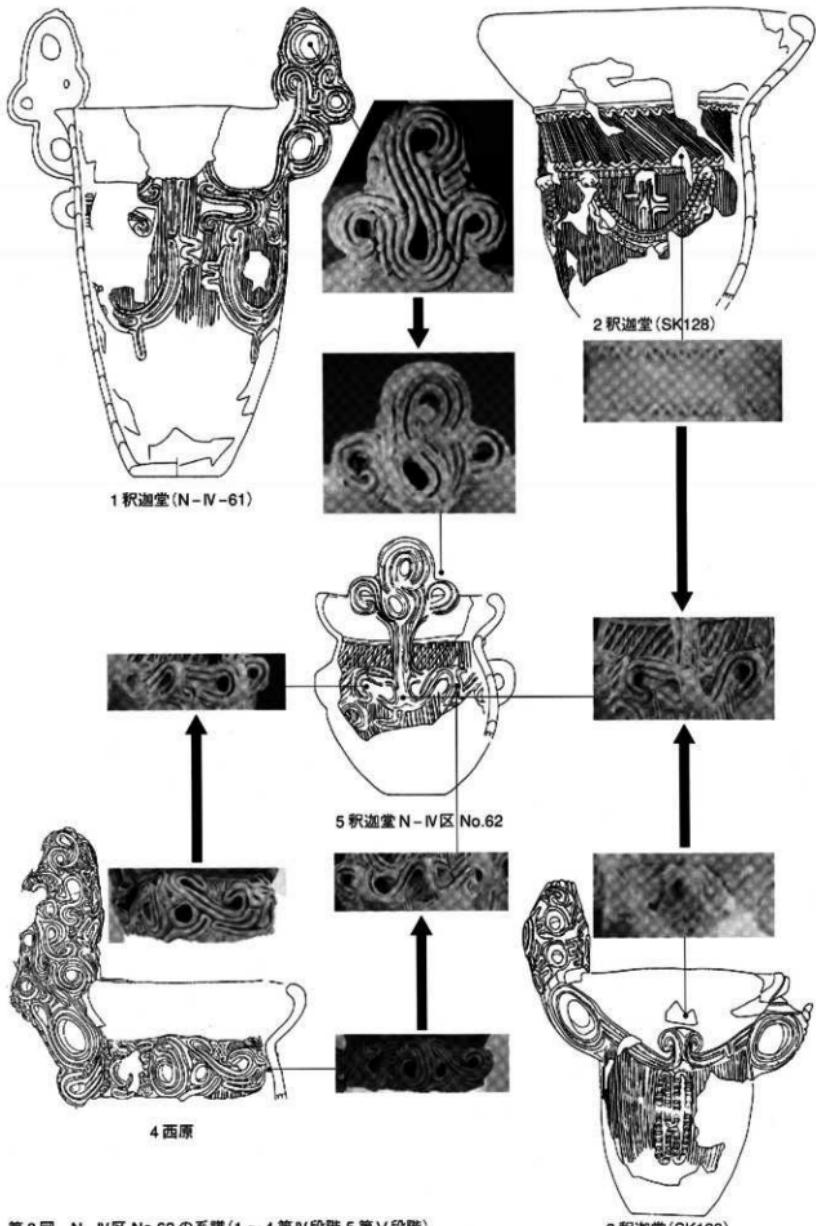
渦巻把手状装飾土器・第IV段階の把手装飾(内部面)とNo 62との対比

SK-52の把手状装飾の正面・側面は、下位の肥大した橋状部分を基盤に、同様な手法で3段構成の中空な渦巻把手状装飾を形成する。正面形態は橋状となるため、把手側面は3段の円窓が際立ち、この円窓に沿って平行半肉文が円状に数条施されていて、これが渦巻把手あるいは水煙文と称される所以である。把手部内面では、土器本体内面に連続するため平坦面をなしている。装飾の手法は正面のような重厚なものではなく、平坦面に円窓を孔け、それに沿って半肉隆線による円文あるいはS字系曲線文が基調に施されている。文様構成は2段であり、下部には二つの円窓を配置した逆位ハーブ状文(3図1・a、b)、正位ハーブ状文(3図2)を配する。上部では円窓を二つ配す例では隣線文でその周辺をS字状あるいは8字状に施文し(3図1・b)、単独円ではそれを中心に重圓文となっている(3図1・a)。

No62把手の形状は、粘土紐を駆使して、把手の表裏意匠体を別々に作成し、それを張り合わせたもので、中空把手から板状に退化する。正面文様は、中央に崩れたS字状文が、粘土貼張り付けで再調整が施されない粗い状態で認められる。S字状文の下位両脇では2本の粘土紐状により円窓を有する小渦巻と円文が配される。右側部分は独立するが左側部分は下部の橋状左端より巻が伸び上がったように施文される。背面では、やはり粘土紐状による隆蒂文で、上部中央には大型な円窓を中心に3重の円文を配し、この円文の下位両脇に円窓を中心とした2重円文が認められる。

以上は、第IV段階の把手内面装飾とNo62の把手観察を行ったが、それらの共通した要素は、円窓および半肉隆線を多用して、把手基部にハーブ状文を配し、上部には、円窓を中心にS字文あるいは円文隆線で組み合わせられている事実が認められた。このことは形態、施文技術は同一系統の範疇に収まり、両者間には大きな差異は認められず、それは時間の連続性の中での解釈が可能となった。

第1は、第IV段階把手装飾が中空であったのに対しNo62では板状把手に変容して形態差は顯然として退化が



第2図 N-IV区 No.62の系譜(1～4 第IV段階 5第V段階)

3 积迦堂 (SK128)

あとづけられている。

第2は、第IV段階では、内面装飾に限られるが、2段構成の複合文であり、下段文様は正・逆位のハーブ状文が顯著で際立っていることが把握された。また、上部文様は2窓でS字あるいは8字状、单窓では重圓文となっている。これらハーブ文とS字・円文との複合文は、积迦堂遺跡内の局地でしかも第IV段階溝巻把手状土器という短時間の中で規格・定式化され、それらの製作段階の際におけるソフト面での重要な位置を占めていたことが示唆される。

これに対して、No.62は、S字状文を配し、下部には左右に平行して並ぶ円窓を有し、円窓の配置箇所は上記例同様で、変動ではなく、内面文様は通似するが、ハーブ文は認知されず下部の橋状から伸びた廉手状文の先端の一部形成するもので、右方の円窓は単独でバランスを保つ効果とみなされて、対称文とならない。このように左右に円窓を有する形態は近似するが、ハーブ文の意味は消失しているといえよう。又、それらの中間部では縱位に2個の円窓が配置され、粗い数条の粘土紐によりS字文に近い状態で包まれている。内面においても、3個の円窓の複合文であるが、やはりハーブ文は消失している。

このようにNo.62の把手は、第IV段階の系譜の末裔として認識されるが、その意匠が正面意匠ではなく第2文様としての内面意匠が採用されている点が興味深いものとなっている。

溝巻把手状土器・第IV段階の小突起とNo.62

SK128-36は、1対式の把手状装飾とそれから垂下する連弧状文の中間にX字状把手によって連結される例である。これは、2本の粘土紐を用いてX字が体现されているが、1対の把手から伸びた弧状文の先端が半溝巻を形成して接合した2次的な結果としての存在的意義が強く読み取れる。このX字状把手は、隆線の中央には一条の沈線が認められ小型で衛素であり、シンメトリーの要素を除けば、No.62のX字状把手に近いものとなっている。

2対式溝巻把手状土器では、ハーブ文と橋状把手が合体した結果となっている(3図1・右)。これは側面ではハーブ文先端部と把手部のねじれ部との関係において、S字状に捉えられ、突起上端は把手間をつなぐ連弧文に接しているが形態はシンメトリーで完結形といえる。

No.61例では、橋状部を形成する主要面に、対称的な横位ハーブ文が粘土貼り付後の丁寧な調整により施され、把手部内面同様に文様構成の主体を占めている(3図2・右)。

西原遺跡例は、2対式把手の1対が退化して、1対大把手の退化部と4個の中間小突起が口縁部から頸部に下がり、把手基部と連結して体部を一周し頸部文様帯を形成する。この形態は溝巻突起連続土器の小突起が各段階口縁部上端から頸部へと各段階を経て頸部へ下降が認められた突起連続土器・直系の最終段階を示唆している(4図)。

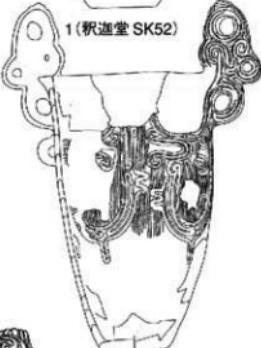
小把手間の連結帯には半肉状隆帯文を多用する。小突起の正面意匠は円・波状、弧文が組合せられた複雑な中空・円形突起であるが、突起間小突起での左右への分岐点には、連結帯の先端部の半溝巻と偽反射鏡文が施され、X字文に近い意匠が表されている(3図4・中央)。

以上溝巻把手状土器においては、2対4本式の溝巻把手状土器の要素は、シンメトリーで完結する形態であり、1対2本式溝巻把手状土器に、把手の連続性とX字の要素が求められそうである。

No.62では橋状把手を中心に、正面右側では、横位S字文とその偽反射鏡文が連続する。正面左側は、S字とならず、C状となり、左端部は対称X字状文となる。粘土紐による隆帯文はNo.128-36に近似するところが多い。正面右では、S字系X字状把手が確立して新段階への移行が確認されるところであるが、左部分ではC状連結と対称X字文が残存して第IV段階の様相、西原例の頸部把手に近似する(2図左・中央)。また、胴部上半へのS字系X字状把手の設置状況及びS字偽反射鏡文は西原例の影響下によって体現されたことを示唆している。

3.まとめ

以上の対比結果を総合的にみると、No.62は溝巻把手状土器第IV段階の末裔の姿として捉えることが可能であり、曾利II式としての認識が高まったものと考える。S字系X字状把手の出自については、2対4本溝巻把手状



把手内面 a



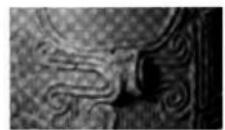
把手内面 b



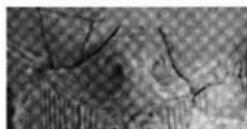
下降小突起



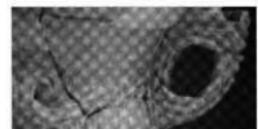
把手内面



下降小突起



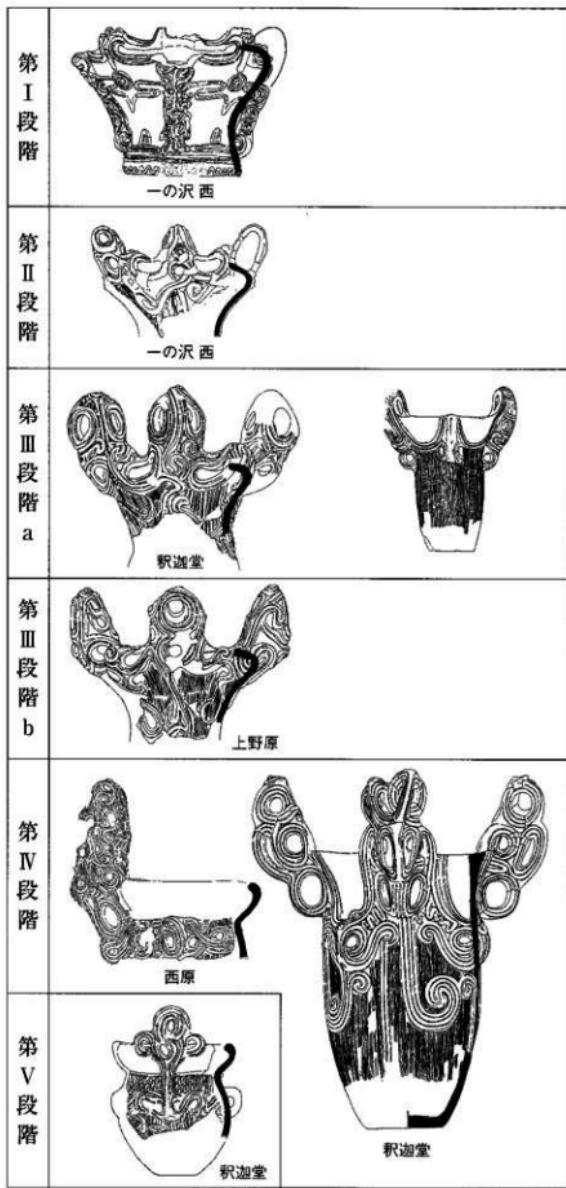
IV段階 X 状字把手



X 状字把手側面



第3図 涡巻把手状装飾土器第IV段階(1~3积迦堂、4西原)



第4図 湧巻把手状装飾土器の変遷図

土器より、1対2本渦巻把手状土器の文様要素の中にその祖形が求められた。それらの要約してまとめにかかる。

把手意匠は表面意匠が継承されず内面意匠のみが引き継がれる。第IV段階のハープ文、S字文・円文を基調としたシャープな隆線文で施されるが、No62では、ハープ文、S・8字状文は形骸化して退化が著しく、形態も中空から板状となり、把手面からは、IV段階以降である事が明らかとなった。

次にX字状把手の出自についてまとめる。渦巻把手からみると、2対4本式は突起連結土器過程の中の第IV段階で新型式として成立するものと考えられる(第4図)。連弧文で簡単に連結され、頸部付近に降下した小把手は独立した意匠を形成する。今回の対比に用いたSK-52、No61ではハープ文で連続というよりもシンメトリーを基調とする単独様相であり、連続性の存在するS字系X字状把手には隔たりが感じられるが、X字状把手の形成要素としては、重要な意義を含んでいるものと思われる。

1対2本式は、從来笛吹川の系列には属したものではなく、八ヶ岳南麓地域の1対2本式の影響下に成立した類系であり、把手部の連続性という観点からは古典的要素を含みながらも新たな要素が認められる。SK128では、2大把手は弧状の半内隆帶で結ばれ、把手の存在しない4分割付近の頸部で、シンメトリーな先端半渦巻文が合体してX字状把手形態となる。このような対称X字状把手を確認することができ、第IV段階の中にS字系X字状把手の萌芽の存在を確信するに充分なものとなった。

特に西原遺跡例では、2大把手を残し、他の把手類が頸部へ下降した好材料で渦巻突起連結土器の直系と考えた(小林・2003)。この把手が連続して一周する様態はS字系X字状把手に通じる形態であり、さらに、小突起の中には、偽反射鏡に近い意匠を示し、突起連結帶もX字状に認められNo62のX字状把手出現の遡源要素を多く有する(2図中央・下段)。S字系X字状把手は、上記の影響下の基で(第2図参照)成立した可能性が高いものと考える。以上、この様に退化した大把手と胴部にS字系X字状把手を有するNo62は、渦巻把手状土器変遷の第V段階の位置が与えられる。

X字状把手大深鉢の出現に関しては触ることができなかったが、S字系X字状把手のルーツを渦巻把手状土器に求めることが可能となつた³。この渦巻把手状土器の多くは土坑墓埋納土器として特殊な性格が与えられている。大深鉢土器へのX字状把手の早い時期での取り込みはその特殊性を目的とした結果で、その進程の中で体现した新器種と考える。

註

- 1) ハープ文は、幕内・井戸尻期のU字文からの系譜と考えて、曾利II式まで顯著に認められるが、把手状装飾土器に組み込まれる例は、今日までは軽遊営遺跡に限定される。
- 2) 当然、曾利古式に認められる柄状把手を遡源とするには大きな隔たりを感じる。
- 3) 逆位底部穿孔の土器埋納墓として宮ノ前、軽遊営SK28、胴部打欠正位埋納の天神遺跡がある。以後曾利期をとおして認められる。

参考文献

1978年	米田明訓	曾利式土器編年の基礎的把握	長野県考古学会誌30
1988年	末木健	曾利式土器の様式	縄文土器大観3
1990年	山形真理子	曾利式土器の研究	東京大学紀要14・15
1993年	伊藤公明	X字状把手土器の展開	
1996年	伊藤公明	縄文時代中期後半の地域性	
2003年	拙稿	渦巻把手状装飾土器の展開	研究紀要19

出典図版

1987年	山梨県教育委員会	駿迎堂遺跡Ⅱ
2002年	境川教育委員	西原・柳原遺跡

謝 辞

最後になりましたが、本稿作成にあたり次の方々には、資料実見の際に大変お世話になりました。駿迎堂博物館・若林重則、芹沢昇氏、境川教育委員会・野崎進氏には記して感謝の意を表したい。

甲斐国巨麻郡における古代牧についての一覧点

今 福 利 恵

はじめに

1. 百々遺跡と御勅使川扇状地
2. 茅ヶ岳山麓の牧
3. 八ヶ岳南麓の牧

4. 釜無川上流右岸域の牧
5. 富士川流域の牧
6. 古代牧の特徴
- おわりに

はじめに

中部横断自動車道建設に伴い平成10年度に御勅使川扇状地域を試掘調査したところ百々遺跡として南アルプス市(旧白根町)百々地区より平安時代の集落が発見された。從来、御勅使川による氾濫原であることから古代遺跡は極く少ないものと想定されていた地域である。試掘調査の結果から建設予定路線内で百々遺跡の範囲は南北840mに及び、山梨県埋蔵文化財センターが平成11・12年度の二カ年にわたり46,300m²を対象に発掘調査を行ったところである(山梨県教育委員会2002.2004)。発掘調査により250軒を超える平安時代の住居跡が発見され、さらに中世へと連続していることがわかった。中でも注目されるのは、多数の牛馬骨であった。同定されたもので延べ88個体の牛馬が確認できている。山梨県下の平安時代集落遺跡の中では動物骨の出土は群を抜いて多く、また初めてウシの存在が確認された。出土状況は様々であるが、馬が四体並べられ埋葬された状態で発見された珍しい例もあった。百々遺跡の立地する御勅使川扇状地域は中世に八田牧が存在したとされ、その前身となる関わりの深い集落であることが想定できる。しかし、八田牧についての史料は一点のみでその実態は明らかでない。発掘調査の成果を検討する中で、近世史料により御勅使川扇状地域を傍観したところ古代・中世の様相を色濃く反映している可能性があり、八田牧についてもその伝統を近世にも残しているものと考えた。そこで近世史料を以って遡り、巨麻郡下の古代牧について検討してみることにする。

1. 百々遺跡と御勅使川扇状地

百々遺跡は南アルプス市百々の御勅使川扇状地扇央部に立地し(第1図)、その規模は南北方向で840mにわたり、平安時代の住居跡250軒以上が確認された。調査の性格上東西方向の広がりについてはわかっていない。しかし、調査区東側は扇状地扇端部に平安・中世の遺跡包蔵地がひろく確認されており(八田村2000)、一連のものと想定することができる。西側の扇状地扇頂部方向は遺跡の調査や包蔵地が確認されていないため明らかでないが、西側約1000mにある百々諏訪神社に嘉元三年(1305)銘の獅子頭が所有されていることから、このあたりまでの広がりを想定することができる。とすれば、南北方向840m、東西方向は推定2500mの広大なエリアが百々遺跡の範囲となる。百々遺跡の平安時代集落は9世紀初頭に始まり10世紀頃をピークに中世鎌倉期からおよそ15世紀頃までの遺物が確認できるため、このころまで継続していることがわかる。調査の結果から10世紀後半頃の洪水により集落の南側半分が被災し、以後は放棄されているものの北半分では以後も継続して営まれている。しかし、百々遺跡全体は厚い土砂・砂礫に覆われており、遺跡の継続性から15世紀から16世紀頃の大きな洪水によって広く埋没してしまったことがわかる。折しも戦国期武田信玄による御勅使川の治水工事が行われたとする時期にはほぼ一致しており、野牛島にある天文十三年(1544)銘の八田庄の板碑や大永四年(1524)の墨書きがある榎原の長谷寺本堂はこの壊滅的な洪水以降の建立と思われる。また中部横断自動車道建設による試掘調査では百々遺跡のすぐ南側に御勅使川の旧流路が確認されており(第1図)、現在は畠地となっているが、御

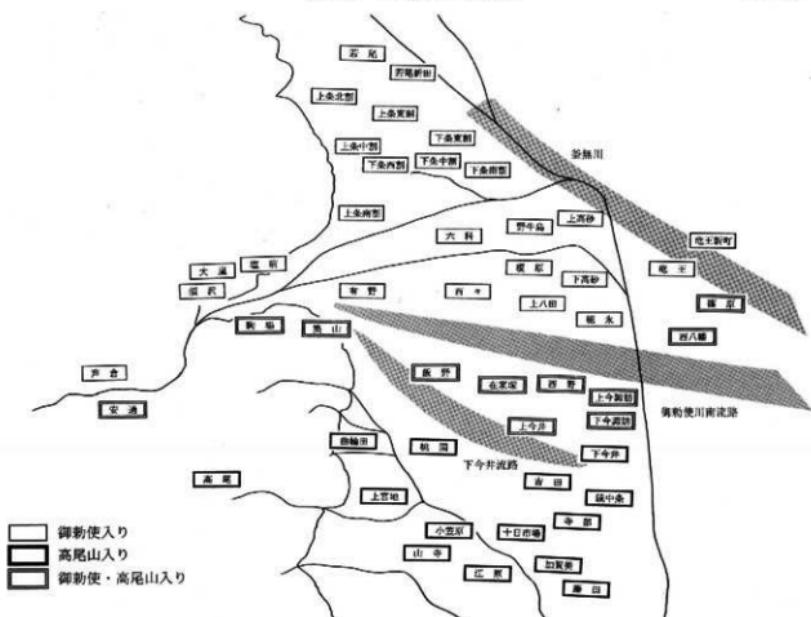
勅使川扇状地上の有野から飯野、在家塚、西野集落の北側を流れていたことが地形や土地利用区分から明らかにされている(保坂1999,2002)。この流路は御勅使川南流路と呼ばれ、百々遺跡の10世紀頃の洪水は南側から土砂を被っており、この南流路からの氾濫と考えられるため、すでに平安時代には存在していたことがわかる。また百々遺跡の北側には明治末に廃河川となる前御勅使川があり、この両河川にはさまれたエリアに百々遺跡は広く立地していることになる。前御勅使川はいつから存在していたかは明らかでないが、百々遺跡の基盤となる黄褐色粘土層の上にあることから比較的新しいものと思われる。この黄褐色粘土層は近代には瓦の原料として採掘されていたもので、伊豆かわご平火山灰が検出されたことにより縄文時代晩期の約3000年程前の上石流堆積によるものとえらえられている(河西1999)。前御勅使川より北側となる野牛島地区は現在の御勅使川にはさまれたエリアになるが、ここには古墳時代から奈良・平安時代と百々遺跡よりもやや古い集落が形成されている(齊藤2002)。大塚遺跡や立石下遺跡など広い範囲に遺跡がみられ、おそらくは一連の遺跡であると想定できる。しかし、平安時代でもおよそ10世紀代までは集落が營まれなくなり、空白地となる。百々遺跡が9世紀初頭から始まり、以後10世紀に最盛期となって11、12世紀さらに中世鎌倉期へと継続していく、あたかも前御勅使川をはさんで野牛島地区から転入したように、遺跡の営まれる時期は対照的となる。こうした遺跡の立地区分から前御勅使川はすでに平安期には支流として存在していた可能性がある。百々遺跡の平安時代面より下60cmのところでは古墳時代前期あるいは弥生時代中期の土器包含層が確認されている。野牛島地区の大塚遺跡では縄文時代末の土器や古墳時代と奈良・平安時代集落は同じ地層で確認され、百々遺跡のように間層をはさんでいない。このため南側にある百々遺跡の方が古代において洪水を受けやすい川の近くに立地していたことになり、北側の野牛島地区では縄文時代末以降古墳時代、奈良・平安時代とひじょうに安定した環境にあったことがわかる。中世になると百々地区だけでなく野牛島地区でも石橋北壁敷遺跡など集落形成がみられるようになるが、野牛島の仲田遺跡では百々遺跡と同じく16世紀頃以降の洪水により厚く土砂に覆われているのがみてとれる。一方、百々遺跡の南側では御勅使川南流路が古代に存在していたが、この流路のさらに南側では縄文時代末から弥生時代初頭の土器包含層がある横堀遺跡が確認されている。さらに横堀遺跡から南側の印柳形町十五所までは、深く砂礫層が堆積しており、いっさいの古代遺跡がみられない地区となる。おそらくは縄文時代から弥生時代頃には南流路よりさらに南側の飯野、上今井、下今井のライン付近を御勅使川が流れているものと想定できる。遺跡の立地でみると奈良・平安時代の遺跡は、御勅使川扇状地上の飯野新田、飯野、在家塚、西野、上今井集落周辺には存在しておらず、石塔などかくつかみられることから中世以降になって開発が入っていくところもある。ここは近世に原七郷とよばれる干ばつ地帯の中心地でもある。

こうした平安時代の御勅使川南流路を境とする地域的な区分は、中世をへて近世、近代まで引き継がれている可能性がある。中世の状況は明確でないが、御勅使川扇状地域の近世にみる入会地によくあわれている(第2図)。御勅使川扇状地域の入会地は御勅使川をはさんで北側の甘利山南側となる御勅使入りと南側の櫛形山北側となる高尾山入りの二つがある。御勅使入りは芦安の芦倉・安通に蘿崎市甘利旧10ヶ村と白根町・八田村全域の20ヶ村、それに竜王・竜王新町・西八幡・篠原の4か村の計36ヶ村が含まれる。高尾山入りは、高尾を山本に旧櫛形町北部の滝沢川流域となる曲輪田・桃岡・上宮地・小笠原・山寺・旧甲西町の江原、そして御勅使川扇状地南半部の吉田・上今井・旧若草町の下今井・鏡中条・寺部・十日市場・加賀美・藤田が含まれ、さらに安通・駒場・築山・飯野・在家塚・西野・上今井・今諏訪・西八幡・篠原といった旧御勅使川南流路の右岸沿いの集落が御勅使入りと共に通している。この御勅使入りと高尾山入りが共通する集落は御勅使川南流沿いの古代遺跡がない地域で近世原七郷の中心地である。遺跡の立地から中世以降に開発に入ったと想定される場所で、そのため南北側の固有の入会地を持つ郷村からの入植により比較的新しい段階で郷村が成立したため、両入会地にその権利を持つものと考えられる。いずれにせよこの地域は古代においては御勅使川南流路が存在していたところで、また扇頂部から下今井集落に向けてさらに古い流路が想定でき、地表に砂礫が多く含まれる干ばつ地帯でもある。この古代のこの河川による地域区分がおそらくは中世へと引き継がれ、近世においてもなお色濃く反映しているものといえる。釜無川東部の竜王・竜王新町・西八幡・篠原までが含まれることから、この地域も御勅使入りと同じものとしてとらえることができ、御勅使川南流路は現竜王町篠原の東側で、この地域の北側を流れる釜無川と合流していたものと想定できる。古代における釜無川流路は明らかでないが、現在よりも東向きに流れていた可能性がある。



第1図 百々遺跡と周辺地形

● 百々遺跡



第2図 御勅使川扇状地域の入会権

なお古代末には旧櫛形町小笠原を中心に小笠原莊が成立するところであるが、周囲の大井井・加々美莊といった水田による莊園と異なって水利のわるいところの畑作によるものと思われ、こうした砂礫の多い土地での収益を確保できる莊園経営であったことから、15世紀以降の洪水によって百々・上八田方面の砂礫に覆われる地域までも拡大して近世には原七郷に含まれるようになったと思われる。近世に徳島城の開拓により潤い始めるが、この地域に成立する小笠原莊はいさか周囲の莊園と異なる生産形態であったと思われる。

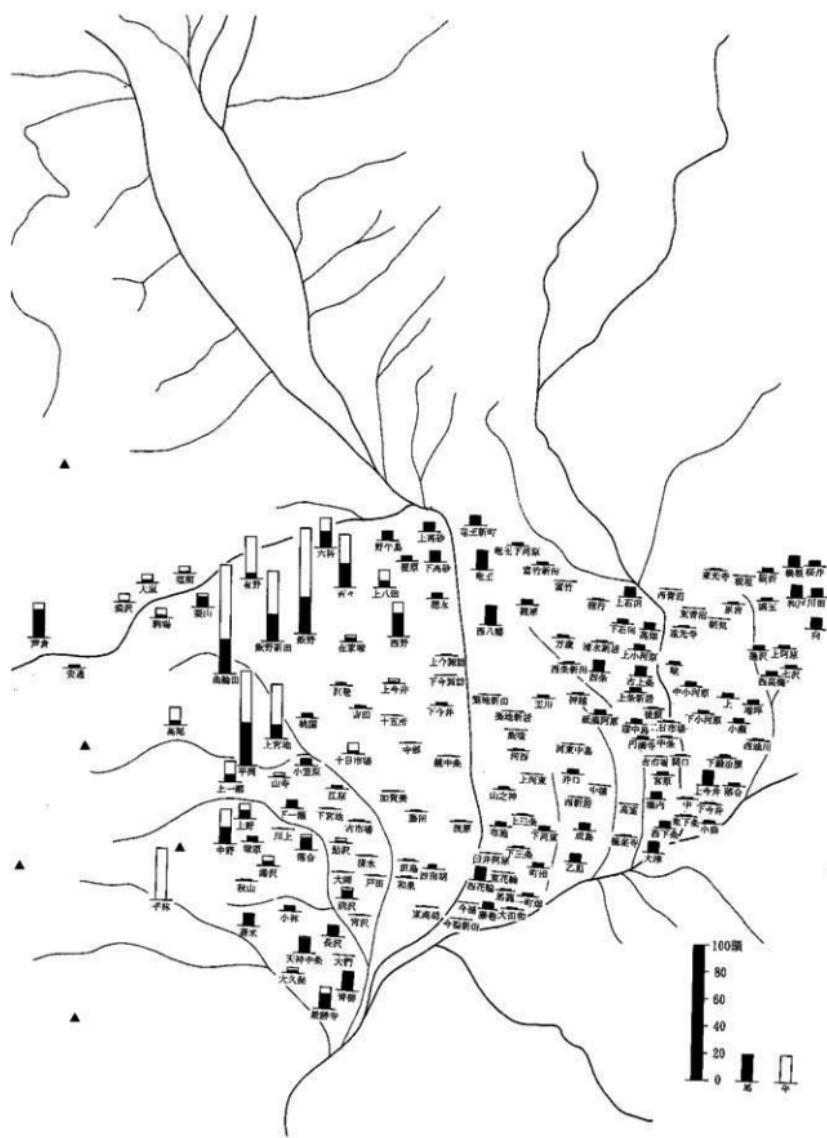
また御勤使川扇状地北半部とその北側の甘利10ヶ村は御勤使入りとして入会地が同じであるが、甘利地域はこれと別に甘利山財産区という入会地を持ち、また古代には余戸郷が成立し12世紀には甘利莊として存在していたところでもある。この甘利莊は、莊園解体後に郷村が成立する中世においても地域的な紐帯がのこっていくことが明らかにされている(半山1997)。百々遺跡のある地域は百々という地名を遺称として『和名抄』の等力郷に比定する説もあり、もしそうだとすれば余戸郷と等力郷が隣接していることとなる。その境界に現在は御勤使川があるがその当時はないので、両郷は竜岡台地と御勤使川扇状地北半部という地勢の違い、あるいはその境に流れる割羽沢によっているものと思われる。

『和名抄』にいう等力郷は、その遺称から山梨郡となる勝沼町等々力に亘る郡の飛び地として存在していたとするのが定説となっているが、当時の状況から見て山梨郡、八代郡の方が人口密度も高く、甲斐国を中心としたことから、ここに巨麻郡の飛び地が存在するとは考えにくく、逆に巨麻郡内に山梨・八代郡の飛び地が存在していたとする方が理解しやすい。郷の移転を考えたとしても、『和名抄』にいう等力郷、そして栗原郷も山梨郡内に求めるのは無理があると考える。百々遺跡の調査結果においてこの地を等力郷とする直接的な証拠はないが、その内容と規模において、百々をその遺称として等力郷に比定できる候補地となり得るものと考える。

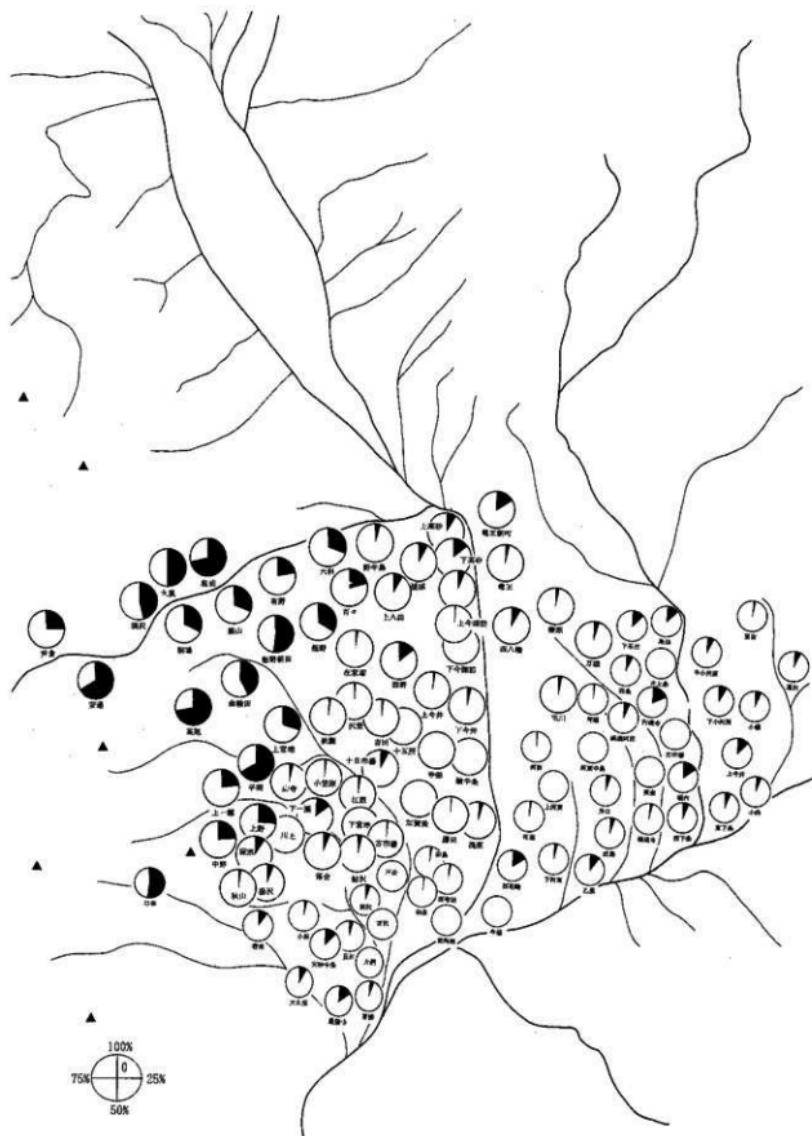
さらにこの地においては、旧櫛形町高尾の徳見神社御正体にある天福元年(1233)銘の「甲斐国八田御牧北鷹尾」から八田牧があったものと想定されている。百々遺跡においては、牛馬の骨や歯が多数みつかっており、調査結果からウシ 37、ウマ 45、ウシウマ不明が6、牛馬類のみで延べ88個体が同定されている(山梨県教育委員会2004)。さらに獸骨として不明なものを含めると、その総数は100点以上となる。この中でウシが確認できたのは平安期としては県内ではじめてであり、また土坑内にウマが四頭ならんで埋葬された土坑がみられるなど、全国的にも珍しいものであった。こうしたウシウマ類は集落が形成される9世紀初頭から少なくとも12世紀まで連続して存在していることがわかっている。この集落が形成される初期段階から牛馬が存在しており、そこには史料で確認できる中世八田牧以前から牧としての機能をもっていたことが推察される。

こうした牧の状況は、近世の『甲斐国志』からも傍証できる。19世紀初頭文化初年頃の甲斐国データとして『甲斐国志』村里部にある各村の牛馬数をそれぞれ拾い上げ、その分布状況を見てみると、御勤使川扇状地の扇頂部から扇央部にかけてと旧櫛形町の市之瀬台地上に多く存在していることがわかる(第3図)。特に御勤使川扇状地では百々・六科・有野・飯野・飯野新田に多く、また市之瀬台地では曲輪田・上宮地・平岡あたりに扇團と比較して極端に多く、また馬よりも牛が比率として多い。おおよそ馬4に対し牛6となる。古代の百々遺跡では馬6に牛4の比率であり、かなり近いものとなっている。山間地の高尾をみると絶対数が少なく、こうした状況は御勤使川上流部でも同様となるが、各村において牛馬数/戸数とした全戸数あたりの牛馬保有率によってみると(第4図)、扇状地で3~4戸に1頭の割合(20~40%)となるが、人口の少ない山間部や上流部では2戸に1頭と保有率がさらに高くなっていることがわかる。戸数が少なくてその保有率は高いといえる。御勤使川扇状地でも扇頂部あたりの上八田・野牛島・櫻原、そして釜無川流域の上高砂・下高砂・竜王・西八幡あたりではまた絶対数が少なくなっているが、それでも周囲に比べればやや多い数となっていることから、地域的に牧域の影響下にあるものと考えられる。さらに御勤使川扇状地南部の在家塚・沢登・吉田・十五所・桃園・小笠原・山寺等の御勤使川南流路以南・以外では絶対数、保有率もまた極端に少なくなっている。その差は明瞭である。こうした状況をみると牛馬は御勤使川扇状地扇頂部から上流域にかけてと高尾山麓の台地上に極端に多く存在し、こうした現象は八田牧を想定する範囲ときれいに一致しているといえる。

八田牧の範囲をこうして想定したときに、先にみた御勤使川南流路右岸域には古代遺跡がみられない飯野新田・飯野・在家塚・内野・上今井といったところが存在し、牧域からはずれることになると、八田牧が南北にやや分断され



第3図 近世牛馬数 中巨摩地域

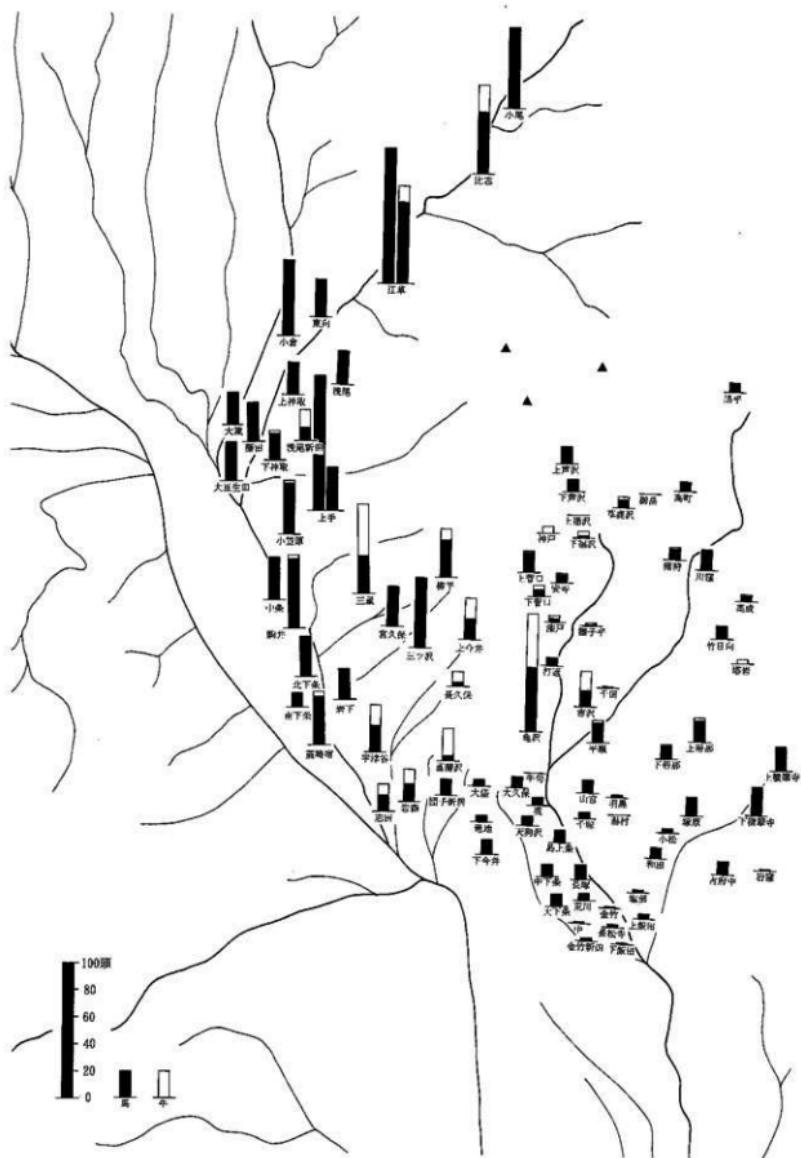


第4図 近世牛馬保有率 中巨摩地域

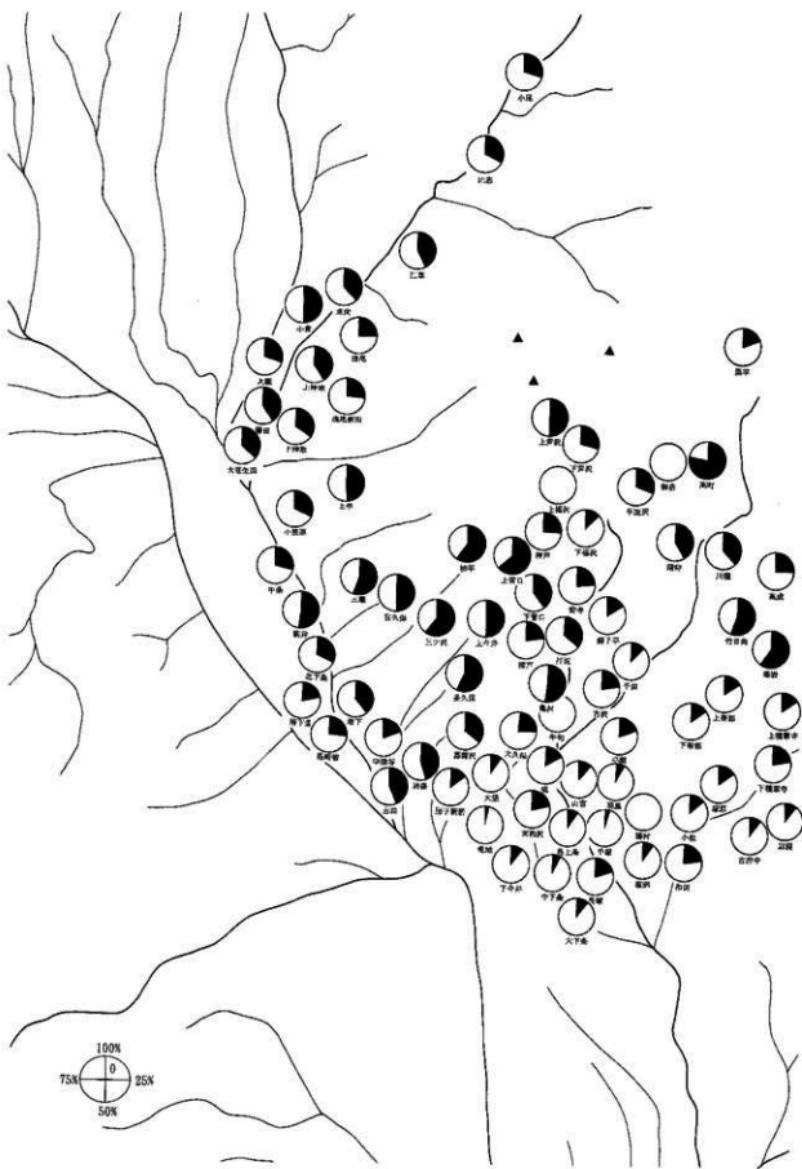
ることとなる。「続日本後紀」の承和二年(835)にある葛原親王が与えられた「馬相野空閑地」は「甲斐国志」によって御勤使川扇状地域に比定し有野・飯野を遺称とするのが唱えられ定説となっている。空閑地とすればこの地域は古代に生活の痕跡がないところとして適地であり、また八田牧に囲まれた状況と、有野は位置的にずれるのでともかく、飯野をその遺称とすることで、「馬相野空閑地」をこの地に比定できると考える。この地は後に小笠原荘として開発されていくところでもあり、また地勢の良くないところで他の莊園と異なる生業形態が想定される特殊な事情が考えられる。なお八田牧の在地領主として芦安方面に所領を持つ甲斐工藤氏が想定されているが(秋山2003)、八田牧の南側となる市之瀬台地上の曲輪・上宮地は地理的にも小笠原荘の範囲と思われ、この荘にも一部は八田牧が存在したものとも思われる。「馬相野空閑地」については北巨摩方面の長坂・須玉・明野方面に求める説(秋山1981)もあるが、後述するように疑問がある。それはともかく、八田牧について近世の史料から稽歴してみたときに、古代・中世の状況を伝統的に継承している状況があり、かなりの部分で反映している可能性が高いものとらえることができよう。こうした近世史料の有効性について穂坂牧や他の地域にて検証しながらしていくことにする。

2. 茅ヶ岳山麓の牧

穂坂牧は「延喜式」左右馬寮の甲斐国三御牧の一つで、茅ヶ岳西麓の蔚崎市穂坂町柳平・宮久保・三ツ沢・長久保・上今井に比定され、異論はないところである。ただしその牧域については明野村小笠原や双葉町赤坂台あたりまで広がっていたとも想定されている。10世紀代に駒幸の記事が多く知られ、その起源は9世紀にまでさかのぼり、また11世紀頃よりその存在が不明確となって、北に隣接する小笠原牧に吸収されたとする説がある。この地域での「甲斐国志」による牛馬分布(第5図)をみてみると三藏・宮久保・三ツ沢・柳平・上今井には多くみられ、また穂坂周辺から下った塩川沿いの中条・駒井・北下条にも比較的多くみることができる。その北側の小田川は極端に少なくなり、この地の入会いを見ても茅ヶ岳とは関連が薄く、七里岩台地を越えた御座石山にあることから、範囲外と考えられる。三藏は穂坂城と小笠原城を区別するよう東西にのびる茅ヶ岳の尾根があるところの南北両側に集落があるため、どちらに属すか明らかでないが、近世の入会い関係を見ると駒井集落との結びつきが強く、北の中条・南の北下条とともに狭い範囲で一地域を形成している。古代の遺跡分布を見る²と駒井周辺から南側の北下条にかけて多くの平安時代遺跡が集中しており、特に宮の前遺跡は古代官衙的な色彩の強い集落で、8世紀から11世紀にわたる住居跡400軒以上が発見され、この他に奈良三彩や帶金具・鏡などが出土している。また中条の中出小学校遺跡では金銅製鉢や「葛井」という墨書き器がみられ、これが甲斐國專當國司である「葛井連惠文」と同じ関係であることから、国府との関連が強い地域であることが推定されている(末木1987)。位置的にも穂坂城の下となり、穂坂牧と強く関連する遺跡群ととらえることができる。また駒井周辺の近世における三藏との密接な関係から、三藏は穂坂城で放牧地とは異なる機能があった中心地域であった可能性がある。この駒井・三藏の関係がさかのほるとすると、14世紀にこの地の弘篠(日之城)、小平が小笠原荘内とされる(八巻1988)ことから、穂坂牧は小笠原牧へ吸収されたとする説も有力となろう。なお穂坂城においてはめだつ平安集落がなく、一部に談期の包蔵地が知られているのみである。藤井平には牧管理に関する集落が展開し、背後の茅ヶ岳西麓に穂坂牧としての放牧地が広がっているという関係がみてとれる。穂坂の南側では、長久保で近世に牛馬数が極端に少ないと、牛馬数/戸数の保有率で見る(第6図)と他村と同じ程度で、戸数の多少によって差があるだけとみなせる。さらに双葉町の宇津谷・志田・岩森・菖蒲沢あたりまでは比較的多くみられ、保有率もさほど差がない。また敷島町亀沢川流域においてその絶対数は少ないと、保有率で見ると3~4軒に1頭の割合(20~40%)で、穂坂城よりは少し下がるが双葉町域とほぼ同じといえる。穂坂では馬の他に牛が村によって多くを占めており、牛馬が併存している。これは双葉町域でも同様で、さらに敷島町亀沢川流域の小集落においても牛の存在が確認できる。この範囲は敷島町亀沢を本山とする21ヶ村入会いの範囲と同じことによるものと思われ、穂坂と双葉、敷島亀沢川沿いとなる茅ヶ岳南半部に共通している。穂坂牧の獻馬数が30疋であることから飼育頭数を勘案するとおよそ850頭、850~1700haという広大な範囲が想定され(一志1950)、牧城も茅ヶ岳南麓から小笠原まで含めた範囲となりうるとされる。このように穂坂牧についても「甲斐国志」に見る牛馬分布が多い地域と古代



第5図 近世牛馬数 茅ヶ岳山麓



第6図 近世牛馬保有率 茅ヶ岳山麓

牧域と想定される範囲がよく一致しており、八出牧に統いて鶴坂牧においてもこうした近世史料から古代を俯瞰する方法はある程度有効性を持つものと考える。隣接する小笠原牧にはどうか、次で見ていくことにする。

小笠原牧は、明野村小笠原付近に比定され、資料的には10世紀に後院領としてその存在が知られ、13世紀頃まで牧として存在していたことがわかっている。14世紀以降の史料から山小笠原莊として三藏、浅尾を示し、16世紀には須玉町江草へ、近世にはさらに塙川上流の比志まで、茅ヶ岳西麓から北側へその莊域が広がっていく様子が見て取れる(秋山2003)。ただ、明野村上・下神取の鹿取郷が逸見莊域にあったとされるのは山梨市唱永寺の梵鐘にある応永二十七年(1420)の15世紀で、各地の莊域が拡大していくことであって、古代における牧莊域を反映した範囲であるかは定かでない。『甲斐国志』の牛馬分布を見る(第5図)と、小笠原牧比定地付近ではやはり小笠原、特に上手に多くみられ、神取・浅尾方面でやや少なくなる。牛馬数/戸数の保有率で見る(第6図)と、絶対数の多い上手で2軒に1頭の割合(48%)となるが、小笠原・神取・浅尾においては3軒に1頭(30~40%)ではなく均一な割合となっている。なお、須玉川流域の豆生田・藤田・大藏・小倉・東向は、それぞれ入会地が茅ヶ岳12ヶ村で、八ヶ岳南麓には権利が無いため、この小笠原牧、山小笠原莊に関連するものととらえた。ここでも牛馬数は小倉でやや多いが、他は神取・浅尾と大差なく、同じ状況といえる。小倉は近世後期には代表的な馬産地であったらしいが、その保有率は2軒に1頭ほど(51%)で、上手と大差ない。また塙川上流域の江草・比志・小尾でも絶対数が多くみられるが、保有率では3軒に1頭(30~40%)の割合で、この地域の標準的な飼育数を示しているものと思われる。なお、小尾も近世後期には代表的な馬産地であった。いずれにしろ、小笠原牧、山小笠原莊とされる一帯には近世においても牛馬が多数存在することがみてとれる。なおこの地域は大部分が馬であり、牛の保有はごく少ないという特徴がある。

この小笠原牧周辺の古代遺跡では浅尾の梅の木遺跡で馬歯骨や焼き印が出土しており、永井原V遺跡では牧に関連するといわれる溝がみつかっている。およそ9世紀後半から集落がみられるようになるが、小笠原の深山田遺跡では8世紀代の集落がある。上神取の塙川段丘上にある寺前遺跡は9世紀後半から12世紀にかけての住居跡が約90軒確認され、鉄製鉗がみつかっているなど、大きな聚落は山麓でも比較的低い地域に集中している傾向にある。須玉川と塙川が合流する付近一帯には豆生田遺跡や腰巻遺跡など古墳時代から続続した集落や湯沢古墳群、また8世紀にさかのぼる古い集落が多くみられ、挺点的な場所であったものと思われる(山路2002、保坂2002)。

こうした地域に「続日本後紀」承和二年(835)条にある葛原親王が与えられた「馬相野空閑地」を想定する考えがある(秋山1981)。古歌に「おがさわらへみ」と小笠原牧と逸見牧が併称されることが多いことから、ともに両牧が併設した後院領であるとして、親王賜田から開発されたものととらえ、また甲斐三御牧に囲まれた地域でもあることを論拠にしている。しかし、「おがさわらへみ」は、また一方で「おがさわらみつ」「おがさわらへみづ」「おがさわらへみの」とも詠まれることがあり、馬の生牧を示す表記方法からみて牧名の併記というよりは小笠原の中の「へみ」、「みつ」といったより地域限定した呼び名の可能性も指摘しうる。「へみ」は明野村上手にある小字「辺見」、「みつ」は明野村「三之藏」に比定できないだろうか。あるいは併称されるのは「鶴坂」ではなく「小笠原」ばかりで、「おがさわらへみ/みつ」という形式で表されるため、「おがさわらへみ」は逸見地方(明野村)の小笠原、「おがさわらみつ」は櫛形町(宮地?)の小笠原・八出牧の南部-を示しているともいえまいか。小笠原は、巨摩郡内で明野村と櫛形町に地名があり、その関係について理解が困難である。山小笠原・原小笠原と区別されるのは14世紀以降であり、それ以前になんらかの区別呼称があったとしても不思議はないと思う。また併記されたとすれば、古代遺跡の展開からみるとこの須玉川と塙川合流地点は、八ヶ岳山麓や茅ヶ岳山麓に集落が展開する9世紀以前より北巨摩方面での中心的な位置を占めていて(山路2002)、ここが『和名抄』にいう速見郷である可能性があり、この地より9世紀にはいって八ヶ岳南麓や茅ヶ岳西北麓へ開発が行われた(保坂2002)ことが想定できるので、逸見牧と小笠原牧は同じ速見郷をもとに成立したことによるととらえることも可能である。しかしここは北巨摩方面的中心地であって空閑地ではない。後述するように柏前牧を高根町念場原に想定でないことからこの「馬相野空閑地」は、三御牧に囲まれた地域ともいえず、またその地の中心には豆生田遺跡など古い挺点的な集落があり、必ずしも小笠原と逸見が併称ともいえないことから、高根町から須玉町・明野村に想定する考えは支持が難しい。

3. 八ヶ岳南麓の牧

八ヶ岳南麓においては平安時代の遺跡が多いところもあるが、大部分が9世紀から始まり10世紀末までの集落で11世紀以降は減少してしまう傾向にある。古墳や該期の集落もみられるが、8世紀代の遺跡は皆無に近い状況となる（山路2002）。「馬相野空閑地」を想定するならば遺跡はないがこの地はふさわしいといえる。『和名抄』の巨麻郡速見郷が想定される地域もあるが、須玉川と塙川の合流する豆生田・藤田・若神子付近に古墳時代から継続する遺跡が多いため、ここが古代八ヶ岳南麓の開発拠点であった地域と考えられる。

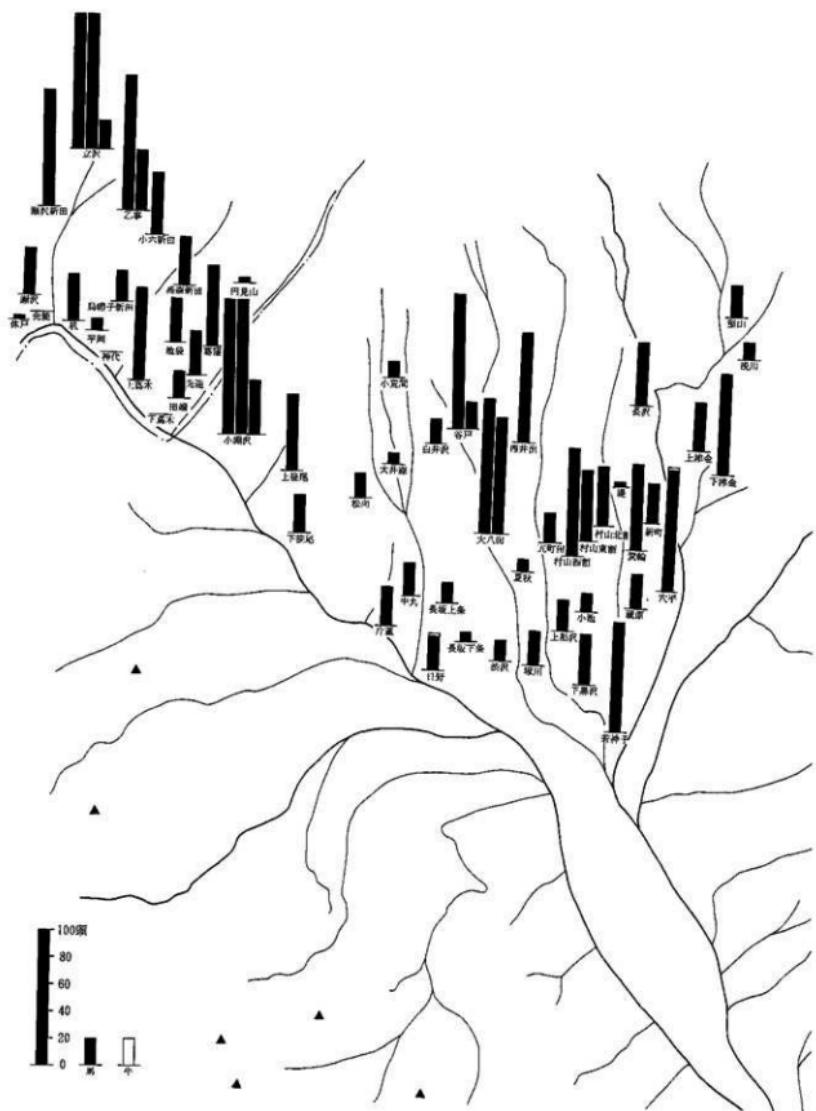
『甲斐国志』の牛馬分布をみると（第7図）と高根町・大泉村・長坂町大八田地域に非常に多く、しかも馬のみで牛がない状況である。絶対数でみると、特に大泉村谷戸・長坂町大八田では100頭を越え、また高根町村山を中心とするあたりに多く存在し、馬数／戸数の保有率（第8図）を見ても2軒に1頭（50%前後）あるいは4軒に3頭（70～80%）という高い比率を示している。須玉川流域の穴平・津金方面も同様である。この地域においては3～4軒に1頭の保有率（20～40%）では少ない方となる。長坂町の鳩川以西の地形的にも分水嶺となるあたりでは絶対数が極端に少なくなり、保有率も3～4軒に1頭の保有率（30～40%）かそれ以下となる。八ヶ岳南西麓となる小淵沢町から長野県富士見町にかけてはまた極端に多く、小淵沢では200頭を越え、保有率も3軒に2頭（61%）となり、上・下笠尾でも同様となる。富士見町での保有率も2軒に1頭（50%前後）以上となり、各戸1頭以上というところもある。

この地域には三御牧の一つ柏前牧が高根町念場原に想定され、櫻山集落周辺にのこる牧関連の地名と他の御牧である真衣野牧と近接して考えることから、議論はあるものの定説とされている。『甲斐国志』に見る馬分布から念場原周辺の櫻山・浅川は八ヶ岳南麓でも絶対数が低く、保有率も3軒に1頭の保有率（30～40%）であり、低い部類にはいる。念場原についての入会は櫻山・浅川を含めるが箕輪・村山を中心とする11ヶ村も権利を有する。櫻山・浅川を除く箕輪・村山・長沢・堤・小池・藏原は念場原以外に長坂町大八田・五町田等とともに人泉村西井出を山本とする八ヶ岳南麓の高地に13ヶ村入会を持っている。念場原のみの入会は櫻山・浅川であるが、この集落での馬数・保有率は低く、今まで見てきたような小笠原牧、槌板牧・八田牧が想定できるような状況なく、近世史料からさかのぼって柏前牧の比定地とするには可能性が低いといわざるをえない。一方で柏前牧を長野県富士見町柏平とする説（末木1987）があり、小淵沢町域と富士見町域の馬の絶対数・保有率を見ても牧の存在を想起させる状況にある。この地の入会地においても小淵沢町から県境の甲六川をこえて富士見町境川までの高地に12ヶ村入会があって、地域的に一体をなしているといえる。また柏前牧は、武川村牧原に比定される真衣野牧とともに献進することとなっていることから隣接した小淵沢・富士見町域に比定することで、高根町念場原に比定するよりは優位にあるものと考える。近世史料からさかのぼって俯瞰したときに、柏前牧は小淵沢・富士見町域に想定するのが妥当と考える。

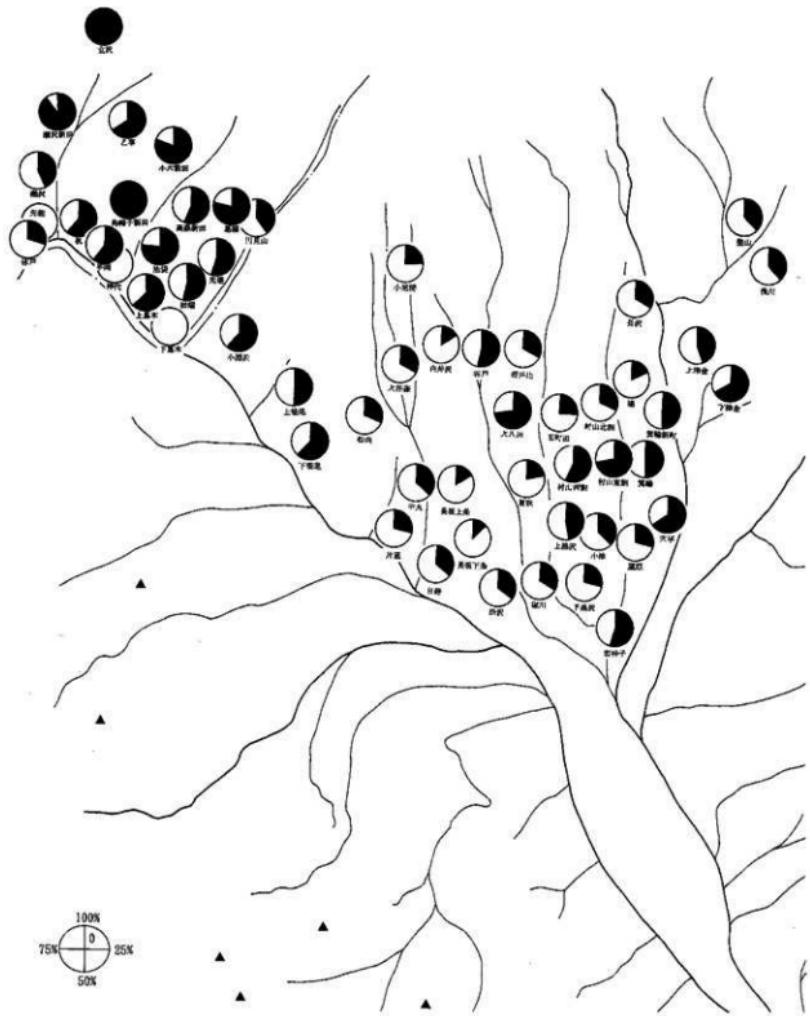
八ヶ岳南麓の、高根町箕輪・村山から大八田・西井出、さらに谷戸にみる多数の馬と高い保有率は、またこの地に牧を想定することができ、とすれば逸見牧を比定することができる。この地域の高根町域では八ヶ岳南麓と念場原に入会地を持つことから、柏前牧を念場原に比定するというのであれば逸見牧が柏前牧と同義とする『甲斐国志』の説は興味深い。須玉川沿いの穴平・上津金・下津金においても馬の絶対数・保有率がともに高く、入会地もこの三ヶ村のみによっていて、一地域をなしている。玉莊とする地域を示しているのかも知れない。

4. 篦無川上流右岸域の牧

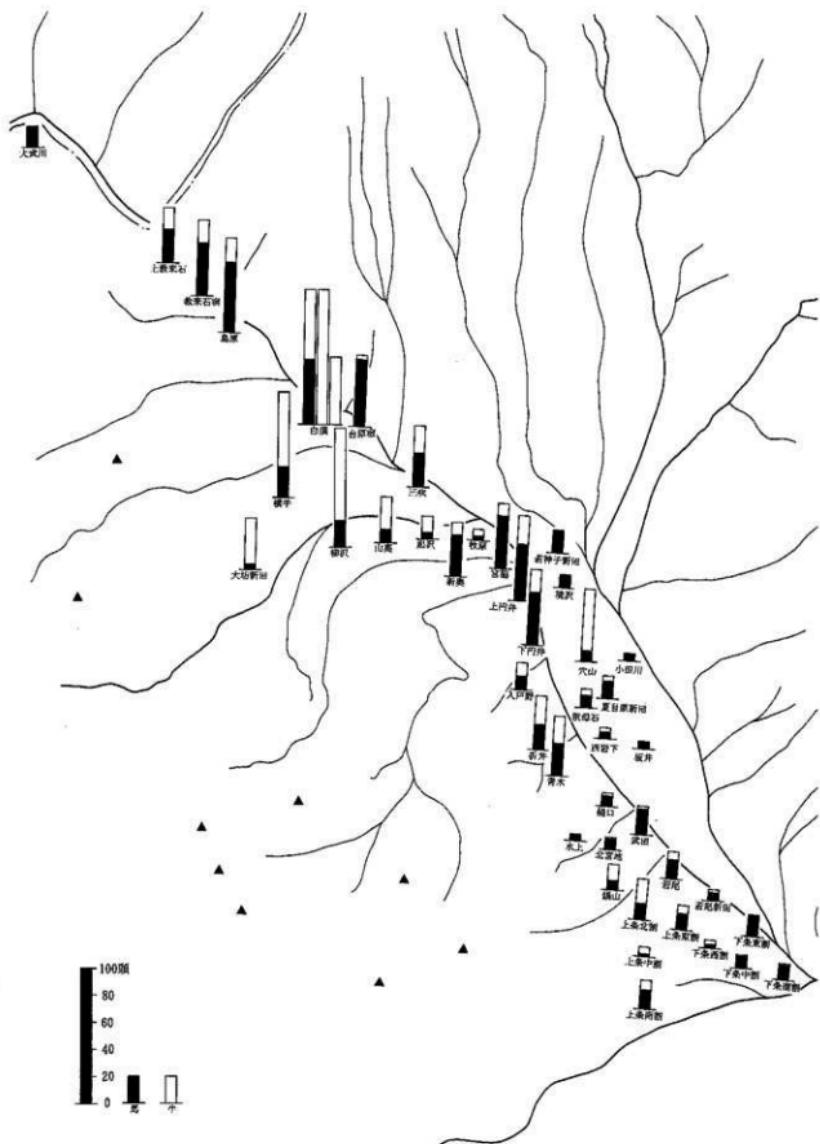
近世に武川筋とされる篚無川右岸域は、八ヶ岳南麓地域とは異なり牛の存在がめだつところである。古代の真衣野牧、中世の武河牧や甘利牧が想定される地域もある。『甲斐国志』による牛馬分布をみると（第9図）と白州町域に特に多くみられ、特に白須では250頭が存在し、そのうち200頭以上が牛という比率で、全戸数245戸で1頭保有するという高いものである。白州町域の教来石・鳥原では馬の比率が高く、また神宮川と大武川にはさまれた横手・大坊・白須では牛の比率が圧倒的に高い。入会地で見ると教来石・鳥原は、その西側背後となる雨乞山南麓に、篚無川対岸となる上笠尾・下笠尾とともにあっており、柏前牧比定地との地域的なつながりがみられる。また白須・台原・横手・大坊についても、篚無川対岸の長坂上条・下条・日野とともに駒ヶ岳7ヶ村入会が麓の大武川以北に入会地がある。



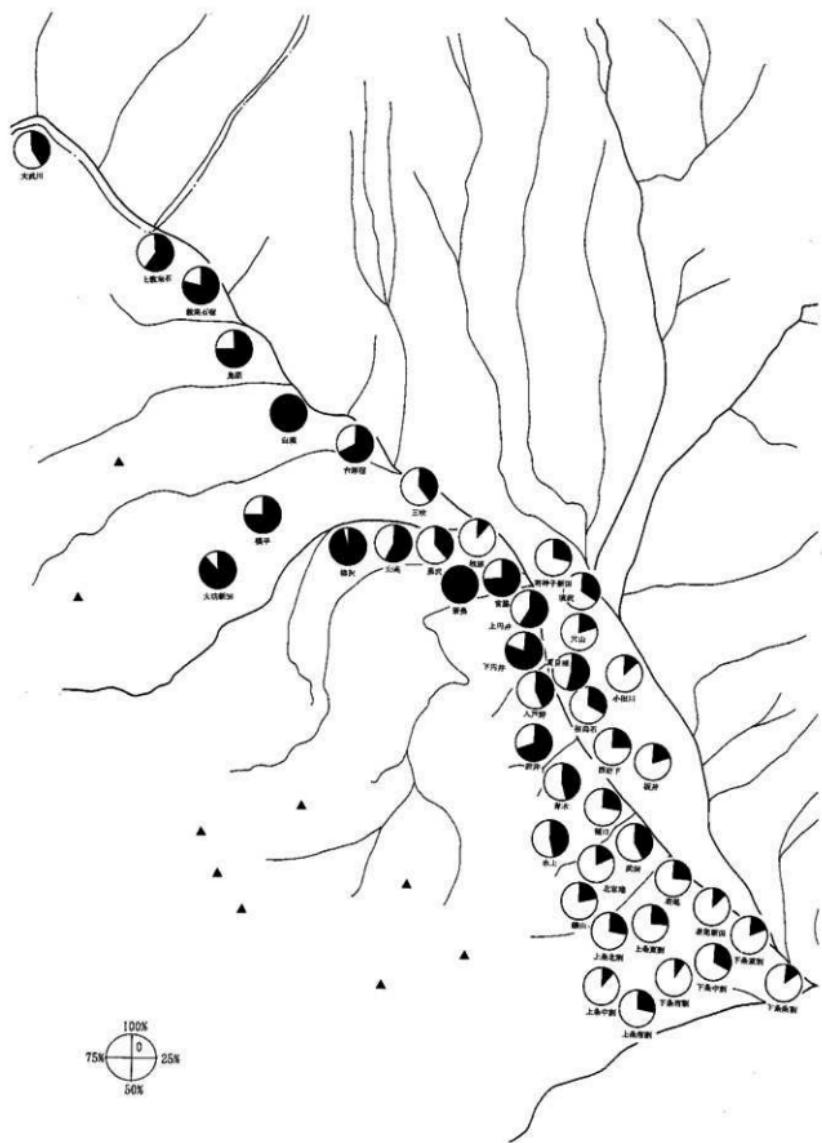
第7図 近世牛馬数 八ヶ岳山麓



第8図 近世牛馬保有率 八ヶ岳山麓



第9図 近世牛馬数 釜無川上流右岸域



第10図 近世牛馬数 保有率 釜無川上流右岸域

当地の古代遺跡には白須・横手において平安時代集落がいくつか知られ、三吹の官間田遺跡では9世紀から11世紀・中世にかけての堅穴住居47軒、掘立建物跡45棟の他に帶金具、そして「牧」とかかれた墨書き土器の出土が注目され、真衣野牧に関連する遺跡と考えられている。この地の中山をとりまくように平安時代集落が広く展開している様相を示しており、「和名抄」にいう真衣郷を比定することができ、あわせて駒ヶ岳北東麓のなだらかな傾斜地に真衣野牧があったものと想定できる。

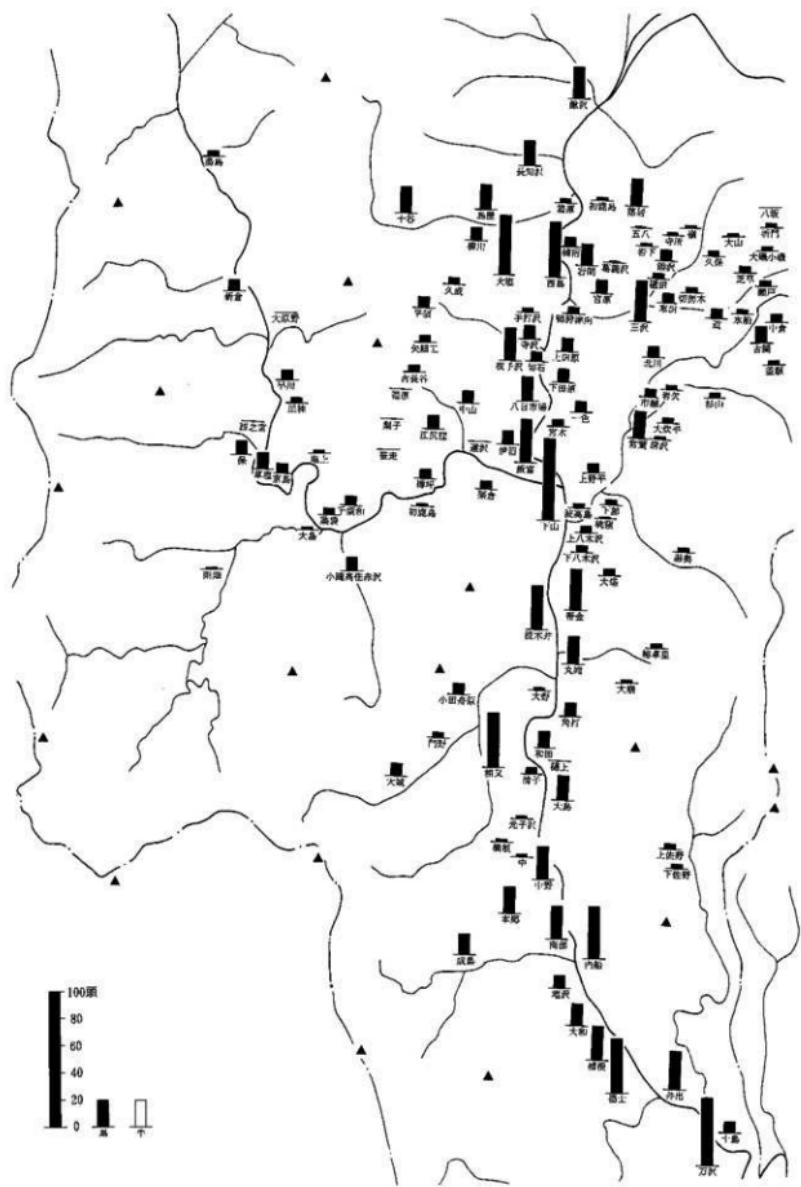
武川村牧原は、一般的に真衣野牧が想定されるところであるが、『甲斐国志』にみる牛馬の絶対数・保有率とも周囲に比べて圧倒的に低く、牧の存在をうかがい知ることはできない。この牧原から西へ続く大武川と小武川にはさまれた地域は、白州町域とは地形的に異なり、東西方向にのびる段丘台地状を呈し、近世には上流部に行くに従い牛馬数が増え、また保有率も高くなっていく。柳沢・山高・黒沢では牧原を除いて鳳凰山6ヶ村入会となつており、大武川以北の駒ヶ岳人会とも関わりがみられないところでもある。官脇と新奥では馬の比率が高く、保有率(第10回)も4軒に3頭(74%)から全戸の2軒に3頭(143%)と非常に高い割合で、牧の存在がうかがえるところでもある。『吾妻鏡』の建久5年(1194)条にある武河牧については、真衣野牧の後身であるという説があるが、真衣野牧とは異なるものとしてとらえるべきものであろう。大武川と小武川に挟まれたこの地域を真衣野牧とは別である武河牧と考えたい。

また小武川下流右岸の蘿崎市上・下円野においても近世に牛馬数が多く、その牛馬比率をみても新奥・官脇と近く(第9回)、保有率(第10回)もほぼ一致している。このことから大武川以南では黒沢川をはさんでやや様相が異なっていることがわかる。釜無川流域においても入戸野・折井・青木で牛馬数が比較的多くみられ、牛馬比率や保有率も2軒に1頭(50%前後)かそれ以上となる。さらに釜無川流域右岸を下ると、次第に絶対数・保有率が下がってくる。この地域に牧が存在したという史料はないが、天仁二年(1109)にみえる「鹿毛阿万利」、「甘利栗毛」という当時の生牧と毛色を併記した馬名から甘利牧の存在をうかがい知ることができる。甘利の上条北割・東割・南割・下条中割あたりでは周辺地域と比較して絶対数が低く、保有率も4軒に1軒(20~30%)と低調ではあるが、御勤使川流域の六ヶ・百々・上八田といった八田牧の東端部とあまり遜色がないため、牧の存在を想定したとしても無理がないところでもある。こうしてみてみると蘿崎市の釜無川右岸域には史料に表れてこない小規模な牧がいくつか存在していたとも考えられる。『吾妻鏡』治承四年(1180)12月12日条に「御騎馬石禾栗毛」があり、また八代郡石和莊付近にも牧が想定されているところもある(町田1993)。

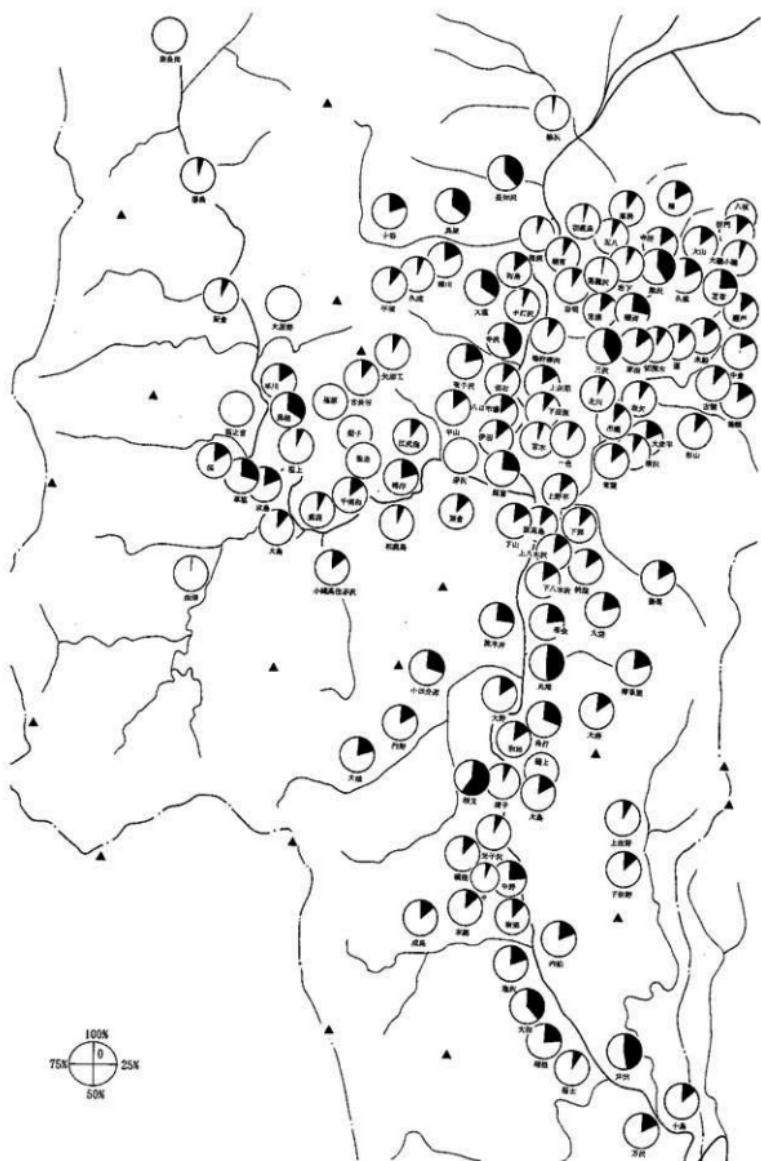
5. 富士川流域の牧

南巨摩郡の富士川流域については、甲斐国では山間地に馬が多いとされるが、『甲斐国志』による牛馬分布(第11回)では山間地より富士川流域に比較的多く存在し、しかも馬に限られる。保元二年(1157)の太政官符に石間牧が知られ、六郷町岩間に比定されるが、中世以降は「石間」と記され牧や莊をつけた例がないのですに形態が失われていたと考えられている(秋山2003)。近世の牛馬分布をみてとりわけ多くみられず、周辺域と大差ない状況がみてとれ、石間牧を反映した状況はみられない。

飯野牧については『玉葉』安元二年(1280)に「飯野御牧三箇郷之内、波木井」とあり、三郷から構成される一つが波木井とされ、また身延町大野をその遺称であるとして定説になっている。近世史料にみる大野には馬数が周辺と比較して非常に少ない(第11回)。ただ、飯野三箇郷とされる波木井には馬が多く、さらに大野南西側の相又も同様に多い。『甲斐国志』ではこの三郷を想定するが、秋山氏は史料的に相又でなく下山を想定しており(秋山2003)、そうだとしても同様に近世史料からみて馬が多数存在しているところでもあり、決しがたい。ただ、下山は近世史料から馬の絶対数は周囲に比べかなり多いが、保有率でみると(第12回)周辺と大差なく、馬数の多さは戸数の多さを反映しているものと思われる。また相又では絶対数も多いが、保有率も3軒に2頭(59%)程と高い比率を示している。いずれにしろ史料的な検討による飯野牧と近世史料による馬の分布はよく一致しており、近世においても馬飼育生産についての伝統はござれ、古代・中世の状況を少なからず反映しているものと考えられる。なお、当地の古代遺跡の状況は明らかでないが、北巨摩方面の事例からして、大野あたりに飯野牧



第11図 近世牛馬数 富士川流域



第12図 近世牛馬保有率 富士川流域

の拠点の一つがあると想定するには、その地理的条件から考えにくいところである。

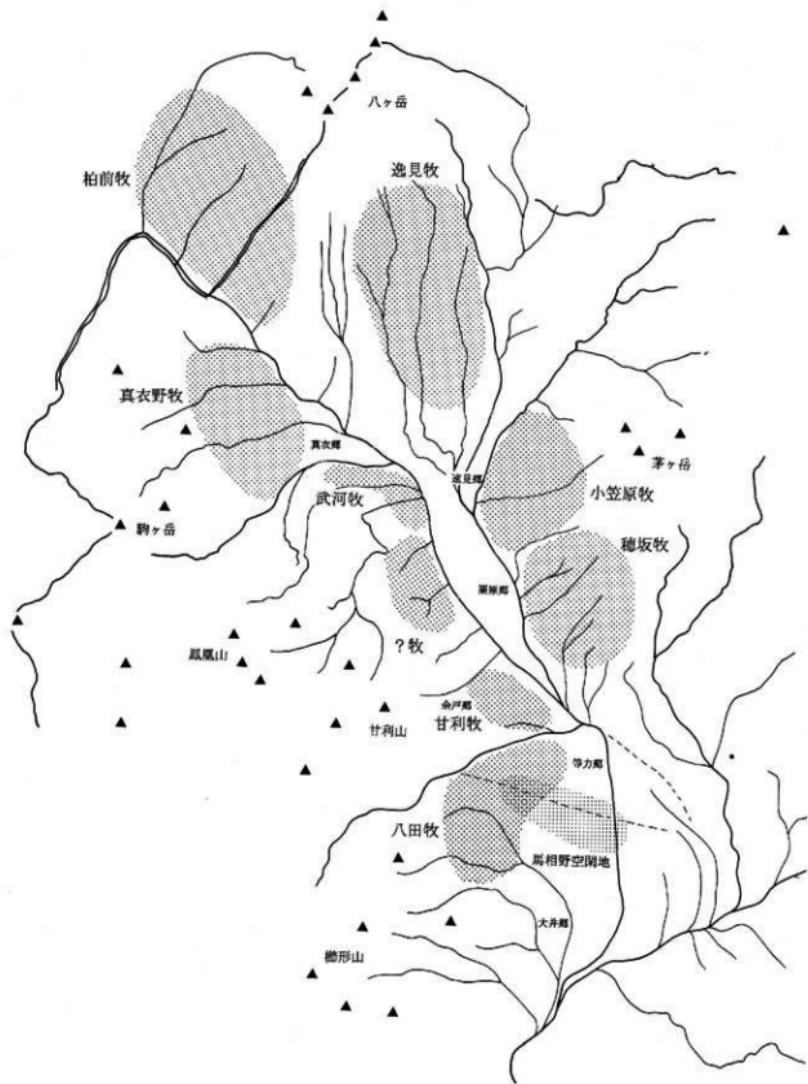
6. 古代牧の特徴

以上のように古代の牧について古代遺跡の分布とともに近世史料による牛馬数分布および入会地によって想定してみた(第13図)。これら牧として想定される地域にはその立地に共通の要素がある。八田牧では御勅使川扇状地の扇尖部から先端部の低いところに遺跡が立地し、放牧域が御勅使川扇状地扇頂部から高尾山麓の台地状の高地に設定できる。穂坂牧では茅ヶ岳南半麓の傾斜地に放牧域が想定でき、これに関する集落が塩川流域の低地となる藤井平に集落が展開する。小笠原牧も茅ヶ岳西麓の傾斜地に放牧域が想定でき、塩川流域の河岸段丘上付近やあるいは須玉川との合流地点に集落が存在している。逸見牧についても豆生田・若神子の塩川・須玉川合流域から八ヶ岳南麓に開発に入って広く集落が展開し、その背後となる八ヶ岳南麓の標高900m以上の高地にその放牧域を想定できる。小瀬沢から富士見町域に比定できる柏前牧についても同様で八ヶ岳西麓の高地にその放牧地が想定できる。白州町域に想定した真衣野牧も駒ヶ岳東麓の傾斜地を放牧地とし、釜無川よりの中山周辺に展開する平安時代遺跡がこの牧に関連するものと思われる。このように低地に集落を形成し山岳を背後とした広大な傾斜地に放牧場を設定できる地域に牧が形成され得るものと考えられ、9世紀に広く遺跡が形成され展開していく様相はこうした北巨摩地域での牧開発と深く関わっているものととらえられる。こうして複数の牧が設置されていく中で、穂坂・柏前・真衣野が御牧として選ばれ、制度として確立していくのではないかと思う。その後の制度の崩壊により御牧としての形式はなくなっていくが、牧そのものは各地にのこり、広大な場所での飼育形態から小規模化して、それぞれ中世郷村毎の飼育・生産へと移っていったため、その技術的伝統が近世にも色濃く反映されているものと考えられる。古代と中世そして近世に至るまでにその飼育形態は変化してながらも、その牛馬に関する技術は地域的に保持され伝統として伝えられていったものと想定できる。

おわりに

御勅使川扇状地の百々遺跡で平安時代集落から馬のみならず、牛歯骨が高い比率で検出され、こうした状況は近世における当地での牛馬比率ともよく一致している。百々遺跡が中世八田牧の前身となる牧に関わる遺跡であることは疑いなく、古代の御勅使川流路の想定とその地域区分が今もって入会権として残されている状況がみてとれる。古代の郷域あるいは莊園域は中世において多くはそのまま意識としてのこり、いくつかの事情により多少の変化を受けながらも近世に引き継がれていることが、この地域の検討により想定できた。限られた古代史料・考古資料のみでなく、また逆に近世史料からさかのぼって俯瞰したとき、穂坂牧や小笠原牧などでもよく状況が一致していることがとらえられた。こうした近世史料からあわせて検討したときに、柏前牧の想定域は高根町念場原ではなく、小瀬沢・長野県富士見町域となり、また真衣野牧も白州町域に比定できるものと考えた。つまりは『甲斐国志』などの近世史料を御勅使川扇状地域で古代・中世を俯瞰するのに有効と考え、穂坂・小笠原でこれを検証し、八ヶ岳南麓・釜無川上流右岸域、富士川流域に応用したものである。『甲斐国志』にみる牛馬分布では從来からいわれるように牛と馬では馬が圧倒的に多いことがわかっている。ただ、甲斐国の近世地域区分による各筋毎の把握にとどまっており、個別の村里毎によるデータからはまた異なる知見がもたらされる。巨摩郡域での牛は特に白州町域を中心に武川筋から中郡筋の山付側に多く、また茅ヶ岳山麓に少数存在するというひじょうに限られた分布である。八ヶ岳山麓では馬のみとなり、明らかな棲み分けがみてとれる。ただ、中世史料やあるいは近世史料においても、この巨摩郡域における牛馬についての生産・飼育・使役形態がどのようなものであり、また牛馬の棲み分けが何を意味するかは、検討していないため、明らかでない。近世におけるこうした牛馬の状況が古代牧へ追る一つの視点として検討したものであるが、あくまで近世史料であってその危険性は承知しているつもりである。そこで『甲斐国志』における村里部のデータを示しておくので⁴、こうした視点からまたさらに様々な方向へ進展していくのであれば、これだけでもこの上ない喜びである。牧は大い。

本稿を草するに、末木健、坂本美夫、八巻与志夫、平山優、平野修、櫛原功一、佐野隆の各氏にさまざまご助言ご



第13図 古代牧根定地

指導を賜った。特に八巻與志夫氏には日頃の討議の中で多くのことを教えていただいた。記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 『甲斐国志』の編纂された文化年間の状況についてであるが、村明細帳によても検証を試みているところである。近世江戸期をとおして各村における牛馬数の変動はおおむね同じく減少傾向にあることが指摘されている(畠2002)。図示したグラフは、『甲斐国志』村里部にみる牛馬数を棒グラフで示し、このうち馬を黒、牛を白で表現した。全戸数に対する牛馬数となる保有率(牛馬数／全戸数)は百分率で円グラフによって示した。
- 2) 北巨摩方面の古代遺跡分布とその内容については明野村教育委員会2002『梅之木遺跡Ⅰ』に詳しくまとめられているので参照していただきたい。
- 3) 長野県富士見町域のデータは富士見町誌により牛馬数が天保6年、戸数が文化12年のものでやや新しいくらいがあるもののおおむね『甲斐国志』編纂時の文化年間に近いものととらえておく。
- 4) 『甲斐国志』のデータについては山梨郡・八代郡・都留郡についてもあり、考古博物館の学習支援パソコンで公開しているので問い合わせてほしい。

参考文献

- 秋山敬 1981 「小笠原牧と小笠原莊」『甲斐路』42
- 秋山敬 1986 「真衣野牧」『白州町誌』
- 秋山敬 1990 「逸見牧と逸見莊」『長坂町誌』上
- 秋山敬 1990 「柏前牧」『高根町誌』上
- 秋山敬 2003 「甲斐の莊園」甲斐新書刊行会
- 明野村教育委員会 2002『梅之木遺跡Ⅰ』明野村文化財調査報告14
- 安達満 1982 「入会地」「小瀬沢町誌」
- 朝野善彦 1990 「甲斐國の庄園公領と地頭御家人」『国立歴史民俗博物館研究報告』25
- ・志茂樹 1950 「官牧考」「信濃」245
- 上野晴朗 1969 「八田御牧」「白根町誌」白根町役場
- 河西学 1994 「中部横断道試掘調査のテフラ分析」「研究紀要」15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 川崎剛 1994 「釜無川の流路変遷について」「武田氏研究」13 武田氏研究会
- 梯形町教育委員会 1990 「町内遺跡詳細分布調査報告書」
- 齊藤秀樹 2002 「八田村野牛島地区における奈良・平安時代の住居跡」「山梨県考古学協会誌」13
- 坂本美大「甲斐の郡(許)郷制」「研究紀要」1 山梨県立考古博物・山梨県埋蔵文化財センター
- 末木健 1986 「甲斐国亘麻郡の成立と展開」「研究紀要」3 山梨県立考古博物・山梨県埋蔵文化財センター
- 末木健 1987 「八ヶ岳西麓の古代甲信国境」「甲斐路」59
- 末木健 1999 「馬と牧」「山梨県史 資料編」2
- 末木健 2000 「山梨の牧関連資料」「古代の牧と考古学」山梨県考古学協会
- 中山誠二 2000 「二本柳遺跡の水出跡と甲府盆地の埋没条理」「二本柳遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書183集
- 西坂靖 1991 「馬の飼育と充實」「富士見町史」上
- 畠大介 2002 「石造馬頭観音の歴史資料性－甲州を中心に－」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告」第10集
- 八田村 1972 「八田村誌」
- 八田村教育委員会 2000 「村内遺跡詳細分布調査報告書」
- 花輪昭和 2002 「山との生活」「須玉町史 通史編 第一巻」
- 平川南 2000 「正倉院調査純墨書銘文－甲斐国関係－小考」「山梨県史研究」8
- 平山優 1997 「莊園の解体と郷村」「莊園と村を歩く」校倉書房

弘田文範 1986 「入会山」『白州町誌』

保坂康夫 1999 「御動使川扇状地の古地形と遺跡立地」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

保坂康夫 2002a 「古代・中世の扇状地耕作化過程と堤防」『帝京大学山梨文化財研究所報』43

保坂康夫 2002b 「御動使川の流路変遷にかかる最近の考古学的知見」『甲斐路』100 山梨郷土研究会

保坂康夫 2002c 「律令制開闢期の生活の変化」『須玉町史 通史編 第一巻』

町田有弘 1996 「馬の表記方法に関する基礎的研究」『信濃』48-10

町田有弘 1993 「牧別当に関する一考察」『白山史学』29

矢崎次郎 1969 「入会山」『白根町誌』白根町役場

八巻與志夫 1988 「中世小笠原莊について」『甲斐路』63

山路恭之助 2002 「後期古墳と駿北地域の集団領域」『須玉町史 通史編 第一巻』

山梨県教育委員会 1990 「甲西バイパス地内試掘調査」『年報6』山梨県埋蔵文化財センター

山梨県教育委員会 1991 「七ツ打C 遺跡発掘調査報告書」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書60集

山梨県教育委員会 1999 「十五所遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書158集

山梨県教育委員会 2002 「百々遺跡1」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書201集

山梨県教育委員会 2004 「百々遺跡2・4」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書212集

山梨県教育委員会 2004 「百々遺跡3・5」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書213集

山梨県教育委員会 1996 「村明細帳 巨摩郡編」山梨県史資料叢書

山梨県教育委員会 1999 「村明細帳 巨摩郡編II」山梨県史資料叢書

長野県富士見町の牛馬数

村 里	戸 数 (文化12年)	馬 (天保6年)	当歳馬	保有率
立沢	216	221	73	102%
乙事	218	145	25	67%
瀬沢新田	96	86	15	90%
御射山神戸	145	81	4	56%
木之間	72	74	11	103%
船屋	76	60	12	79%
上草木	109	69	0	63%
若宮新田	51	27	4	53%
小六新田	57	46	11	81%
高森新田	64	36	7	56%
机	57	35	10	61%
瀬沢	82	35	7	43%
先達	60	33	7	55%
芋之木	37	36	2	97%
池袋	43	33	5	77%
栗生新田	34	33	0	97%
板日新田	21	27	4	129%
烏帽子新田	21	23	2	110%
田邊	37	20	0	54%
横吹新田	18	15	2	83%
大平新田	10	14	0	140%
花場	14	9	3	64%
平岡	15	9	2	60%
木戸口新田	-	4	0	-
円見山	10	4	0	40%
神代	13	0	4	0%
休戸	10	3	0	30%
先施	14	0	1	0%
下草木	31	0	1	0%

『富士見町史』上より

甲斐国志 村里部 巨摩郡

昭和 59 年	明治 22 年	村里名	高(石、斗合升)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	牛比率	保有率
		神取村	(758,108)									
明野村	朝神村	上神取	402,150	59	223	102	121	24	0	24	0%	41%
明野村	朝神村	下神取	355,748	64	243	127	116	20	2	22	9%	34%
明野村	朝神村	浅尾村	631,604	101	383	181	202	25	0	25	0%	25%
明野村	朝神村	浅尾新田	377,848	87	302	153	149	10	13	23	57%	26%
明野村	上手村	上手村	1,632,687	286	1,174	583	591	138	0	138	0%	48%
明野村	小笠原村	小笠原村	694,049	125	512	252	260	38	2	40	5%	32%
明野村	小笠原村	三歳村	516,877	120	528	268	260	28	38	66	58%	55%
須玉町	江草村	江草村	827,412	405	1,565	805	760	160	12	172	7%	43%
須玉町	多麻村	多麻村	642,153	110	422	209	213	56	0	56	0%	51%
須玉町	多麻村	東向村	519,881	74	335	162	173	28	0	28	0%	38%
須玉町	多麻村	穴平村	762,211	141	513	264	249	90	2	92	2%	63%
須玉町	津金村	下津金村	478,578	113	501	247	254	75	0	75	0%	66%
須玉町	津金村	上津金村	340,017	81	329	174	155	36	0	36	0%	44%
須玉町	櫛足村	大豆生田村	608,213	79	313	150	163	29	0	29	0%	37%
須玉町	櫛足村	藤山村	639,029	72	232	114	118	29	0	29	0%	40%
須玉町	櫛足村	大藏村	653,290	81	320	167	153	24	0	24	0%	30%
須玉町	増富村	小尾村	340,470	200	915	485	430	60	0	60	0%	30%
須玉町	増富村	比志村	203,573	203	570	282	288	46	20	66	30%	33%
須玉町	若神子村	若神子村	1,287,403	148	546	275	271	81	0	81	0%	55%
須玉町	若神子村	境沢村	162,715	30	104	49	55	10	0	10	0%	33%
須玉町	若神子村	若神子新田	141,555	60	212	101	111	17	0	17	0%	28%
高根町	熟見村	熟見村	475,307	96	435	220	215	28	0	28	0%	29%
高根町	熟見村	小池村	168,959	40	157	81	76	15	0	15	0%	38%
高根町	熟見村	村山西削村	771,832	153	559	280	279	87	0	87	0%	57%
高根町	安都玉村	村山北割村	921,753	152	586	313	273	48	0	48	0%	32%
高根町	安都玉村	長沢村	353,926	155	613	302	311	51	0	51	0%	33%
高根町	安都郡村	荒輪村	569,763	140	564	286	278	70	0	70	0%	50%
高根町	安都郡村	荒輪新町	178,457	65	220	104	116	32	0	32	0%	49%
高根町	安都郡村	村山東割村	639,956	80	341	169	172	57	0	57	0%	71%
高根町	安都郡村	堤村	34,118	22	76	36	40	4	0	4	0%	18%
高根町	甲村	五町田村	317,257	97	372	193	179	24	0	24	0%	25%
高根町	甲村	上黒沢村	285,312	54	247	130	117	25	0	25	0%	46%
高根町	甲村	下黒沢村	651,694	145	519	255	264	41	0	41	0%	28%
高根町	清里村	浅川村	118,395	37	191	92	99	14	0	14	0%	38%
高根町	清里村	堅山村	249,783	70	309	169	140	26	0	26	0%	37%
大泉村	大泉村	谷戸村	735,576	225	984	492	492	120	0	120	0%	53%
大泉村	大泉村	西井出村	655,705	255	871	430	441	82	0	82	0%	32%
長坂町	秋田村	大八郎村	1078,683	258	1055	555	600	186	0	186	0%	72%
長坂町	秋田村	夏秋村	180,329	42	154	78	76	9	0	9	0%	21%
長坂町	清春村	中丸村	238,082	72	386	212	174	26	0	26	0%	36%
長坂町	清春村	松向村	175,431	58	239	122	117	18	0	18	0%	31%
長坂町	小泉村	人井森村	97,385	25	113	64	49	8	0	8	0%	32%
長坂町	小泉村	小荒賀村	108,588	50	162	85	77	12	0	12	0%	24%
長坂町	小泉村	白井削村	266,614	113	468	242	226	18	0	18	0%	16%
長坂町	口野森村	淡沢村	176,786	44	169	78	82	15	0	15	0%	34%
長坂町	日野春村	塚川村	562,423	76	325	173	152	25	0	25	0%	33%
長坂町	日野春村	長坂下条村	262,249	54	204	109	95	7	0	7	0%	13%
長坂町	日野春村	長坂上条村	511,660	92	383	195	188	15	0	15	0%	16%
長坂町	日野春村	日野村	256,026	78	383	194	189	25	2	27	7%	35%
小瀬沢町	小瀬沢村	小瀬沢村	952,889	391	1,555	794	761	240	0	240	0%	61%
小瀬沢町	笠尾村	笠尾村	256,428	45	199	98	101	28	0	28	0%	62%
小瀬沢町	笠尾村	上笠尾村	375,186	110	447	240	207	56	0	56	0%	51%
白州町	清春村	片廻村	330,833	101	405	336	379	29	0	29	0%	29%
白州町	柳沢村	柳沢村	340,754	92	333	180	153	20	68	88	77%	96%
白州町	駒城村	横手村	394,608	104	358	187	171	23	55	78	71%	75%
白州町	駒城村	大坊新田	63,726	43	175	87	88	4	34	38	90%	88%
白州町	曾原村	合原宿	422,683	79	322	159	163	50	3	53	6%	67%
白州町	曾原村	白須村	1489,576	245	953	496	457	48	202	250	81%	102%
白州町	風来村	鳥原村	354,880	93	382	190	192	52	18	70	26%	75%
白州町	風来村	教來石宿	365,832	71	367	188	179	39	17	56	30%	79%
白州町	西米村	上教來石村	240,751	67	282	146	136	25	16	41	39%	61%
白州町	風来村	大武川村	55,869	39	176	88	88	16	0	16	0%	41%
武川村	新富村	山高村	589,162	59	227	100	127	8	26	34	77%	58%
武川村	新富村	黒沢村	157,143	45	189	91	98	5	12	17	71%	38%
武川村	新富村	一吹村	657,342	115	502	252	250	25	20	45	44%	39%

昭和 59 年	明治 22 年	町村名	高(石、斗合升)		戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	牛比率	保有率
			高	石									
武川村	武早村	官脇村	451,989	65	226	110	116	39	9	48	19%	74%	
武川村	武里村	新奥村	131,389	28	106	48	58	31	9	40	23%	143%	
武川村	武里村	牧原村	440,179	72	288	140	148	3	5	8	63%	11%	
莊崎市	円野村	入戸野村	211,781	47	192	98	94	10	10	20	50%	43%	
莊崎市	円野村	上円井村	678,092	108	337	164	173	42	21	63	33%	58%	
莊崎市	円野村	下円井村	359,441	78	290	141	149	39	17	56	30%	72%	
莊崎市	清哲村	樺山村	207,438	37	165	84	81	8	2	10	20%	27%	
莊崎市	清哲村	水上村	30,221	11	58	27	31	5	0	5	0%	46%	
莊崎市	清哲村	青木村	558,135	97	460	241	219	24	20	44	46%	45%	
莊崎市	清哲村	折井村	212,025	58	240	117	123	19	21	40	53%	69%	
莊崎市	神山村	鶴山村	501,261	89	369	172	19	7	12	19	63%	21%	
莊崎市	神山村	北竜地村	340,087	49	176	84	92	8	1	9	11%	18%	
莊崎市	神山村	武田村	359,186	51	213	106	107	19	2	21	10%	41%	
莊崎市	童岡村	下条南割村	756,877	85	320	155	165	11	1	12	8%	14%	
莊崎市	童岡村	上条東割村	545,175	86	267	124	143	16	0	16	0%	19%	
莊崎市	童岡村	若尾新田	235,450	60	170	75	95	6	2	8	25%	13%	
莊崎市	旭村	上条南割村	615,643	76	275	137	138	14	7	21	33%	28%	
莊崎市	旭村	上条中割村	587,342	62	182	85	97	2	5	7	71%	11%	
莊崎市	旭村	上条北割村	1014,623	111	578	279	299	12	18	30	60%	27%	
莊崎市	大草村	下条中割村	253,526	32	112	54	58	9	1	10	10%	31%	
莊崎市	大草村	下条西割村	319,197	60	220	105	115	3	3	6	50%	10%	
莊崎市	大草村	上条东割村	553,206	72	251	124	127	12	6	18	33%	29%	
莊崎市	大草村	若尾村	523,511	79	289	148	141	14	6	20	30%	25%	
莊崎市	祖母石村	西岩下村	90,354	33	134	66	68	5	3	8	38%	24%	
莊崎市	祖母石村	祖母石村	122,485	43	190	98	92	9	5	14	36%	33%	
莊崎市	穴山村	穴山村	1363,801	269	1015	498	517	8	46	54	85%	20%	
莊崎市	穴山村	夏日原新田	39,663	32	141	70	71	13	4	17	24%	53%	
莊崎市	中田村	中条村	1444,769	160	663	310	353	46	0	46	0%	29%	
莊崎市	中田村	小川川村	634,423	60	240	114	126	8	0	8	0%	13%	
莊崎市	胸井村	坂井村	350,122	42	170	80	90	8	0	8	0%	19%	
莊崎市	胸井村	崩井村	1226,713	150	694	344	350	74	4	78	5%	52%	
莊崎市	下条村	南下条村	469,520	72	345	175	170	15	0	15	0%	21%	
莊崎市	下条村	北下条村	880,810	136	488	238	250	43	0	43	0%	32%	
莊崎市	莊崎村	莊崎宿	1405,211	224	1118	545	573	52	5	57	9%	25%	
莊崎市	更利村	岩下村	602,536	86	370	175	195	33	0	33	0%	38%	
莊崎市	總坂村	橋平村	162,300	86	369	172	197	40	12	52	23%	61%	
莊崎市	總坂村	久保保村	634,861	88	354	171	183	43	0	43	0%	49%	
莊崎市	總坂村	三ツ沢村	385,236	124	378	197	181	74	1	75	1%	61%	
莊崎市	總坂村	長久保村	47,253	28	102	50	52	5	11	16	69%	57%	
莊崎市	總坂村	上今井村	162,727	87	335	172	163	22	22	44	50%	51%	
反栗町	塙崎村	下今井村	576,838	102	354	161	193	11	0	11	0%	11%	
反栗町	塙崎村	志田村	397,572	46	172	78	94	12	8	20	40%	44%	
反栗町	塙崎村	宇津谷村	1079,852	177	732	332	400	20	15	35	43%	20%	
反栗町	塙崎村	岩森村	378,569	54	205	102	103	13	11	24	46%	44%	
反栗町	登美村	昌浦沢村	112,801	68	248	121	127	4	20	24	83%	35%	
反栗町	登美村	大岱村	288,046	49	155	74	81	5	0	5	0%	10%	
反栗町	登美村	团子新屋	154,375	82	277	141	136	12	0	12	0%	15%	
反栗町	登美村	毫地村	852,205	138	492	232	261	5	0	5	0%	4%	
竜王町	玉幡村	西八幡村	1236,272	171	768	391	377	14	0	14	0%	8%	
竜王町	玉幡村	玉川村	341,744	60	221	115	106	2	0	2	0%	3%	
竜王町	万歳村	万歳村	206,042	46	174	85	89	2	0	2	0%	4%	
竜王町	電王村	1457,043	137	496	238	258	4	0	4	0%	3%		
竜王町	電王村	電王村	1015,52	162	744	351	393	14	0	14	0%	9%	
竜王町	電王村	電王新町	516,307	44	198	88	110	7	0	7	0%	16%	
甲府市	宮本村	芦浦沢村	54,494	26	107	54	53	6	2	8	25%	31%	
甲府市	宮本村	猪狩村	33,221	22	99	48	51	8	1	9	11%	41%	
甲府市	宮本村	高町村	36,511	9	39	21	18	7	0	7	0%	78%	
甲府市	河木村	御岳村	245,860						0	0	0		
甲府市	官本村	黒平村	26,311	37	151	73	78	7	0	7	0%	19%	
甲府市	官本村	竹口向村	31,173	18	89	42	47	10	0	10	0%	56%	
甲府市	官本村	塔岩村	11,407	5	30	14	16	0	3	3	100%	60%	
甲府市	官本村	高成村	28,440	20	90	46	44	4	1	5	20%	25%	
甲府市	鹿泉村	川嶽村	86,596	39	123	53	70	15	0	15	0%	39%	
甲府市	千代田村	平瀬村	631,484	87	350	175	175	15	2	17	12%	20%	
甲府市	千代田村	上岱那村	372,757	111	364	180	184	16	2	18	11%	16%	
甲府市	千代田村	下岱那村	573,564	73	265	136	129	10	1	11	9%	15%	
甲府市	千塚村	堆部村	1049,687	20	67	32	35	2	0	2	0%	10%	
甲府市	千塚村	千塚村	1871,783	109	450	220	230	5	0	5	0%	5%	

縣和 59 年	明治 22 年	村見名	高(石、斗升合)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	牛比率	保有率
甲府市	大宮村	湯村	254,445	35	102	50	52	0	0	0	0%	
甲府市	大宮村	洞黒村	352,581	27	75	37	38	2	0	2	0%	7%
甲府市	大宮村	山宮村	929,735	83	335	161	174	10	0	10	0%	12%
甲府市	相川村	小松村	171,593	22	61	26	38	3	0	3	0%	14%
甲府市	相川村	和田村	736,958	36	141	70	71	8	0	8	0%	22%
甲府市	相川村	塚原村	350,740	90	343	169	174	14	0	14	0%	16%
甲府市	相川村	古府中村	1420,972	95	350	172	178	10	0	10	0%	11%
甲府市	相川村	岩連村	196,677	9	35	15	20	1	0	1	0%	11%
甲府市	相川村	下積翠寺村	312,390	95	319	152	167	21	0	21	0%	22%
甲府市	相川村	上積翠寺村	318,493	111	452	229	223	18	0	18	0%	16%
甲府市	池田村	下飯田村	569,64	26	86	44	42	1	0	1	0%	4%
甲府市	池田村	中村	387,852	26	99	49	50	1	0	1	0%	4%
甲府市	池田村	金竹村	308,606	14	60	28	32	1	0	1	0%	7%
甲府市	池田村	金竹新田	78,395	13	51	23	28	2	0	2	0%	15%
甲府市	池田村	長松寺村	499,401	26	85	45	40	2	0	2	0%	8%
甲府市	池田村	荒川村	446,946	40	177	92	85	5	0	5	0%	13%
甲府市	貢川村	上石出村	911,096	73	327	164	163	7	0	7	0%	10%
甲府市	貢川村	鶴行村	617,413	46	140	61	79	1	0	1	0%	2%
甲府市	貢川村	富竹村	341,885	39	131	67	64	0	0	0		
甲府市	貢川村	竜王下河原	191,384	19	76	39	37	2	0	2	0%	11%
甲府市	貢川村	富竹新田	317,623	40	175	71	104	2	0	2	0%	5%
甲府市	東青沼村	309,110	14	85	42	43	0	0	0			
甲府市	甲府市	西青沼村	492,792	23	74	39	35	0	0	0		
甲府市	甲府市	成田村	145,850	10	39	21	18	0	0	0		
甲府市	甲府市	浅光寺村	1426,504	88	612	296	346	1	0	1	0%	1%
甲府市	甲府市	朝氣村	464,249	17	87	51	36	0	0	0		
甲府市	甲府市	上飯田村	1210,455	120	806	385	421	4	0	4	0%	3%
甲府市	因幡村	高畠村	421,110	40	167	79	88	5	0	5	0%	13%
甲府市	因幡村	下石田村	461,090	24	108	50	58	3	0	3	0%	13%
甲府市	因幡村	下小河原村	5123,149	44	195	87	108	4	0	4	0%	9%
甲府市	因幡村	占上条村	386,507	24	96	48	48	0	0	0		
甲府市	因幡村	上条新村	593,799	51	208	107	101	3	0	3	0%	6%
甲府市	因幡村	後屋村	257,694	21	70	29	41	1	0	1	0%	5%
甲府市	因幡村	里吉村	925,748	38	156	83	73	1	0	1	0%	3%
甲府市	因幡村	因玉村	870,731	38	151	91	60	2	0	2	0%	5%
甲府市	人錦田村	二日市場村	441,026	42	127	57	70	1	0	1	0%	2%
甲府市	人錦田村	大鍛田村	191,897	14	48	23	25	1	0	1	0%	7%
甲府市	人錦田村	中条村	356,212	45	136	64	72	2	0	2	0%	4%
甲府市	人錦田村	占市場村	106,730	11	31	14	17	0	0	0		
甲府市	大鍛田村	円満寺村	227,037	11	45	23	22	2	0	2	0%	18%
甲府市	大鍛田村	森中鳥村	392,567	40	144	62	82	3	0	3	0%	8%
甲府市	大鍛田村	岡口村	276,852	17	49	21	28	1	0	1	0%	6%
甲府市	大鍛田村	漸内村	470,206	32	139	76	63	5	0	5	0%	16%
甲府市	大鍛田村	高寮村	287,499	25	95	45	50	0	0	0		
甲府市	里塙村	虹光寺村	499,349	30	97	47	50	1	0	1	0%	3%
甲府市	里塙村	板垣村	1305,734	166	568	280	288	0	0	0		
甲府市	里塙村	坂折村	563,559	45	157	78	79	3	0	3	0%	7%
甲府市	甲通村	楓根村	710,935	69	314	134	180	8	0	8	0%	12%
甲府市	甲通村	和戸村	914,781	63	215	108	107	9	0	9	0%	14%
甲府市	甲通村	川田村	782,974	84	351	179	172	6	0	6	0%	7%
甲府市	清田村	逢沢村	702,008	42	161	85	76	3	0	3	0%	7%
甲府市	清田村	西高橋村	215,796	32	126	60	66	3	0	3	0%	9%
甲府市	清田村	七沢村	268,484	22	77	41	36	2	0	2	0%	9%
甲府市	清田村	上阿原村	903,334	37	161	80	81	2	0	2	0%	5%
甲府市	清田村	向村	684,838	38	148	68	80	8	0	8	0%	21%
甲府市	住吉村	味村	716,373	30	108	58	50	2	0	2	0%	7%
甲府市	住吉村	増坪村	516,276	36	136	65	71	3	0	3	0%	8%
甲府市	住吉村	中小河原村	717,931	42	181	92	89	3	0	3	0%	7%
甲府市	住吉村	下小河原村	323,431	22	122	49	73	2	0	2	0%	9%
甲府市	住吉村	上村	1124,911	55	209	101	108	3	0	3	0%	6%
甲府市	山村村	小瀬村	789,190	44	160	73	87	3	0	3	0%	7%
甲府市	山村村	下鍛冶原村	606,081	44	203	99	104	2	0	2	0%	5%
甲府市	山村村	落合村	465,211	37	150	76	74	2	0	2	0%	5%
甲府市	山村村	西油川村	180,000	27	119	53	66	1	0	1	0%	4%
甲府市	山村村	上今井村	825,882	89	360	184	176	11	0	11	0%	12%
甲府市	朝井村	下今井村	261,374	22	93	44	49	1	0	1	0%	5%
甲府市	朝井村	小曲村	614,418	36	133	67	66	2	0	2	0%	6%

昭和 59 年	明治 22 年	村名	高(石 斗升合)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	牛比率	保有率
甲府市	朝井村	中村	155,546	11	31	17	14	1	0	1	0%	9%
甲府市	朝井村	東下条村	219,035	15	72	37	35	1	0	1	0%	7%
甲府市	二川村	西下条村	670,727	69	296	139	157	5	0	5	0%	7%
甲府市	二川村	大津村	1,303,531	78	328	160	168	8	0	8	0%	10%
敷島町	清川村	下福沢村	61,309	38	147	77	70	2	3	5	60%	13%
敷島町	清川村	上福沢村	42,362	18	84	48	36	0	0	0		
敷島町	清川村	下菅口村	41,916	20	92	44	48	5	3	8	38%	40%
敷島町	清川村	安寺村	31,496	30	99	44	55	6	1	7	14%	23%
敷島町	清川村	神戸村	32,889	20	81	40	41	0	5	5	100%	25%
敷島町	清川村	下芦沢村	56,561	31	120	60	60	9	0	9	0%	29%
敷島町	清川村	上芦沢村	61,903	26	127	63	64	13	0	13	0%	50%
敷島町	福岡村	大久保村	175,103	34	119	61	58	8	0	8	0%	24%
敷島町	福岡村	境村	309,478	36	121	62	59	6	0	6	0%	17%
敷島町	福岡村	平寺村	539,183	32	104	50	54	0	0	0		
敷島町	松島村	長塚村	504,960	54	187	88	99	11	0	11	0%	20%
敷島町	松島村	大下条村	1,007,612	83	278	132	146	9	0	9	0%	11%
敷島町	松島村	中下条村	1,423,05	122	468	230	238	9	0	9	0%	7%
敷島町	松島村	高上条村	1,211,125	93	344	171	173	9	0	9	0%	10%
敷島町	松島村	天狗沢村	130,587	32	145	74	71	7	0	7	0%	22%
敷島町	勝沢村	打返村	22,439	17	88	40	48	6	0	6	0%	35%
敷島町	勝沢村	漆戸村	25,528	22	84	43	41	3	2	5	40%	23%
敷島町	勝沢村	獅子平村	25,026	12	49	26	23	1	1	2	50%	17%
敷島町	勝沢村	上菅口村	46,245	25	91	50	41	15	1	16	6%	64%
敷島町	勝沢村	鬼沢村	591,906	168	619	298	321	47	40	87	46%	52%
敷島町	吉沢村	吉沢村	476,555	118	448	215	233	12	14	26	54%	22%
敷島町	吉沢村	千田村	26,118	8	34	18	16	1	0	1	0%	13%
昭和町	西条村	清水新所	376,478	40	141	69	72	1	0	1	0%	3%
昭和町	西条村	西条村	1,477,129	111	481	233	248	8	0	8	0%	7%
昭和町	西条村	西条新田	197,768	30	129	62	67	1	0	1	0%	3%
昭和町	西条村	紙池阿原村	658,245	43	150	79	71	3	0	3	0%	7%
昭和町	西条村	押越村	639,796	56	216	100	116	1	0	1	0%	2%
昭和町	西条村	河東中島村	833,527	67	238	105	133	0	0	0		
昭和町	常水村	常水村	444,415	25	114	60	54	0	0	0		
昭和町	常水村	鶴喰村	520,928	44	150	69	81	0	0	0		
昭和町	常水村	等地新田	106,361	0				0	0	0		
昭和町	常水村	河西村	379,441	67	225	105	120	1	0	1	0%	2%
田富町	小川井村	布施村	876,462	126	527	249	278	3	0	3	0%	2%
田富町	小川井村	山之神村	596,209	73	297	163	134	2	0	2	0%	3%
田富町	忍村	馬籠村	301,606	16	74	33	41	11	0	1	0%	6%
田富町	忍村	大山田村	321,143	35	147	61	86	1	0	1	0%	3%
田富町	忍村	藤寺村	516,216	62	310	140	170	5	0	5	0%	8%
田富町	忍村	今福村	328,711	55	263	132	131	0	0	0		
田富町	忍村	今福新田	75,937	36	160	75	85	0	0	0		
田富町	花輪村	臼井阿原村	286,449	28	104	50	54	0	0	0		
田富町	花輪村	東花輪村	905,240	86	405	176	229	0	0	0		
田富町	花輪村	西花輪村	805,236	63	290	138	152	10	0	10	0%	16%
飞驒町	細柳村	井口村	727,063	55	188	93	95	3	0	3	0%	6%
飞驒町	細柳村	梯梁寺守村	530,478	34	140	59	81	1	0	1	0%	3%
飞驒町	細柳村	中福村	648,349	32	132	54	76	0	0	0		
飞驒町	細柳村	西新芦村	179,064	16	52	22	30	0	0	0		
飞驒町	細柳村	戚島村	1,431,843	95	281	118	163	5	0	5	0%	5%
飞驒町	細柳村	乙黒村	1,035,807	56	240	102	138	6	0	6	0%	11%
飞驒町	三町村	下河東村	1,844,543	85	291	130	161	3	0	3	0%	4%
飞驒町	三町村	町村	380,274	17	61	30	31	3	0	3	0%	18%
飞驒町	三町村	上河東村	738,491	28	110	52	58	0	0	0		
飞驒町	三町村	上二条村	536,76	27	93	47	46	1	0	1	0%	4%
飞驒町	三町村	下二条村	520,281	38	142	62	80	1	0	1	0%	3%
飞驒町	三町村	一町郷村	623,768	40	221	111	110	2	0	2	0%	5%
芦安村	芦安村	芦安村	56,780	98	432	209	223	20	5	25	20%	26%
芦安村	芦安村	安通村	20,981	3	15	7	8	2	0	2	0%	67%
白根町	飯野村	飯野村	1,662,117	233	975	468	507	27	51	78	65%	34%
白根町	飯野村	飯野新田	(337,381)	99	453	237	216	20	32	52	62%	53%
白根町	今源助村	今源助村	475,838	80	340	159	181	1	0	1	0%	1%
白根町	今源助村	下今源助村	494,698	54	222	105	117	0	0	0		
白根町	在家家村	在家家村	626,004	199	921	472	449	3	2	5	40%	3%
白根町	西野村	西野村	761,693	165	816	404	412	17	8	25	32%	15%
白根町	百田村	上八田村	461,104	145	399	275	324	5	8	13	62%	9%
白根町	百田村	百田村	734,126	182	780	390	390	17	22	39	56%	21%

昭和 59 年	明治 22 年	村里名	高(石、斗升合)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	牛比率	保有率
白根町	源村	塙前村	65,029	7	33	18	15	1	4	5	80%	71%
白根町	源村	大嵐村	61,673	12	49	27	22	2	4	6	67%	50%
白根町	源村	須沢村	16,458	13	64	34	30	1	5	6	83%	46%
白根町	源村	駒場村	33,321	22	87	37	50	2	5	7	71%	32%
白根町	源村	築山村	155,238	32	116	58	58	8	2	10	20%	31%
白根町	源村	有野村	702,033	137	603	284	319	4	27	31	87%	23%
八田村	田之間村	下高砂村	596,236	55	215	108	107	8	0	8	0%	15%
八田村	田之間村	徳永村	774,176	58	193	85	108	4	0	4	0%	7%
八田村	田之間村	桜原村	252,895	45	177	89	88	4	0	4	0%	9%
八田村	御影村	六科村	333,971	72	280	141	139	12	10	22	46%	31%
八田村	御影村	野牛嵩村	1143,548	133	483	226	257	7	0	7	0%	5%
八田村	御影村	上高砂村	565,316	80	314	140	174	7	0	7	0%	9%
櫛形町	明穂村	桃園村	570,043	154	684	351	333	3	0	3	0%	2%
櫛形町	明穂村	山寺村	413,339	80	346	170	176	1	2	3	67%	4%
櫛形町	明穂村	小笠原村	505,687	230	830	414	416	5	0	5	0%	2%
櫛形町	禪村	曲輪田村	780,676	189	753	381	372	25	55	80	69%	42%
櫛形町	禪村	高尾尾村	41,979	18	72	34	38	3	10	13	77%	72%
櫛形町	禪村	平闐村	535,321	105	394	190	204	31	38	69	55%	66%
櫛形町	禪村	上官地村	611,976	132	542	268	275	10	30	40	73%	30%
櫛形町	野之瀬村	上一瀬村	330,310	65	236	15	21	5	10	15	67%	23%
櫛形町	野之瀬村	下一瀬村	225,979	43	197	101	96	6	0	6	0%	14%
櫛形町	野之瀬村	鋪物師原村	122,302	0				0	0	0		
櫛形町	野之瀬村	上野村	143,431	43	178	86	92	6	5	11	46%	26%
櫛形町	野之瀬村	中野村	575,414	106	427	198	229	12	13	25	52%	24%
櫛形町	豊村	上今井村	222,448	131	544	260	284	2	1	3	33%	2%
櫛形町	豊村	吉田村	825,814	133	492	244	248	2	0	2	0%	2%
櫛形町	豊村	沢登	(292,651)	127	572	305	267	1	1	2	50%	2%
櫛形町	豊村	十五所	(221,698)	108	503	251	252	0	0	0		
甲西町	大井村	下宮地村	143,305	27	105	54	51	0	0	0		
甲西町	大井村	江原村	494,588	83	374	191	183	2	0	2	0%	2%
甲西町	大井村	鮎沢村	572,969	75	340	165	175	1	2	3	67%	4%
甲西町	大井村	占市場村	274,466	85	436	216	220	1	0	1	0%	1%
甲西町	落合村	落合村	617,900	174	754	384	370	9	2	11	18%	6%
甲西町	落合村	川上村	130,716	14	62	32	30	0	0	0		
甲西町	落合村	塙原村	204,199	44	211	99	112	4	0	4	0%	9%
甲西町	落合村	福沢村	385,811	95	394	184	210	2	4	6	67%	6%
甲西町	落合村	秋山村	151,244	40	185	90	105	1	0	1	0%	3%
甲西町	五明村	戸山村	519,852	80	380	187	193	0	0	0		
甲西町	五明村	宮沢村	309,400	48	187	92	95	0	0	0		
甲西町	五明村	清水村	192,338	27	111	54	57	0	0	0		
甲西町	五明村	大師村	540,688	80	342	165	177	0	0	0		
甲西町	五明村	前沢村	419,194	141	669	306	363	6	2	8	25%	6%
甲西町	五明村	南湖村	460,229	45	243	113	130	1	0	1	0%	2%
甲西町	南湖村	田島村	803,093	121	520	261	259	3	0	3	0%	3%
甲西町	南湖村	和泉村	328,488	68	321	159	162	1	0	1	0%	2%
甲西町	南湖村	東南湖村	920,125	145	797	380	417	0	0	0		
甲西町	南湖村	高田新田	51,887	0				0	0	0		
若草町	鏡中条村	下今井村	274,489	62	270	140	130	2	0	2	0%	3%
若草町	鏡中条村	鏡中条村	1501,422	213	1089	544	545	0	0	0		
若草町	三恵村	十日市場村	709,819	105	449	222	227	2	6	8	75%	8%
若草町	三恵村	加賀美村	696,995	123	560	271	289	0	0	0		
若草町	三恵村	寺部村	603,081	106	458	216	242	0	0	0		
若草町	三恵村	康藤村	208,532	25	110	53	57	1	0	1	0%	4%
若草町	三恵村	藤田村	1342,993	127	624	303	321	1	0	1	0%	1%
増穂町	平林村	平林村	295,241	72	239	115	124	0	38	38	100%	53%
増穂町	穗積村	小窓村	291,332	155	619	287	332	3	37	40	93%	26%
増穂町	穗積村	高下村	255,323	130	498	236	262	10	11	21	52%	16%
増穂町	穗積村	春木村	684,298	85	414	191	223	9	0	9	0%	11%
増穂町	穗積村	小林村	555,718	112	551	281	270	4	0	4	0%	4%
増穂町	穗積村	長沢村	758,026	177	928	459	469	8	0	8	0%	5%
増穂町	穗積村	天神中条村	473,013	93	415	203	212	11	1	12	8%	13%
増穂町	穗積村	大久保村	217,162	45	230	106	124	2	4	50%	9%	
増穂町	穗積村	戴勝寺村	738,554	102	496	247	249	11	5	16	31%	16%
増穂町	戴勝寺村	大門村	192,247	57	289	148	141	0	0	0		
増穂町	戴勝寺村	青柳村	733,416	277	1412	696	716	14	0	14	0%	5%
増沢町	鰐沢村	鰐沢村	1012,604	639	2897	1439	1458	9	14	23	61%	4%
増沢町	五間村	長知沢村	52,380	47	230	113	117	18	0	18	0%	38%
増沢町	五間村	鳥屋村	81,156	52	235	115	120	18	0	18	0%	35%

昭和 59 年	明治 22 年	村名	高(石、斗合升)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	牛比率	保有率
鰐沢町	五間村	十谷村	117,491	97	420	200	220	19	0	19	0%	20%
鰐沢町	五間村	柳川村	76,488	51	231	110	21	9	0	9	0%	18%
鰐沢町	五間村	箱原村	118,999	54	262	127	135	3	0	3	0%	6%
鰐沢町	初鹿島村	初鹿島村	59,203	50	233	122	111	2	0	2	0%	4%
六郷町	岩間村	岩間村	662,098	177	716	362	354	16	0	16	0%	9%
六郷町	蓬尼村	蓬尼村	319,514	200	888	452	436	20	0	20	0%	10%
六郷町	落居村	無沢村	42,875	20	86	44	42	8	0	8	0%	40%
六郷町	落居村	岩下村	61,426	28	106	52	54	2	0	2	0%	7%
六郷町	落居村	五八村	17,648	14	67	30	37	1	0	1	0%	7%
六郷町	落居村	寺所村	17,194	14	52	23	29	2	0	2	0%	14%
六郷町	葛籠沢村	葛籠沢村	151,070	55	224	116	108	1	0	1	0%	2%
六郷町	鷺狩塗向村	鷺狩塗向村	94,381	52	234	120	114	5	0	5	0%	10%
六郷町	牠麻村	牠麻村	93,786	83	408	208	200	7	0	7	0%	8%
六郷町	宮原村	宮原村	215,028	79	362	196	166	10	0	10	0%	13%
中富町	曙村	久織工村	99,809	62	258	120	138	5	0	5	0%	8%
中富町	曙村	古長谷村	68,523	46	202	92	110	5	0	5	0%	11%
中富町	曙村	中山村	151,482	62	280	133	127	9	0	9	0%	15%
中富町	曙村	蓬沢村	78,842	10	50	25	25	0	0	0	0	—
中富町	曙村	江尻塗村	115,576	101	379	184	195	10	0	10	0%	10%
中富町	曙村	福原村	28,021	17	65	35	30	0	0	0	0	—
中富町	曙村	梨子村	35,705	12	58	28	30	0	0	0	0	—
中富町	飯窓村	飯窓村	134,276	130	588	289	299	32	0	32	0%	25%
中富町	伊沼村	伊沼村	61,703	77	305	153	152	10	0	10	0%	13%
中富町	大須成村	大塙村	197,537	130	480	250	230	40	4	44	9%	34%
中富町	大須成村	久成村	136,749	83	378	185	193	5	0	5	0%	6%
中富町	大須成村	平須村	171,452	77	308	153	155	8	0	8	0%	10%
中富町	切石村	手打沢村	207,228	47	210	107	103	3	0	3	0%	6%
中富町	切石村	夜子沢村	162,935	118	497	248	249	24	0	24	0%	20%
中富町	切石村	寺沢村	127,698	24	109	56	53	10	0	10	0%	42%
中富町	切石村	切石村	90,105	63	287	147	140	7	0	7	0%	11%
中富町	西島村	西島村	305,395	300	1300	610	590	37	4	41	10%	14%
中富町	八日市場村	八日市場村	184,132	128	611	311	300	18	0	18	0%	14%
早川町	五箇村	笛走村	71,486	20	96	45	51	0	0	0	0	—
早川町	五箇村	塙上村	122,821	30	172	82	90	2	0	2	0%	7%
早川町	五箇村	裏袋村	76,478	66	328	162	166	5	0	5	0%	8%
早川町	五箇村	千廻和村	122,421	36	150	75	75	5	0	5	0%	14%
早川町	五箇村	桜坪村	39,359	34	145	75	70	7	0	7	0%	21%
早川町	穂鳥村	雨畑村	100,243	116	510	253	257	1	0	1	0%	1%
早川町	穂鳥村	大鳥村	20,631	18	91	40	51	2	0	2	0%	11%
早川町	奈良田村	奈良田村	31,897	66	291	150	141	4	0	4	0%	6%
早川町	本郷村	本郷村	19,286	29	145	68	77	2	0	2	0%	7%
早川町	本郷村	小綱高住赤沢村	74,185	69	344	165	179	10	0	10	0%	15%
早川町	三里村	早川村	64,665	46	234	126	108	7	0	7	0%	15%
早川町	三里村	人原野村	41,297	58	275	137	138	0	0	0	0	—
早川町	三里村	新合村	96,352	105	408	203	205	8	0	8	0%	8%
早川町	都川村	京島村	54,714	38	168	82	86	7	0	7	0%	18%
早川町	都川村	草塙村	62,449	42	187	92	95	12	0	12	0%	29%
早川町	都川村	黒柱村	19,318	12	56	27	29	4	0	4	0%	33%
早川町	都川村	西之宮村	29,905	15	88	40	48	0	0	0	0	—
早川町	都川村	保村	52,792	63	270	138	132	10	0	10	0%	16%
身延町	豊岡村	小出脇原村	106,879	28	139	69	70	8	0	8	0%	29%
身延町	豊岡村	門野村	44,745	25	144	69	75	4	0	4	0%	16%
身延町	豊岡村	大城村	60,699	47	255	126	129	9	0	9	0%	19%
身延町	豊岡村	相又村	173,357	68	376	178	198	40	0	40	0%	59%
身延町	豊岡村	横根村	21,144	17	76	39	37	2	0	2	0%	12%
身延町	豊岡村	清子子村	186,508	70	327	63	64	5	0	5	0%	7%
身延町	豊岡村	光子沢村	52,924	27	131	63	68	2	0	2	0%	7%
身延町	豊岡村	中山村	36,448	32	150	74	76	2	0	2	0%	6%
身延町	福居村	栗倉村	100,118	51	312	149	163	6	0	6	0%	12%
身延町	福居村	下山村	773,084	384	1662	832	830	60	0	60	0%	16%
身延町	身延村	波木井村	199,313	125	607	316	291	32	0	32	0%	26%
身延町	身延村	大野村	66,693	13	71	34	37	2	0	2	0%	15%
身延町	大河内村	上八木沢村	94,457	36	181	93	88	5	0	5	0%	14%
身延町	大河内村	下八木沢村	69,221	33	151	83	68	5	0	5	0%	15%
身延町	大河内村	金金村	289,253	141	537	265	272	30	0	30	0%	21%
身延町	大河内村	椿草里村	24,059	15	72	34	38	3	0	3	0%	20%
身延町	大河内村	大崩村	20,696	14	79	36	43	2	0	2	0%	14%

昭和 59 年	明治 22 年	村里名	高(石、斗合升)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	牛比率	保有率
身延町	大河内村	丸説村	69,004	42	177	88	89	20	0	20	0%	48%
身延町	大河内村	角打村	103,772	34	168	98	70	10	0	10	0%	29%
身延町	大河内村	和田村	179,622	80	295	153	142	12	0	12	0%	15%
身延町	大河内村	穂上村	15,251	9	58	29	29	0	0	0	0	0
身延町	大河内村	大烏村	351,039	111	542	272	270	18	0	18	0%	16%
下部町	共和村	上山原村	95,040	61	278	138	140	10	0	10	0%	16%
下部町	共和村	下田原村	204,095	101	403	195	208	10	0	10	0%	10%
下部町	共和村	宮木村	179,897	99	389	209	180	5	0	5	0%	5%
下部町	共和村	色村	177,760	91	379	188	191	8	0	8	0%	9%
下部町	久那上村	種出村	32,870	15	68	34	34	4	0	4	0%	27%
下部町	久那上村	三沢村	385,004	74	723	359	354	30	0	30	0%	41%
下部町	久那上村	平田村	98,548	49	251	126	125	7	0	7	0%	14%
下部町	久那上村	切房本村	56,628	46	210	103	107	4	0	4	0%	9%
下部町	久那上村	蓮村	57,726	55	225	117	108	7	0	7	0%	13%
下部町	久那上村	水船村	31,494	21	80	42	38	3	0	3	0%	14%
下部町	久那上村	芝草村	41,321	22	113	55	58	5	0	5	0%	23%
下部町	下九一色村	折門村	26,392	24	100	60	40	3	0	3	0%	13%
下部町	下九一色村	八坂村	7,448	20	62	32	30	0	0	0	0	0
下部町	富里村	常葉村	373,959	150	645	345	300	20	0	20	0%	13%
下部町	富里村	市郷村	87,274	53	218	110	108	6	0	6	0%	11%
下部町	富里村	北川村	79,391	104	471	239	232	8	0	8	0%	8%
下部町	富里村	清沢村	53,074	24	93	41	52	2	0	2	0%	8%
下部町	富里村	人炊平村	42,095	22	93	46	47	4	0	4	0%	18%
下部町	富里村	岩久村	55,075	33	126	66	60	3	0	3	0%	9%
下部町	富里村	杉山村	60,257	37	168	89	79	4	0	4	0%	11%
下部町	富里村	下部村	95,362	34	136	71	65	4	0	4	0%	12%
下部町	富里村	湯畠村	35,377	18	73	38	35	3	0	3	0%	17%
下部町	富里村	上野平村	90,107	54	241	109	132	7	0	7	0%	13%
下部町	富里村	波高鳥村	111,170	25	126	61	62	3	0	3	0%	12%
下部町	富里村	桃源村	6,526	7	32	16	16	1	0	1	0%	14%
下部町	富里村	大袋村	21,759	26	124	67	57	5	0	5	0%	19%
下部町	古闘村	大穂小穂村	58,990	49	229	123	106	3	0	3	0%	6%
下部町	古闘村	古闘村	198,801	105	428	215	213	12	0	12	0%	11%
下部町	古闘村	釜顛村	30,804	19	99	62	37	3	0	3	0%	16%
下部町	古闘村	中台村	45,524	42	181	99	92	6	0	6	0%	14%
下部町	古闘村	細戸村	54,382	30	142	74	68	4	0	4	0%	13%
下部町	古闘村	楓子村	44,575	52	267	140	127	5	0	5	0%	10%
下部町	山保村	嶺村	18,713	12	67	40	27	2	0	2	0%	17%
下部町	山保村	久保村	45,250	22	98	50	48	4	0	4	0%	18%
下部町	山保村	大山村	16,561	14	47	26	21	2	0	2	0%	14%
南部町	榮村	内船村	472,034	207	1110	556	554	38	0	38	0%	18%
南部町	榮村	上佐野村	62,751	46	250	127	123	4	0	4	0%	9%
南部町	榮村	下佐野村	37,312	23	128	65	63	3	0	3	0%	13%
南部町	榮村	井出村	101,536	60	299	160	139	28	0	28	0%	47%
南部町	榮村	十島村	108,030	59	316	161	152	8	0	8	0%	14%
南部町	睦合村	中野村	272,117	105	491	266	225	24	0	24	0%	23%
南部町	睦合村	本郷村	441,077	145	651	327	324	19	0	19	0%	13%
南部町	睦合村	成島村	259,776	105	518	274	244	15	0	15	0%	14%
南部町	睦合村	南部村	304,352	191	818	408	410	24	0	24	0%	13%
南部町	睦合村	漆沢村	131,706	45	210	103	107	9	0	9	0%	20%
南部町	睦合村	大和村	104,694	42	217	104	113	16	0	16	0%	38%
高沢町	高沢村	椿根村	301,326	110	520	258	262	25	0	25	0%	23%
高沢町	高沢村	福士村	854,408	470	1983	1062	921	40	0	40	0%	9%
高沢町	万沢村	万沢村	569,286	286	1225	663	562	50	0	50	0%	18%
合計			184606,820	33993	143238	70980	71691	5990	1471	7461	20%	22%

(一) 美術・建造物・城郭 羽中田壯華先生喜寿記念論文集刊行会編 岩田書院

(二) 挿 繪 二〇〇二「山梨県の中世石仏—陽刻六地蔵板碑を中心として—」

「地城考古学の展開」村田文夫先生還暦記念論文集

(三) 挿 繪 二〇〇三「山梨県の中世石仏—一石二仏陽刻六地蔵石仏龕—」

「新世紀の考古学」大塚初重先生喜寿記念論文集

(四) 双葉町役場 一九七七「双葉町誌」

(五) 挿 繪 二〇〇二「山梨県の中世石仏 地蔵石仏(光背形)を中心として—」
「研究紹要」一八 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター

(六) 丸形の地蔵・阿弥陀立像としては甲府市古町中町大泉寺(二例)、同上帯那町
道祖神場(一例)、同飯田三丁目宝樹寺(一例)、同丸の内三丁目法輪寺(一例)、
同中央三丁目瑞泉寺(永禄鎧)(一例)、同太田町一蓮寺(四例)、双葉町岩森光
照寺(一例)、中巨摩郡昭和町河東中島浅間寺(一例)、南アルプス市巣原中丸
(山八田村の中丸地蔵)(一例)、東八代郡石和町小石和十善院前(一例)、塩山
市藤木恵林寺(一例)、牧丘町袖口雲法寺(一例)など二六例が知られる。この
うちの雲法寺例に類似点がみられる。さらにこれらより若干後出で江戸時代
まで入らないと考えられる丸形地蔵立像として垂崎市龍岡町下条南前大聖寺

(一例)、南アルプス市野牛鳥極苦院(一例)などがある。しかし、これらには
類似する部位はみられない。

(七) 阿弥陀三尊像は光背形として山梨市七日市場北向地蔵、東八代郡一宮町宝樹
院、天正期から江戸時代初期ころかと考えられる同御坂町成田熊野神社東、石
和町小石和番門寺(妙壽寺)、さらに龕形として一宮町木本長昌寺、勝沼町藤井
阿弥陀寺例などがあり、このうち後二例の歴史形態が切妻形(山形)である。

(八) 山梨県教育委員会 一九九五「山梨県指定史跡 甲府城跡V」 山梨県埋蔵
文化財セントー調査報告書第九八号。なお、本誌掲載の図面は、再実測した
ものである。

面形態は大きく三形態に分けられるが、平面形態は平屋根（龕の上縁）と切り妻型の屋根の正面（山形・破風）、それに側面を正面とするいずれかである。

まず、切り妻型の屋根の側面を正面として使うのは、長谷寺六地蔵石幢（A-1）、桃岳院六地蔵石幢（A-2）、小曾利六地蔵石幢（A-1ないしA-2）、地蔵院、峯觀音堂六地蔵石幢（A-3）の五例である。これらを時期による編年順序で比較すると、大まかであるがA-1からA-3へといつた移行が、すなわち棟の先端が突出する形態（A-1・A-2）から、突出の無くなる形態（A-3）への変化がとらえられる。さらに側面においても長谷寺・桃岳院・小曾利六地蔵石幢（以上a-1）と地蔵院・峯觀音堂六地蔵石幢（以上a-2）といった違いがあり、これもa-1からa-2へといつた移行、すなわち屋根の後面が塔身から突出する形態（a-1）から突出の無い形態（a-2）への変化がとらえられる。このことは長谷寺・桃岳院・小曾利・地蔵院六地蔵石幢と地蔵院・峯觀音堂六地蔵石幢との間に、具体的期間は明確にならないが、多少の時間差の存在したであろうことが想定される。

切妻型の屋根の正面を正面として使うのは甲府城跡・普門院六地蔵石幢（C-1）、小松町東追祖神場六地蔵石幢（C-2）、少林寺六地蔵石幢（C-3）の四例である。これらを時期による編年順序で比較すると、C-1からC-2といった移行、すなわち屋根の先端の突出の無いもの（C-1）から、突出するものの（C-2）へといつた変化がとらえられる。ただし、比較資料数は少ない。C-3については、屋根の正面が龕の上縁との一体造りのものであるが、一例のみでその派生を確認できない。

円光院六地蔵石幢（B）は、全く屋根が意識されていないかのようだ。

いっていえば平屋根というべき形態で、用材に自然面を残すところがみられ、龕に地蔵像を彫る意識が強かつたのではないだろうか。しかし、一石二仏六地蔵石幢には、同様な龕の上縁平屋根のみのものも龕地東部で確認されるため、あるいは地域色からきたものともいえる。

A形態とC形態との時間的関係は、少林寺六地蔵石幢を除きそれほど大きな隔たりではなく、比較的近い時期に造られた形態といえる。ただ、A形

態の分布地域をみると、敷島町以西の中巨摩郡地域に集中することが分かる。これに対してC形態あるいはB形態の分布地域はをみると、A形態とは全く違う甲府市とその東側の東八代郡、東山梨郡といった地域に確認できるのみである。甲府市以東にC形態あるいはB形態の分布がみられるは、東側地域にみられる一石二仏六地蔵石幢・阿弥陀三尊石仏龕などに同様な屋根形態がみられることによるのであろうか。

七 おわりに

六地蔵石幢の概要、年代、地蔵像の配列順序、分布などについて、長々と述べてきたが、陽刻地蔵板碑、陽刻六地蔵板碑、一石二仏六地蔵石幢、地蔵石仏（光背形）の分布域、特に陽刻六地蔵板碑とは近接する地域でありながら、明確な分布地域の違いが確認できたばかりでなく、盆地の西側地域と東側地域に地蔵像や屋根形態に違いをもせて分布することが明らかとなつた。さらに地蔵像の配列順序では、陽刻六地蔵板碑に比べ六地蔵石幢の配列順序には一つの強い規則性が働いていたことが考えられるところとなつた。

六地蔵信仰についても盛んに行われたであろう様子も確認でき、この状況から丸彫の地蔵立像や地蔵石仏（光背形）などについても、当初六地蔵として製作されたものも相当数あつたのではないかと思われる。

県内の六地蔵石仏については、今回一応のほとんどを取り上げたかと思われる。内容的に十分でないにしても、今後の石仏研究にいささかでもお役にたてれば幸いである。

最後に、資料の國化にあたり、ご援助、ご教示をいただいた長谷寺、桃

岳院、地蔵院、長光寺、普門院、竜雲寺、少林寺、東漸寺、円光院、森本

峯氏、原田豊氏、山森のり子氏、中沢英一郎氏に厚くお礼申し上げたい。

註および参考文献

- (一) 捕 稲 一〇〇二「山梨県の中世石仏・陽刻地蔵菩薩板碑」「甲斐の

と考えている三面に二体づつ地蔵像を彫った南アルプス市野牛島（旧八田村）深訪神社東の六地蔵石幢や、江戸時代としては双葉町駒沢の共同墓地、南アルプス市在家塚（旧白根町）の秋月院、やや離れるが北巨摩郡武川村新奥宝前院などの六地蔵石幢にもみられるなど、この地域周辺に色濃く分布している。おそらく道筋を中心として、取り入れられたものの残影とみるとができよう。

一方の甲府市以東においては、既に指摘したように敷島町以西にみられるような状況はないが、別の屋根形態をもつ六地蔵石幢の分布地域の広がりをとらえられる。また、一石三仏六地蔵石仏龕のみられる山梨市岩手の切通組道祖神場、東八代郡御坂町下野原の東漁神社東などを加えれば、盆地東側の地域も石像物の形態に多少の違いはあるものの、六地蔵信仰が盛んに行われていた地域とみることはできる。この中で牧丘町円光院にある六地蔵石幢は、製造に盆地東側の様相を認められるが、全体の像容から甲府城跡六地蔵石幢や普門院六地蔵石幢とは別形態といえるもので、その像容はむしろ敷島町以西に分布する形態に類似するものといえる。このように相反する形態には、政治的緊張関係を繋ぎ持つ持ち込まれたのではないかだろうか。あるいは逆に単なる地勢からくるもので、甲府市の北部の地域を経由して入ってきたのではないかといった推論もでてくるところである。

五 地蔵像の足形態

六地蔵石幢の分布を見てきたが、次に地蔵像に彫られた足と爪先との形態の違いからみた分布状況について触れてみたい。資料のうち、長谷寺・桃岳院・小曾利・半觀音堂・六地蔵石幢の地蔵像の、いずれもが板状（帯状）に彫られる足と爪先である。また地蔵院六地蔵石幢の地蔵像も、爪先の外側に縦方向のやや太めな線のような足をねらみることができ、やはり同一形態のものと考えてよさそうである。さらに少林寺六地蔵石幢の地蔵像も、表現に多少違うところもみられるが、基本的には同一形態といえるものである。

これらに対して円光院・甲府城跡・普門院・小松町東組道祖神場・六地蔵

石幢などの地蔵像は、製造場から裏に彫られる垂直な沈線と、その両脇に「ハ」の字状に末広がりに聞く細日の沈線による足と、これらの間に爪先の彫られる形態を原則とするものである。ただし今回の資料の中には、爪先を省略したものや、欠落したものもみられる。

六地蔵石幢の地蔵像においても、このように足の形態に二つの大きな違いの存在が知られ、そしてこの形態の違いは、敷島町あたりをその境として、前者が盆地の西側、後者が東側といった地域に分布するのを確認できる。さらに盆地を東西に一分する状況は、六地蔵石幢のほかに陽刻地蔵板碑、陽刻六地蔵板碑、一石三仏六地蔵石仏龕、地蔵石仏（背光形）などにも確認できるところであり、盆地の北部を席卷する六地蔵石幢（重制）の地蔵像にも同様な状況が確認されている。六地蔵石幢を含め、ほとんどの石仏に認められるこのような状況を作り出したものには、一体何があるのだろうか。当時の政治的状況の反映をみていくのであろうか、あるいは石工などの系譜の違い、流域圏の違いなのであろうか、はたまた風土といった違いに最も原因があるのだろうか。

これについては、地蔵像の着衣などにも盆地の東西を分けるような状況が垣間見られるので、これらとあわせて今後の課題としておきたい。

六 六地蔵石幢の屋根形態

六地蔵石幢の屋根形態に連続性があるものと考へよさうである。さらに少林寺六地蔵石幢の地蔵像も、表現に多少違うところもみられるが、基本的には同一形態について整理しておきたい。平面及び側面

屋根形態	平 面								側 面				
	A1	A2	A3	B	C1	C2	C3a1	a2	b	c1	c2	c3	
長谷寺六地蔵石幢	○					○							
桃岳院六地蔵石幢		○				○							
小曾利六地蔵石幢	○	○				○							
地蔵院六地蔵石幢		○				○							
半觀音堂六地蔵石幢		○				○							
円光院六地蔵石幢			○					○		○		○	
甲府城跡六地蔵石幢				○					○				
普門院六地蔵石幢				○					○				
小松町東組道祖神場					○								
六地蔵石幢						○							
少林寺六地蔵石幢							○						

表2 屋根形態

桃岳院六地蔵石幢と峯觀音堂六地蔵石幢は、長谷寺六地蔵石幢と配列順序の違うものであるが、この二者に限ってみれば一つずれているだけで、その配列順序は同一のものといえるのである。さらに長谷寺六地蔵石幢などとの、経箱(1)と鏡(4)とが入れ替わった位置にあるだけで、他の配列は全く同じであることが合わせて指摘できる。おそらく両者の形態はよく類似する形態と考えられるものであつて、そこに順序を見誤った可能性を全く否定することのできないことを考えれば、長谷寺六地蔵石幢の配列が基本であったことをさらに強いものとする。

六地蔵石幢でみると限り、その配列順序がことごとく同一であり、強い規則性のもとで製作されたことが確認できた。これに比べ、一石二段の陽刻六地蔵板碑においては、資料が少ない点が危惧されるものの、比較した資料の中において同一の配列順序をみいだすことはできなかつた。ここに改めて同一の配列順序の考え方、きわめて希薄であったことを指摘できるようである。ただ、このよくな中にあっても右手が錫杖と左手宝珠(5)と右手が錫杖と左手が念珠(6)とは常に並列して影されており、これはどこまでも原則であったかのようみえるのである。そこに地蔵救済の特別なことが意識されての結果と考えることもできる。

四 六地蔵石幢の分布

六地蔵石幢の現在までに確認された例は、僅か一〇例と少ないが、これらの分布状況について触れてみたい。陽刻地蔵板碑、陽刻六地蔵板碑などの色濃くみられる北巨摩郡下に於いて六地蔵石幢の分布を確認できるのは、時刻的に最も新しいと考えられる少林寺六地蔵石幢のみである。この時期は陽刻地蔵板碑に比べてもやや後出と考えられるものであり、地蔵像に抽象化のみられるようになる直前の時期を想定できる。すなはち、六世紀初めからみられる陽刻地蔵板碑の造立が、一旦終焉してからのことのように考えられる。時期的には、六地蔵石幢の最も後出の時期になつて旧地に取り入れられたが、その後においては再び雜続的な造立にまでは至らなかつたこととなる。この原因としては、旧地に取り入れられる契機として弱

かつたこと、地域性の繋がりが希薄であったこと、あるいは閉鎖性による現象であったことなどがあげられるのかもしれない。

六地蔵石幢の分布地域の本体と確認できる地域は、南アルプス市である旧中巨摩郡芦安村、同八田村、北巨摩郡双葉町それに中巨摩郡敷島町といつた地域で、陽刻地蔵板碑の分布地域とは異なる地域も多い。だが、こと陽刻六地蔵板碑との分布地域とに限れば、ごく一部での重複がみられるのみで、かつ陽刻六地蔵板碑の分布域より南側に下がつた地域で、しかも線状に分布域が確認できる。これらに続く地域としては、甲府市、東八代郡一宮町、東山梨郡牧丘町といった盆地の東側で、地域にやや広がりがられる。特に駿河市以西の線状に分布する状況をみると、六地蔵石幢が道筋を中心として深くかかわりをもつて展開した可能性さえも垣間見られる。すなわち石仏を竿の上に載せ掲げる形態は、中世末ころの時期に造られた



第6図 六地蔵石幢分布図

長谷寺・桃岳院・小曾利・地蔵院・峯觀音堂六地蔵石幢の地蔵像をみると、これらもやはり頭部が大きく、かつ細も肩幅前後で、体部がやや短い傾向をみせている。陽刻六地蔵板碑の地蔵像は、頭部が比較的小さく、細身で長身といった形態が、一六世紀前半ころまでみられ、それ以降は体部が縮まり、袖が短い三角形状へと向かう傾向がある。陽刻六地蔵板碑において岩座のみられるのは、北巨摩郡高根町大林暮地陽刻六地蔵板碑以降で、さらにこれに續く時期の同町笑輪養福寺陽刻六地蔵板碑は、短い三角形状の袖をみせる。また、左胸前にみられるΩ状の袈裟は、一六世紀前半代ころによくみられる形態で、長谷寺・桃岳院六地蔵石幢には多少みられるところから、これらが小曾利・地蔵院・峯觀音堂六地蔵石幢より若干先行する時期と考えておきたい。おそらく長谷寺六地蔵石幢から峯觀音堂六地蔵石幢まで、一六世紀中ころに造られたものといえるのではないかだらうか。

円光院六地蔵石幢は、地蔵像の頭も小さく、細身で、左胸前にみられるΩ状の袈裟の形態が明確であり、長谷寺・桃岳院六地蔵石幢に近い時期と考えてもよさそうである。しかし、両袖の間に彫られた袈裟幅の上部にみられる一條の沈綱は、陽刻地蔵板碑、陽刻六地蔵板碑それに地蔵石仏(光背形)などにはみられないようである。ただ丸彫の地蔵阿弥陀立像などの中の一つの、牧丘町袖口の雲法寺地蔵立像に類似がみられる。これは小型の地蔵像で、両袖の間のほぼ中央あたりに「明金」と彫られたその上に、二条の沈綱が斜めに彫られている。この立像は形態的には一六世紀前半代の形態と考えられるもので、円光院とは同じ町内の比較的近距離の位置にあることから、この地域の特徴となるものかもしれないが、これからみると一六世紀前半代の後半ころに造られたと考えてもよさそうである。

三 地蔵像の持物と配列順序

一石一段の陽刻六地蔵板碑で、地蔵像の持物とその配列順序について検討したことがある。その結果は一石二段という制約によるのかもしれないが、配列の順序は上下、左右のどちらからみても、どれ一つとして同一順序をみせるものがなく、このことは陽刻地蔵板碑が一定の配列順序に則って、

配列の位置	1	2	3	4	5	6
六地蔵石幢名						
長谷寺六地蔵石幢	1	2	3	4	5	6
桃岳院六地蔵石幢	4	2	3	1	5	6
小曾利六地蔵石幢	1	2	3	4	5	6
地蔵院六地蔵石幢	1	2	3	4	5	6
峯觀音堂六地蔵石幢	6	4	2	3	1	5
甲府城跡六地蔵石幢						
黄門院六地蔵石幢						1
小松院東造祖神場						
六地蔵石幢						
少林寺六地蔵石幢	4	5	6	1	2	3
円光院六地蔵石幢	3	4	5	6	1	2

表1 地蔵像の配列順序

配列位置は石仏に向かって左から。右欄は不明。
1 経箱 2 右手錦杖、左手如意 3 合掌 4 銀
5 右手錦杖、左手念珠 6 右手錦杖

合掌、右手が錦杖で左手如意、経箱の六種類である(ただし右手が錦杖で左手如意の確定と、宝珠と念珠との明確な区別が今後必要と考えている)。

長谷寺六地蔵石幢は向かって左から経箱(1)、右手が錦杖で左手如意(2)、合掌(3)、鏡(4)、右手が錦杖と左手宝珠(5)、右手が錦杖と左手が念珠(6)という持物をもつ地蔵像の配列で、これを基準にして他の六地蔵石幢がどのような配列なのかみたのが表一である。それによると長谷寺六地蔵石幢と同一の配列順序をとるものは、小曾利六地蔵石幢と地蔵院六地蔵石幢があり、さらに円光院六地蔵石幢もそれでいてものの、基本的には同一の配列であることが確認でき、これらで検討した中の半数以上を占めることになる。少林寺六地蔵石幢も両脇の地蔵像の持物が分からぬものの、他の四つの地蔵像は同一の配列であることが確認されており、やはり長谷寺六地蔵石幢と同一の配列順序である可能性が非常に高い。また、

影られたものでないことを示しているものと考えたところである。それでは一石

ある。そこで一度検討を加えてみたい。

なお、地蔵像の判然としない甲府城跡、普門院・小松院東造祖神場の場合は、どのような様相を示すのであるか。以下若干の検討を加えてみたい。

なお、地蔵像の判然としない甲府城跡、

コ 円光院六地蔵石幢

東山梨郡牧丘町仙口の円光院にある。安山岩製。自然面を多少残すが、背は蒲鉾状に近い形態で、高さ二七・二七、幅三八・八七、奥行き一四センチほどを測る横長の長方形を呈する。上部の縁は左右の縁より出ない。龕の深さは二七・二七ほどで、上縁はその旧状をほとんど止めない。合わせて彫られる高さ一五・二七ほどとの地蔵立像は、それぞれの持物をもつて岩座に載って陽刻される。なお、地蔵像は龕の縁より僅かに突出し、下縁の上面（平面）の形態は平坦である。

地蔵像は撫で肩で、衲衣、袈裟、雲を着け、断面三角形状でV字状の襟、左胸前のU状の沈線などから通肩状の着衣である。袖は裾あたりで幾分窄まり、そのまま裾周りの裳となる。袖は中央の二つが左袖に袖口のおおきなV字状の窪みがみられるほか、一条の浅い沈線が袖口に沿って彫られる。両袖の間の沈線は再下段が要笠裙で、この裾より幅五・二七ほど足の沈線が垂下し、下端に突起の爪先が彫られる。

岩座は三角形の頂点を内側に向けた沈線で上下一分され、その中央に沈線が彫られ、さらに周辺に面取りなどが加えられる。

(二) 六地蔵石幢の年代

六地蔵石幢の概要に触れてきたが、つぎにこれらの造られた時期について考えてみたい。なお、いざれも紀年銘がみられないことから、陽刻地蔵板碑、陽刻六地蔵板碑それに地藏石仏（光背形）⁽⁵⁾などの比較検討になる。

まず、これらの中で最も新しい時期のものと考えられるのは、少林寺六地蔵石幢である。この地蔵像の頭部の比率は、体部に比べ非常に大きい状況は陽刻地蔵板碑において一六世紀後半代を少し下った時期ころより確認できるところである。さらに襟の形態についても、およそ一六世紀前半代の陽刻地蔵板碑では、首筋近くから胸の前に向かって合わざるものが通常の形態といえる。これに対して本例の場合の襟は、胸前が肌けるよう肩口から胸の前に向かって合わざる形態を見るという違いがみられる。襟の胸前が肌けるような位置への変化は、おそらく一六世紀後半代の抽象化

に伴う変化の中の一つと考えられるのである。丁髷状の襟の形態については、陽刻地蔵板碑において一六世紀前半代の後半ころよりみられるようになる。しかし、本例のように細身の形態となるものは、一六世紀後半代になつてからよく目に付く状況を窺えるところである。これらからみれば本例の造られた時期は、一六世紀後半代を考えるのが妥当であろう。

次に小松町東道祖神場六地蔵石幢は少林寺六地蔵石幢ではないが、頭部が多少大きくなりえるばかりでなく、体部についても甲府城跡六地蔵石幢や普門院六地蔵石幢と比べて偏平化の進んでいることを窺えるのであり、甲府城跡六地蔵石幢や普門院六地蔵石幢に比べ、より後出の時期が考えられる。北巨摩郡武川村上三吹造祖神場にある六地蔵石幢の地蔵像の輪郭は、極めて本例に近い。しかし、地蔵像の部位の形態については、本例とは上腕部や袖形態において違いのみられるところである。上三吹造祖神場六地蔵石幢の造られた時期については、中世末なのか江戸時代のごく初めの時期のか明確にできない。だが、本例の襟が段差で造られる形態は、上三吹造祖神場六地蔵石幢との間に類似点がみられることを考えれば、一六世紀後半代を想定するのが妥当と言えよう。形態を輪郭部だけからみてみると、一宮町末木の長昌寺にある六地蔵石幢（重制）に近い。長昌寺六地蔵石幢の地蔵像は体部自体も短く、かつ幅広のもので、これには永禄三年（一五六〇）銘が刻まれていることから、先の年代について大きな間違いはないであります。なお、少林寺六地蔵石幢との時間的関係は、地蔵像の頭部の大きさからみれば本例の小さいことが明白であり、また、足（腰）などの形態も本例は不明であるが、少林寺六地蔵石幢では抽象化された段階とみられるものであり、この限りでは本例がわずかに先行するものかと考えておきたい。

甲府城跡六地蔵石幢や普門院六地蔵石幢の地蔵像は、撫で肩で表の丈も長く、長身の地蔵像といえる。この点を陽刻地蔵板碑のなかでみると、大きくなつてからころを境として撫で肩から肩が角張つたもの、あるいは首筋から直ぐに垂れてしまう肩などといった変化をみせることから、これらには一六世紀前半代の後半ころの時期を考えておきたい。

できない。

ケ 少林寺六地蔵石幢

北巨摩郡須玉町大藏の少林寺にある。安山岩製で、ほぼ全体の形を残す。

高さ三五・四^{セイシキヨウ}、幅五四・一^{セイシキヨウ}、奥行き一五^{セイシキ}を測る。基部に納穴は無く、かわりに正面と背面の下縁に竿に挟み込む高さ四・七^{セイシキヨウ}、幅二・二^{セイシキヨウ}、奥行き四^{セイシキ}ほどの切り込みがある。

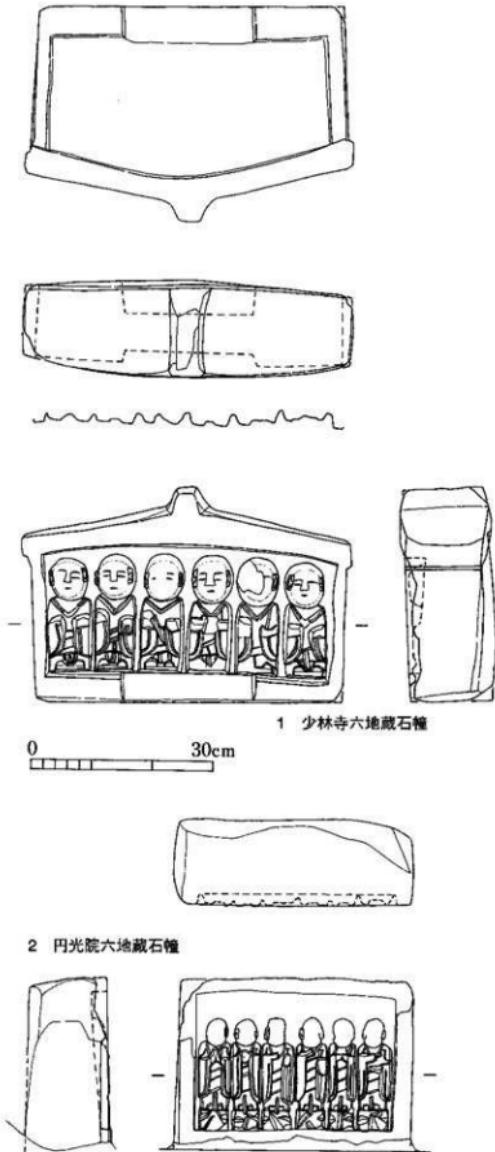
塔身の上部に切り妻形(山形)の屋根が、一体で彫られる。また、屋根は龕の上縁と屋根の下縁とが区別のない、両者一体の形態である。屋根の頂部には丁髷状の桟が付き、屋根の左右先端は一^{セイシキ}ほど突出する。屋根の背面も塔身より縁のように僅かに突出し、あわせて左右、下段に同様な縁がまわる。

塔身に彫られた龕は深さ三・五^{セイシキ}ほどで、縁から底に向かって僅

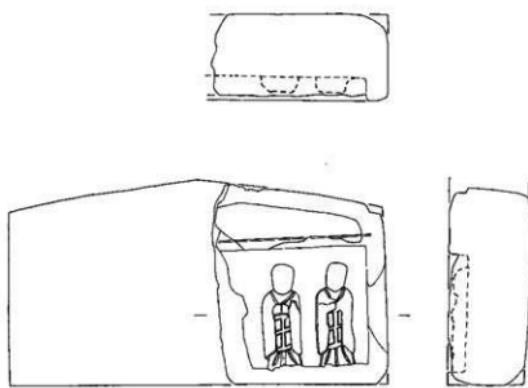
かに内側に迫り出す。
龕の中に高さ一九・五^{セイシキ}ほどの地蔵立像が陽刻される。地蔵像は頭が肩以下に比べ目立つて大きい。

地蔵像は欠損部も大きいが、衲衣、袈裟、袋などが確認でき、断面三角形形状でV字状の襟、左胸前の沈線などから、通肩状の着衣である。短い袖は裾あたりで幾分窄まり、そのまま裾周りの姿となる。袖口のV字状の襟みは確認できない。持物について左から二つ目が右手が錫杖と左手宝珠、三つ目が右手が錫杖と左手が念珠、三つ目が経相、五つ目が右手と左手の袖の高さが違うことから右手が錫杖で左手が如意で、一つ目と六つ目とは明確にならない。

袈裟裾から沈線が垂下し、その両脇などから内側に向かって窄まるよう

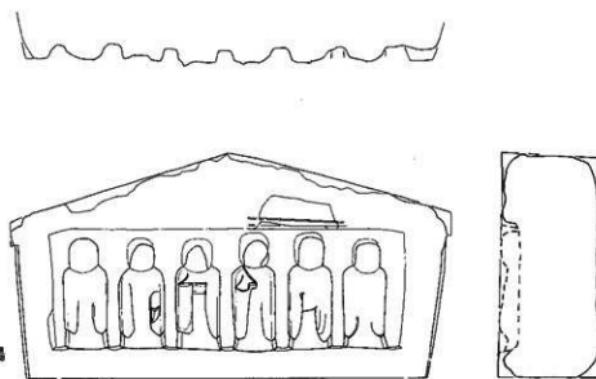


第5図



1 普門院六地藏石幢

0 30cm



2 小松町東組道祖神場
六地蔵石幢

第4図

武田家滅亡後に豊臣秀吉の命により浅野長政などが、同地にあつた・蓮寺を移転して城築された。安山岩製で、三分の二ほどを大きく欠損する。地蔵像などから復元すると高さ三九・七センチ、幅六八・七センチ、奥行き一八・七センチを測る。

基部に納穴があるのか否か不明。
塔身の上部に切り妻形(山形・むくり破風)の屋根が、一体で彫られる。屋根の左右先端は突出しないと考えられ、背面も塔身と一体である。龕の上縁は一・一七・七センチの幅で、屋根側が段で低くなる。さらに僅かな間を挟んで屋根の縁へと立ち上がる。だが、屋根の下縁が龕の上縁に平行して彫られたものか、あるいは屋根の上縁と同形態(山形)なのは詳らかにできない。塔身の龕は内側に迫り出すように深さ九・七センチほどに彫られ、合わせて、高さが二二・五センチほどで、それぞれの持物をもった撫で肩の地蔵立像が陽刻される。

地蔵像は欠損部も大きいが、衲衣、袈裟、袋などが確認できる。断面二角形状の襟、右胸前に連弧文状の沈線が彫られるなど、通肩状の着衣である。袖は裾あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周りの袋となる。持物は向かって右端の地蔵像の左袖裾が段状をみせ、かつ右手が右胸前にあるようみられ、錫杖と宝珠なし念珠、二つ目の地蔵像は胸前に横方向の沈線が彫られることから絹箱と考えられる。両袖の間に袈裟の低い凸帯があり、格子状に彫られ、下端の袈裟裾からは幅広の沈線が垂下し、その両脇に「ハ」の字状に聞く細い沈線で足が彫られ、この間に爪先が彫っていたのである。

ク 小松町東組道祖神場六地蔵石幢

甲府市小松町の東祖神場にある。安山岩製。全体の形をとらえられるが、剥落等が著しく、形状の確認できない部位もある。高さ二六・八センチ、幅七一・二センチ、奥行き一六・二センチを測る。基部に納穴はみられない。

塔身の上部に切り妻形(山形・むくり破風)の屋根が、一体で彫られる。屋根の頂部に棟はなく、合わせ勾配の屋根となる。屋根の左右先端は塔身より一・七センチほど突出するが、背面は塔身と一体である。

左右の袖下あたりに段差で袈裟裾がみられ、この裾から幅広の沈線が重なり、その両脇に「ハ」の字状に聞く細い沈線で足が彫られる。

キ 普門院六地蔵石幢

東八代郡一宮町大沢の普門院にある。安山岩製で、三分の二ほどを大きく欠損する。地蔵像などから復元すると高さ三二・五センチ、幅六二・七センチ、奥行き一三・六センチを測る。基部に納穴があるのか否か不明。

塔身の上部に切り妻形(山形・むくり破風)の屋根が、一体で彫られる。屋根の左右の先端は突出せず、背面も塔身と一体である。龕の上縁は屋根側が段で低くなる。さらにその先是屋根の縁で再び立ち上がり、屋根の正面形態は屋根の縁と同形態と考えられる。

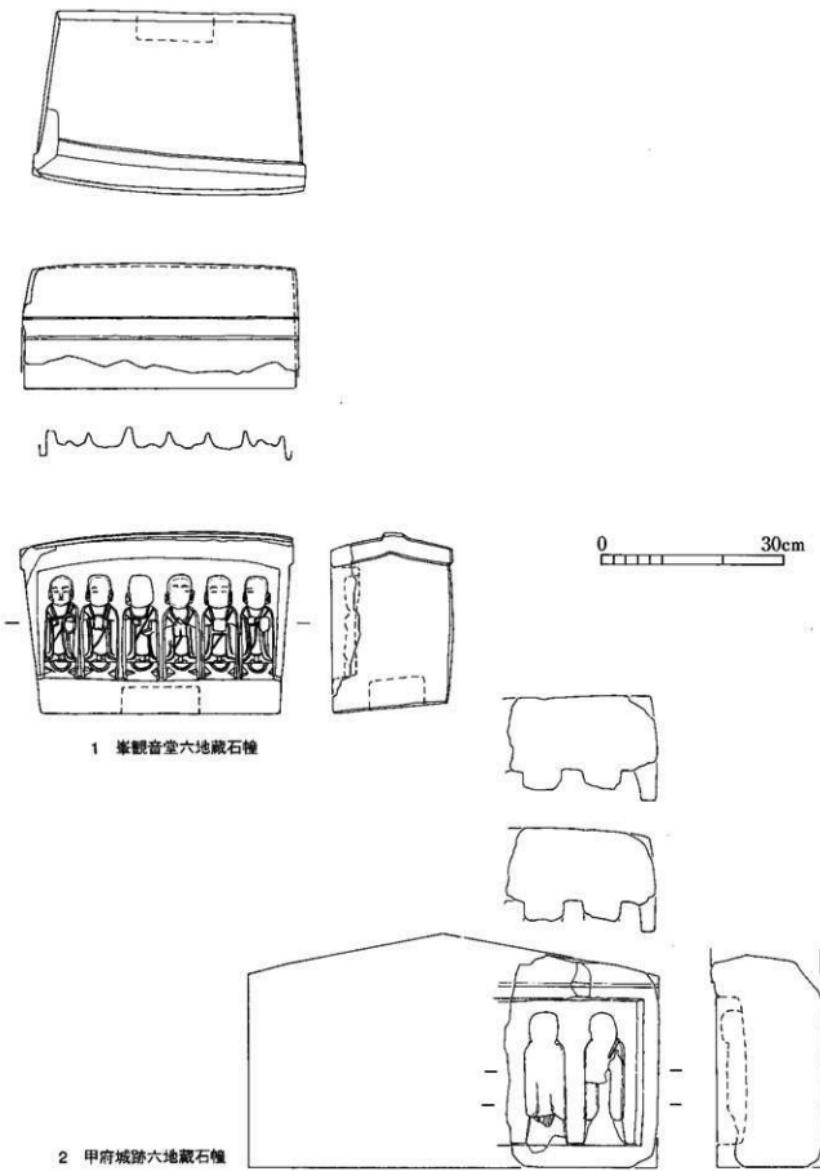
塔身の龕は内側に迫り出すように深さ三・五センチほどに彫られ、合わせて

高さが一八・七センチほどで、それぞれの持物をもった撫で肩の地蔵立像が陽刻される。

地蔵像は欠損部も大きいが、右胸前の深い沈線などから、衲衣、袈裟、袋などを着けた通肩状の着衣である。袖は裾あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周りの袋となる。袖は基本的には単袖と考えられるが、向かって左から二つ目と五つ目の地蔵像の左袖に袖口と考えられる断面三角形状の窪みがみられる。また、四つ目の地蔵像は、襟が段差に彫られているようである。持物について確定できないが、向かって左から三つ目のものが絹箱の四つ目が合掌のようにみられる。両袖の下端の袈裟裾の段、足などは確認

陽刻される。

地蔵像は欠損部も大きいが、衲衣、袈裟、袋などが確認できる。断面二角形状の襟、右胸前に連弧文状の沈線が彫られるなど、通肩状の着衣である。袖は裾あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周りの袋となる。持物は向かって右端の地蔵像の左袖裾が段状をみせ、かつ右手が右胸前にあるようみられ、錫杖と宝珠なし念珠、二つ目の地蔵像は胸前に横方向の沈線が彫られることから絹箱と考えられる。両袖の間に袈裟の低い凸帯があり、格子状に彫られ、下端の袈裟裾からは幅広の沈線が垂下し、その両脇に「ハ」の字状に聞く細い沈線で足が彫られ、この間に爪先が彫っていたのである。



第3図

面は上部から下部に向かってほぼ同じ幅で、かつ薄い。この塔身に内側に迫り出すように深さ三・七・五などの龕が彫られ、合わせて、高さが一九・七・五の前後で、それぞれの持物をもつて岩座に載る地蔵立像が陽刻される。龕の下縁正面に幅二・一・一、深さ一・四・五などの山形の沈線が五個ほど連なって彫られる。龕の下縁の上面(平面)は平坦である。

地蔵像の肩は撫で肩で、衲衣、袈裟、袋を着ける。断面三角形でV字状の襟、左右胸前に浅い沈線が肩などから彫られ、通肩状の着衣である。袖は裾あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周囲の袋となる。袖は向かって右側二つの地蔵像の左袖がV字状に窪む袖口。他の袖には浅い一条の沈線が袖の縁に沿って彫られる。左右の袖下あたりに段差で袈裟裾が彫られ、この裾から袋に足が板状に彫られるが、爪先はみられない。

岩座は幅二・一・一、深さ一・四・五などの沈線で上下二段に区画され、さらに上段に数本の沈線が彫られる。

工 地蔵院六地蔵石幢

北巨摩郡双葉町志田の地蔵院にある(町誌には興津寺とある)(3)。安山岩製で、全体的に欠損部が製で、全体的に欠損部などがある。高さ三七・五・五、幅四二・七・五、奥行き二・五・八を測る。基部に長さ一二・八、幅九・七・五などの長方形で、深さ四・四・五などの

形で、深さ九・七・五などの納穴がある。
塔身の上部に、やや角度のある切り妻形の屋根が一体で彫られる。屋根の棟はほぼ平らだが、両端の突出は不明である。屋根の正面の突出は、上から下へ行き二・五・八を測る。基部に長さ一二・七・五、幅八・五などの長方形で、深さ九・七・五などの納穴がある。

塔身の上部に、やや角度のある切り妻形の屋根が一体で彫られる。屋根の棟はほぼ平らだが、両端の突出は不明である。屋根の正面の突出は、上から下へ行き二・五・八を測る。基部に長さ一二・七・五、幅八・五などの長方形で、深さ九・七・五などの納穴がある。

中巨摩郡敷島町牛久の峯觀音堂にある。安山岩製で、全体的に欠損部がある。高さ二・九・五、幅四四・八、奥行き二・〇・五を測る。基部に長さ一一・八、幅九・七・五などの長方形で、深さ四・四・五などの

病穴がある。

塔身の上部に、やや角度のある切り妻形の屋根が一体で彫れる。屋根の棟は両端で少しだが、弧状をとるが、その両端の突出はない。屋根の正面は不明だが、後面は僅かに突出する。塔身は正面が上部から下部、平面が前面から後面に向かって窄まる矩形をとる。側面は不明。この塔身に内側に迫り出すように深さ四・四・五などの龕が彫られ、合わせて、高さ一・四・五などの龕が、後面は僅かに突出する。塔身は正面が上部から下部に向かって窄まる矩形で、側面も上部から下部に向かって窄む形態である。この塔身に内側に迫り出すように龕を彫り、合わせて、高さ一・五・五などの龕が、それの持物をもつて岩座に載る地蔵立像が陽刻される。

地蔵像は体部に比べ頭がやや大きくなり、肩は撫で肩で、衲衣、袈裟、袋を着ける。断面三角形の凸帯でV字状の襟、左右の肩や胸前に浅い沈線が、袖は裾あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周囲に彫られる。袖は裾あたりで幾分窄まり、そのまま裾周囲の袋となる。袖は向かって右端と左端の二つの地蔵像の左袖がV字状に窪む袖口が、他の袖には沈線を縁に沿って彫る。左右の袖下あたりに段差で凹弧状の袈裟裾が彫られ、この裾から袋に足が板状に、その下端に爪先が彫られる。

地蔵像の肩は撫で肩で、衲衣、袈裟、袋を着ける。断面三角形状でV字状の襟、左右の肩や胸前に浅い沈線がみられ、通肩状の着衣である。袖は裾あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周囲の袋となる。袖は向かって

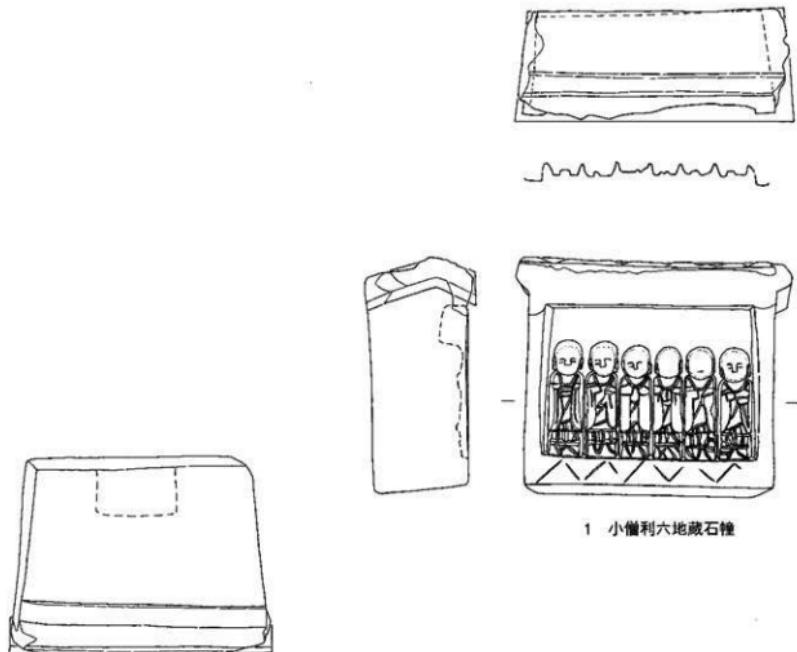
右側二つの地蔵像の左袖にV字状に窪む袖口がみられるが、他の袖には沈

オ 観音堂六地蔵石幢

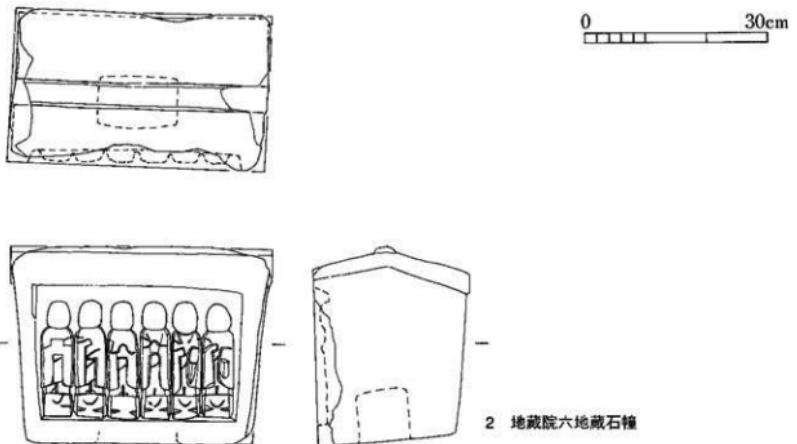
この裾から袋に彫られた幅二・二・五、深さ二・一・五などの沈線が足で、その両脇に爪先が薄く台形状に彫られる。

岩座は、中央の左右に三角形の頂点を内側に向けた沈線で二分され、その上部に半円形の浅い沈線を彫る。

甲府市丸の内一丁目の甲府城跡から出土した。甲府城跡は天正一〇年、



1 小僧利六地藏石幢



2 地藏院六地藏石幢

第2図

ある。高さ三二・八、四九・四、奥行き三三・七を測る。基部に深さなど大きさや形状は分からぬが、柄穴の存在を確認できる。しかし、この柄穴は現在使われておらず、直径一八・五、高さ九二・七の竿の上に挿まれるように樹立している。このため塔身の正面及び背面の下部の中央部が抉られるように割られている。

塔身の上部に、切り妻形の屋根が一体で彫られる。屋根の棟は両端が上に反り、その先端は僅かに突出する。屋根の正面は塔身より突出するが、背面では塔身内に納まる。また、正面の縁のやや下方に幅一・九、深さ一・九の柄穴が縁に沿って彫られ、屋根の上部とその下部構造とを表す。塔身は正面、平面とともに長方形であるが、側面は上部から下部に向かって少しづつ窄む形態である。この塔身に縁から底に向かって内側に迫り出すよう深い三・四、五程度の龕が彫られ、合わせて、高さ一八・五、前後でそれぞれの持物をもつて岩座に載る地蔵像が陽刻される。龕の下

正面に幅二・四、深さ一・九ほどの山形の沈線がそれぞれ二つ彫られてゐるが、中央部の割られた部分を考えると、間隔から一〇個ほどの山形が連なっていたものと考えられる。また、龕の下縁の上面(平面)には、地蔵像の載る岩座の前に幅二・五、奥行き二・五、深さ二・二ほどの長方形の沈線が彫られ、これも地蔵像ごとにあつたのである。

地蔵像の肩は撫で肩で、衲衣、袈裟、袋を着ける。断面三角形状の襟、右でV字状の襟、右胸前に浅い沈線、左胸前に連弧文状などの沈線が彫られ、通肩状の着衣である。袖は袴あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周りの裳となる。袖は向かって右側二つの地蔵像の左袖にV字状に窪む袖口」、他の袖には浅い一条の沈線には浅い一条の沈線といふより段差で袖の縁に沿って彫られる。左右の袖下あたりに段差が袈裟裾に彫られ、この裾から裳に足(膝)が板状に彫られるが、爪先は彫られていない。

岩座は幅二・四、深さ一・九ほどの沈線で上下一段に区画され、さらに上段に数本の沈線が彫られる。

イ 桃岳院六地蔵石幢

南アルプス市野牛島(旧八田村)の桃岳院にある。安山岩製で、屋根や塔

身の一部を欠損する。高さ三〇・四、幅四四・一、奥行き一五・七を測る。基部に直径一五・五、深さ一〇・七ほどの柄穴がある。

塔身の正面及び背面の下部の中央部が抉られるように割られている。

塔身の上部に平坦に、近い切り妻形の屋根が一体で彫られる。屋根の棟はほぼ平らで、その両端が僅かに突出する。屋根の正面は、塔身より突出すると考えられる。一方、背面は塔身内に納まる。塔身は正面、平面とも長方形であるが、側面は上部から下部に向かって少しづつ窄む形態とみられる。塔身には縁が内側に迫り出すよに龕が深さ三・五ほどの龕が彫られ、合わせて、高さが一七・六、前後で、それぞれの持物をもつて岩座に載る地蔵像が陽刻される。地蔵像の載る岩座の前にそれぞれ幅二・五、奥行き一・七、深さ一・九ほどの長方形の龕みが彫られる。

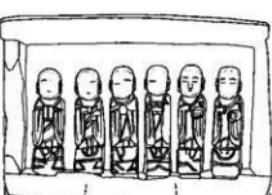
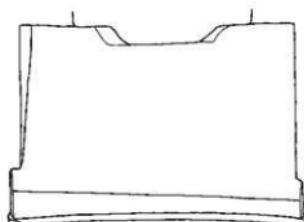
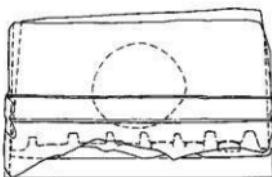
地蔵像の肩は撫で肩で、衲衣、袈裟、袋を着ける。断面三角形状の襟、右胸前に浅い沈線、左胸前に連弧文状などの沈線が彫られ、通肩状の着衣である。袖は袴あたりで幾分窄まり、僅かな段を経て裾周りの裳となる。袖は向かって右側二つの地蔵像がV字状に窪む袖口」、他の袖には浅い一条の沈線が袖の縁に沿って彫られる。左右の袖下あたりに段差で袈裟裾が彫られ、この裾から裳に足が板状に彫られるが、爪先はみられない。

岩座は幅五・一、深さ一・九ほどの沈線で上下一段に区画され、さらに上下段にも縦方向を基調とした沈線が彫られる。

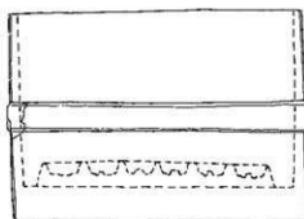
ウ 小曾利六地蔵石幢

南アルプス市小曾利(旧吉安村)の森本釜笠氏屋敷地内にある。安山岩製で、屋根の一部などを欠く。高さ二九・五、幅四五・七、奥行き一七・八を測る。基部に納穴が存在するようだが、セメントで固定されているため詳細は不明。

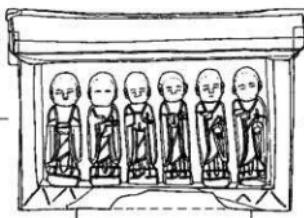
塔身の上部に、やや角度をもつ切り妻形の屋根が一体で彫られる。屋根の棟は両端が上に僅かに反り、その先端は僅かに突出する。屋根の正面は塔身より突出するものと考えられるが、背面は塔身内に納まる。塔身は正面が長方形、平面が後ろに窄む矩形である。屋根も同様に矩形である。側



2 桃岳院六地蔵石幢



0 30cm



1 長谷寺六地蔵石幢

第1図

山梨県の中世石幢

一 六地蔵石幢(単制) —

- 一 はじめに
- 二 六地蔵石幢の概要と年代
- 三 六地蔵石幢の分布
- 四 六地蔵石幢の分布

- 五 地蔵像の足形態
- 六 六地蔵石幢の屋根形態
- 七 おわりに

坂本美夫

甲府盆地における中世の陽刻六地蔵板碑⁽¹⁾は、現在までのところ北巨摩郡下の須玉町、高根町といった盆地北西部の狭い地域に、分布の上に極めて局地的な傾向をみせている。また、須玉町の東隣の北巨摩郡明野村には一石二仏形式の陽刻六地蔵板碑⁽²⁾がみれ、さらに、遠か東側の地域である山梨市、御坂町といった地域には、須玉町、高根町、明野村のものとまた違う一石二仏形式の六地蔵石仏⁽³⁾の分布が確認され、地域性をよく表しているようである。これらはいずれも西八代郡市川大門町から、南巨摩郡増穂町を結ぶ線の以北に濃密に分布する六地蔵石幢(重制)の中に、局地的に分布するという特徴をもっている。

今回取り上げる六地蔵石幢も、同様に六地蔵石幢(重制)の中に局地的に分布するという特徴をもつものである。特に陽刻六地蔵板碑とは近接するものの、全く分布域を異にすることが確認できる。さらに、これらの東側にも形態を異にする六地蔵石幢(あるいは石仏龕)がみられるなど、小地域ごとの増加が確認できる。これらが何によるのかは今後の課題として、概要と分布状況等について触れてみたい。

今回取り上げたものは、一石一段で龕部に六地蔵が陽刻されるものである。これからすれば、一石一段六地蔵石仏⁽⁴⁾として扱ってもよいものと考

えた。しかし、後述のように、長谷寺例のような切妻形の屋根をもつものの基部には柄穴があり、さらに同形態のものにも柄穴のあることが確認できる。この柄穴は、本来龕が竿の頂部に樹立されて建立されたことを明らかにするもので、その形態から六地蔵石幢とするのが適切といえよう。小松町東道祖神場例には、柄穴を確認できないことから石仏龕とするのが適切かと思われる。だが、後述のように挿み込んで樹立する方法も確認されていることから、これらも六地蔵石幢として取り扱うこととした。

六地蔵石幢には笠、龕、中台、竿などからなる重制のものと、竿以外のものがみられない單制のものとの二種類ある。今回取り上げたものは、竿の上に石仏龕を載せるだけの簡素な造りから、單制の部類に分類しておきたい。なお、文中で單制という呼称を付けると繁雜となるため「々付けないが、他の形式のものを記述する場合には、その^二重制などの呼称を付すこととした。

二 六地蔵石幢の概要と年代

(一) 概要

ア 長谷寺六地蔵石幢

南アルプス市檜原(旧八田村)の長谷寺にある。安山岩製で、ほぼ完形で

2004年3月31日 発行

研究紀要 20

編集・発行 山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

東八代郡中道町下曾根 923

TEL 055-266-3881・3016

印 刷 横河グラフィックアーツ(株)

BULLETIN
OF
YAMANASHI PREFECTURAL
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY
&
ARCHAEOLOGICAL CENTER
OF YAMANASHI PREFECTURE
NUMBER 20
CONTENTS
MARCH 2004

Palaeolithic Pebble Clusters and Arranged Stones Excavated at Tenjindo	Yasuo Hosaka	1
A Study of Jomon Age Barrel-Shaped Vessels Antheropomorphic Decoratiois	Makoto Watanabe	7
The Descendant of the Potteries with handle - like Decorations of Spiral Patterns	Hirokazu Kobayashi	17
A Study of Ancient Pasture in Koma County Kai Province	Rikei Imafuku	25
The Medieval Stone Buddhas of Yamanashi Prefecture - <i>Rokujizo-Sekido, Six Jizo Devotional Buddhist Pillars</i> -	Yoshio Sakamoto	68(1)